

平成24年4月号～平成25年3月号掲載分

復興ビジョンと 復興計画を策定

ひとつずつ課題解決、
一歩ずつ前へ

この時期の復興に向けた主なうごき

- H24. 4月 浪江町復興ビジョンを策定
- 6月 公的施設の先行除染開始、全世帯に放射線測定器を配布
- 6月 「復興に関する町民アンケート」を実施（第2回）
- 10月 浪江町復興計画（第一次）策定と住民説明会を開催（11月まで14会場）
- 11月 特別地域内除染計画（浪江町）が公表
- 12月 区域再編に伴う住民説明会を開催
- H25. 1月 平成24年度 浪江町住民意向調査を実施



二本松市で開催された浪江音楽祭2012（8月18～19日）



浪江小学校（二本松市）で2年ぶりとなる運動会を開催（10月13日）



浪江in福島ライブラリーきぼうが完成（8月）



牛来 美佳さん(川添)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：3月10日 「平成24年4月 広報なみえ掲載」

故郷・浪江への思いを歌に込めて

—この福島の厳しい現実を風化させないためにも—

牛来さんは、長女の凜音ちゃん(6歳)と2人で群馬県太田市に暮らしています。

震災後は、郡山市や新潟県新発田市などを20名を越える親族が一緒になって移動し、共同生活を送っていました。現在は、福島に住むご両親とも離ればなれで暮らしています。この3月には、浪江への思いを込めて牛来さんが初めてレコーディングした曲『浪江町で生まれ育った。』がリリースされます。

あの地震のあと、私たちは親戚が一緒になって郡山市や新発田市などでそれぞれ2週間ずつ過ごしました。4月末には郡山に戻ったのですが、原発事故のことが気になり、私と一人娘の凜音だけ、土地勘のあった太田市に5月末ごろ移り住みました。時折、車で両親のいる福島に戻りますが、震災前とは異なり、みんなバラバラの生活です。た



▲美佳さんと凜音ちゃん
HPも見てみてね
<http://mica-gorai.jimdo.com/>

だ、同じアパートには福島から避難された方がいます。その中に浪江で毎年開催されるストリートミュージックフェスタでお世話になっていた榎谷宏美さんご夫妻もいます。いつも相談に乗っていただけることが本当に心強いです。

震災直後は、家族、友人などがバラバラになったことが信じられず、心の整理がつきませんでした。そんなとき、ふるさと浪江への思いを歌いたい気持ちが強くなり、一つの詩を作りました。郡山市のライブハウスの店長さんの後押しもあり、この3月にオリジナルCDを出すことになりました。私のような者にでも何かやれることがある。そんな思いを伝え、浪江の皆さんに前向きになってほしいということ。そして、被災地の外の皆さんにはこの福島・浪江の厳しい現実を忘れてほしくないという思いからこの曲を作りました。ぜひ多くの方に聞いていただきたいです。

浪江から遠く離れて暮らしてみても、あらためて自分のまちがどんなに素晴らしいところだっ

たかを実感しています。私は春の桜祭りの桜と花火をもう一度見たいです。桜の上に広がる花火がとても美しかったことが懐かしいです。海もある、山もある、そしておいしいものがたくさんあった浪江町。新鮮なお魚や野菜を浪江ではご近所さんで譲り合っていたのに、こちらではあたり前のことですが毎日お店で購入しなければなりません。浪江は本当に豊かなまちだったのだと思います。

私はまだ仕事も得られず不安が多いですが、とりあえずはこの春の子どもの小学校入学が一番の気がかりです。娘も親としての私も初めての経験です。子どもはよく親を見ています。だからこそ、自分自身がしっかりして、前向きに元気に生活していかなければと思っています。



松本サチ子さん(請戸)

取材者：特定非営利活動法人山形の公益活動を応援する会・アミル 齋藤、柴田
取材日：3月13日 「平成24年4月 広報なみえ掲載」

「また請戸の海を眺めたい」

松本さんは、昨年1月に夫の征夫さんを亡くされ、3月13日の四十九日の準備をしていた矢先の震災でした。息子さんと一緒に3月18日に山形市に避難し、征夫さんの新盆を迎える8月に借り上げ住宅に入り、現在は家族2人で暮らしています。

私たちの家は、隣に2mくらいの堤防がありその隣はすぐ海で船がたくさん泊めてあります。ふつうは地震が起きたときテレビで津波警報が流れば堤防にあがって海の様子を見ますが、その日はあがりませんでした。これは絶対に津波がくると思いましたが。地震に備えて用意していた貴重品を持って、向かいのおばさんに声をかけて、一緒にすぐに大平山に避難しました。漁協組合に勤めていた息子とは、サンシャイン浪江で無事に会うことができました。その後、息子と親戚と一緒に津島、川俣町へ避難して、3月18日に娘の親戚のいる山形県山形市に避難しました。着るものは避難所ではとんどいただきました。サンダル履きで着の身着のまま避難したのでありがたかったです。

見つけたときは嬉しかったです。山形は今年大雪で、出かけるのが大変でした。気候の穏やかな浜通りを思い出します。でも、車の修理が終わり戻ってきたので、雪が溶けたら自分で運転して出かけたいと思っています。山形では、避難所で一緒に過ごした皆さんと温泉に行つて話ができる会を楽しみにしています。先日、福島の仮設に住む友人や親戚に会い食事ができました。親しい人とあいさつしたりお茶飲みしたりとか、そういった絆がないのは不安ですが、娘夫婦や孫も夏に遊びに来てくれ、息子も山形で一緒に生活できるので今は安心です。

家前の堤防にあがって見る請戸の海を思い出します。また見たいです。それが一番。家の2階から見る朝日があがってくる風景がとてもきれいです。あと、夜の森公園の桜や河川敷の近くの桜を見てお花見をしたいです。浪江に戻り、みんな元気で帰られて良かったといいたいですね。



▲現在お住まいのアパートで



鈴木酒造店長井蔵 鈴木 大介さん(請戸)

取材者：浪江町役場 近野

取材日：2011年12月17日 「平成24年4月 広報なみえ掲載」

2011年内に「壽」を届けたい

浪江町に180年以上続く造り酒屋である「鈴木酒造店」。酒蔵は津波で流失してしまったが、県の試験場に蔵の酵母が残っていた。その酵母を使い、7月上旬には南会津の蔵を借りて約2,000本の「壽」を出荷する。

その後本格的に製造拠点を探していたところ、山形県長井市に休止している酒蔵があることを知る。最後まで福島県内での再開を模索したが、何としても2011年のうちに浪江の皆さんに「壽」を届けたいとの思いから、その酒蔵を引き継ぐことを決意。12月19日には新たな蔵で仕込んだ「壽」の初出荷を迎えた。



▲大介さん（前列左）と社長の市夫さん（前列右）
弟の荘司さん（後列左から3番目）らと一緒に。

■新天地への葛藤

南会津の酒蔵で製造した約2000本の「壽」は、町民の皆さんにとっても喜んでいただきました。そして、「また壽が飲みたい、造ってほしい」という励ましの言葉をたくさんいただき、本格的な製造を決意しました。福島県内での再開を目指し、新たな拠点探しを始めましたが、福島県内で新たに酒蔵を建設する場合、建設から製造認可まで一年以上かかることがわかりました。福島県内で再開したいと

いう気持ちの一方で、いち早く町民の皆さんに「壽」を届けたい。なんとか2011年内に新酒を出荷したいという強い思いもありました。

ちょうどそのころ、山形県長井市に昨年まで酒造りをしていて、休止した酒蔵があることを知りました。早速見学に行ったところ、作業動線が考えられていてとても使いやすい造りで、しかも最低限の改修ですぐ酒造りを再開できるようになっていました。福島県内での再開は最

後まであきらめられませんでした。浪江町の方に向けて、「元々の酒蔵で造っていた」「一生幸福」という銘柄を造っています。地元のお酒を引き継いで造っていくことで、山形県の皆さんにも応援していただきたいと思っています。

■酒造りの再開

新たな酒蔵が決まり、すぐに改修を行いました。まったく土地勘のない地域でしたが、地元の方や以前からお世話になっていた方に協力いただき、

仕込みができるまでになりました。改修に合わせて、震災前から構想していた、通年で仕込み・出荷ができる冷蔵設備も整備しました。

蔵の改修と並行して、11月上旬から弟夫婦とともに仕込みを始めました。仕込みでは山形県の米を使うことになりましたが、今後は浪江のころと同様に契約農家から仕入れた酒米を使う予定です。また、長井は水が良いので、水の良さが出ていると思います。

この酒蔵では「壽」の他に、地元の方に向けて、「元々の酒蔵で造っていた」「一生幸福」という銘柄を造っています。地元のお酒を引き継いで造っていくことで、山形県の皆さんにも応援していただきたいと思っています。浪江町の蔵は津波で流失して、警戒区域が解除されてもすぐに戻れるかどうかはわかりません。しかし、浪江に戻るために酒造免許は浪江に残したままです。そのためにも、長井市での事業を早く軌道に乗せたいですね。



(株)マツバヤ
代表取締役社長 松原

茂さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 長沼・嶋原

取材日：3月10日 「平成24年4月 広報なみえ掲載」

人の力の大きさとつながりを感じて 前向きに再オープン

昭和2年に日用・雑貨品店として曾祖父が創業された松葉屋は85年の歴史を持ちます。サンプラザは昭和54年に開業し今年で33年目。地元に着し、子どもからお年寄りまで浪江町民の憩いの場でした。4代目の松原茂さんは、さまざまな困難にも常に前向きに人を大事にする気持ちで進み、3月8日にみんなの希望を乗せて新たなスタート切りました。



▲スタッフの皆さんと一緒に（中央が松原さん）

震災時は店にいました。店はガラスが一部割れたのみで被害は少なく、夕方には臨時休業にしたものの、翌日9時に集合と従業員に話しました。その後、避難を余儀なくされて、家族と一緒に原町、飯館、福島、山形、新潟と移りました。5月に郡山に仮事務所を置いたため、新潟の家族と離れて単身生活をしています。

はじめは店舗の再開は難しいと思っていましたが、ベテランスタッフは会社と一体化してやっている方たちで、お店を立ち上げようという強い思いがありました。5、6月から継続的に物件の情報収集を始めました。その一方で、7月に南相馬市にカーブスをオープン。9月には福島、二本松、本宮の仮設住宅で、カタログから注文を取ってお届けする御用聞き販売と、テントでの衣料・野菜の移動販売を始めました。また、10月に本部事務所を二本松に移転し、11月にネットショップも立ち上げ、2月にはカーブスを相馬市に移転しました。

サンプラザを船引でオープンすることにしたのは、まとまった売り場面積とバックヤードがあること、人口が浪江町と同じくらいでお客様の雰囲気も似ていて、市場性・マーケットの可能性を感じたこと、そして、ふねひきパークさんが「一緒にやりましょう!」と、バックアップを申し出てくれたことでした。オープンにあたっては、専門性が高

いスタッフを集めなければならなかったのですが、中通りに避難していたスタッフも多く、声を掛けると一緒にやりましょうと言ってくれました。スタッフの力は大きかったですね。スタッフたちの頑張りには本当に感謝しています。あらためて企業は人で成り立っていると感じました。スタッフもお店をやる喜びを感じてくれます。

商品や工事、システム作りなどさまざまな苦労を乗り越えてオープンしたので、あとは前へ進んでいくだけです。これは、ゴールではなくスタートだと思っています。拠点が一つでき、これからの可能性が広がってきました。何カ月かけて品揃えも充実させていきたいです。ネット関連の事業も伸ばしていきたいし、仮設住宅等での御用聞き販売も進めていきたいと思っています。オープンときは、浪江や双葉郡のお客さまからたくさんのお言葉をかけていただきました。サンプラザを始め、皆さんの復興しようという気持ちのプラスになってくれれば一番うれしいです。



福島県

山田 文孝さん・利子さん(井手)

取材者：浪江町役場 長沼・鳴原

取材日：4月11日 「平成24年5月 広報なみえ掲載」

心まで温まる川上温泉に皆さんお越しください

浪江町では、奥さまの利子さんのご長男夫婦、三つ子のお孫さんとの7人でにぎやかな毎日を過ごしていた山田さん。現在は、福島市の借上げ住宅で奥さまとの2人暮らしです。今、落ち着いてきた中で、お世話になった方々への恩返しと自分のできるボランティア活動をしていきたいと考えていらっしやいます。



▲川上温泉の社長(前列左)、おかみさん(前列左から2番目)と一緒に。(後列一番左が文孝さん、前列右から2番目が利子さん)

■文孝さんのお話

震災で自宅は入れないほどの被害を受けて、家族全員が納屋で一晩過ごしました。翌日から避難生活となりましたが、6カ所目が土湯温泉の旅館、川上温泉で4月17日から4カ月間、夫婦で身を寄せました。川上温泉には、浪江の方が30数人一緒に知り合いもいました。当初は、食事が終わればみんな部屋に戻

る感じでしたが、そのうち全員が何かしらの手伝いをするようになりました。社長とおかみさんを始め、従業員の方々は4カ月間ずっと変わらない温かいもてなしをしてくれて、本当に心からありがたく、その人柄には驚かされました。一時帰宅の引率のための役場の臨時職員募集があり、社長が募集のパンフを黒板に張りながら勧めてくれたのがきっかけで、7月から週2、3回仕事をしました。朝6時に出勤するのに合わせて、梅干し入りのおにぎりやおかずを作って社長自ら持たせてくれて本当に助かりました。

8月20日に福島市の借上げ住宅に引っ越し、川上温泉を出しましたが、旅館が忙しいときにはアルバイトとしてお膳の片付けや掃除、布団の片づけなどしています。今までは派遣会社の人材を使っていたようですが、2食付で高くつくはずの私たちに声を掛けてくれる気遣いがあります。たいですね。2人でお風呂に入りに行くのも楽しみで、帰りにはおかずを持たせてくれたりします。孫と一緒に住めないのは寂し

いですし、浪江に戻りたいと思います。今落ち着いてきた中で考えるのは、これまでお世話になった川上温泉の皆さんに恩返しをしたいということと仮設の見守り隊や草刈りなど自分のできるボランティアをしたいということ。川上温泉は心が温かい気持ちの良い人ばかりで、お風呂はのんびりできて最高に安らぐ旅館です。たくさんの方に来ていただいてその良さを味わってほしいと思うのでぜひお越しください。

■利子さんのお話

岳温泉でのボランティア活動で知り合った二本松市の高野津希子さんの紹介で着物のリフォームや知り合いから頼まれて内職をしています。

また、楽しみなのは高野さんからの誘いもあり、安達運動場仮設住宅でのちぎり絵や押し花などの作り方を教えてもらいに外かけて行くことです。

仮設には、何人か顔見知りの方もいて、住んでいなくても「また来てね。」と声をかけてくれるのがうれしいですね。

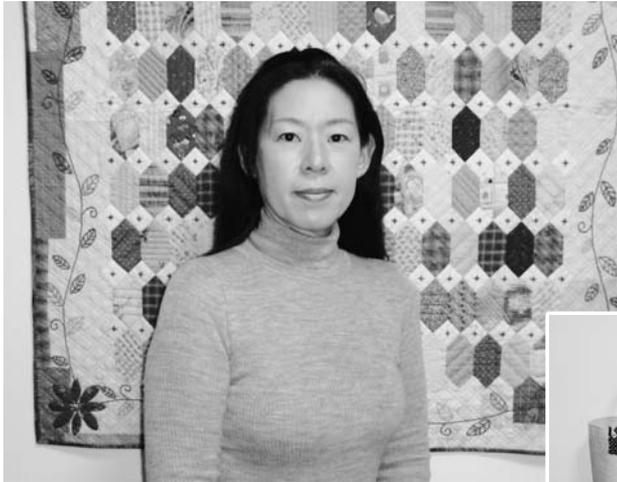


小泉 泰代さん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：4月19日 「平成24年5月 広報なみえ掲載」

浪江の復興は、小さな取り組みの積み重ねから



▲趣味のパッチワークキルトをバックに

▶避難先の青森県むつ市で習い創った「こぎん刺し小物」



震災後は、いわき市に1カ月、青森県むつ市に3カ月避難した後、8月から仙台市太白区に在住。仙台市在住の知人が少ないため、少し心細い日々を過ごされているそうです。

震災直後は、近くに住んでいる知人に助けられ車に同乗して避難。そして宿泊までさせていただきました。また、避難先のむつ市では、近くの工房に大変お世話になり、くだものの摘み取りや海の幸を楽しみに、よく連れ出してもらったものでした。当時はどう動いていいか分かり

ませんでした。だからこそ今、改めて感謝しているところです。

現在は、仙台市太白区に住んでいます。地下鉄の駅にも近く便利。美術館に行ったり、唯一の仙台在住の知人と会って話をしたり、娘が住む二本松市や実家の家族が避難しているいわき市に出かけたりしていると、あつというまに日々が過ぎていきます。

私にとっては、近くに住んでいた親友と離れたことが今でもショックです。子育ての楽しさや苦労をともにしてきましたが、ようやく子どもも親元を巣立ったので、ちょうど一緒に旅行に行ったりさまざまな楽しみの計画を考えていたところだったからです。こんなはずではなかった、という思いでいっぱいです。

浪江を離れたからこそ思うのは、自分は浪江しか知らないんだな、帰りたい気持ちでいっぱいだな、ということ。きれいな海や山、自然がいっぱいあり、いい町です。昨年は、二本松市を会場に復活し開催した十日市に行ってみました。浪江で開催していたときよりは小規模

でしたが、懐かしく楽しめました。このように小さくてもいいから裸参りや大堀相馬焼のせと市もぜひ実施してほしいなと思います。祭りを絶やさないで若い人たちに頑張ってもらいたいです。

私の娘は二本松で仕事をしています。夫からは、姉妹みたいな親子だな、なんて言われたりもします。彼女は、震災を機に一人暮らしをし、日々初めてのことに挑戦し、頑張って仕事をしています。そんな様子を見ると「復興を担う大事な一人だな。」と感じるとともに、たくましくそして心強く感じ「頑張れ！」と応援したくなります。だからこそ、私もグチを言わず頑張ろうかな、と思えるのです(笑)。



加藤喜志子さん(川添)

取材者：(特活) くびき野NPOサポートセンター 新保

取材日：5月15日 「平成24年6月 広報なみえ掲載」

浪江の皆さんに会いたい

浪江町で美容師として働いていた加藤さん。
昨年9月から、近所に住んでいる娘さん夫婦と
一緒に新潟市北区で生活しています。



▲ふるさとの浪江をなつかしむ加藤さん

震災当日、美容室で仕事をしていたときに地震が発生しました。家族全員の無事を確認できましたが、あの当時は何がなんだからわからないまま、ただ避難することしかできなかったのを覚えています。当時、私たち夫婦は福島県内に残り、一緒に住んでいた娘夫婦は茨城県ひたちなか市へ避難したため、家族離れ離れになってしまいました。その後、娘夫婦とも合流し、昨年8月まで新潟県長岡市などで避難生活を送り、昨年9月から

新潟市北区のアパートに住んでいます。

避難中は各地で多くの方々に助けられました。皆さんのあたたかい気持ちが本当にうれしかったです。

現在、主人が仕事の関係で福島県二本松市の方に単身で住んでいるため別々の生活をおくっています。少し寂しいですが、すぐ近くに娘夫婦が住んでいるので安心です。孫たちの世話をしたり、一緒に遊んだりするのが毎日の日課になっています。

今年の4月から孫たちが幼稚園に上がり、自分の時間が少し取れるようになったので何か新しいことを始めてみようと思っています。また美容師として復帰したいという気持ちもありますが、今までお客さんだった方たちも各地に避難されてしまい、店舗を構えたり設備をそろえたりすることを考えるとなかなか難しいのが現状です。

現在は住むところも食べるものも十分であり、新潟市は生活するのに何の不自由もなくいいところです。しかし、気持ちが少し内向的になってしまうこと

も多く、浪江で大好きな美容師の仕事をしていたころの生活を思い出したり、浪江の皆さんと顔を合わせてたわいもないおしゃべりをしたいなと思ってしまいます。震災以前は、浪江の自宅の庭で土いじりやガーデニングをしたり、浪江の皆さんを外で見かけたりして元気そうだなとわかると、それだけで自分も元気になっていました。

私は生まれも育ちも浪江町です。やっぱりふるさとっていいなと思います。浪江の人たちの笑顔、十日市、盆踊り、コスモスの花が咲く風景・・・いつかふるさと浪江に帰れる日が来ると願っています。



埼玉県

松本 幹夫さん(権現堂)

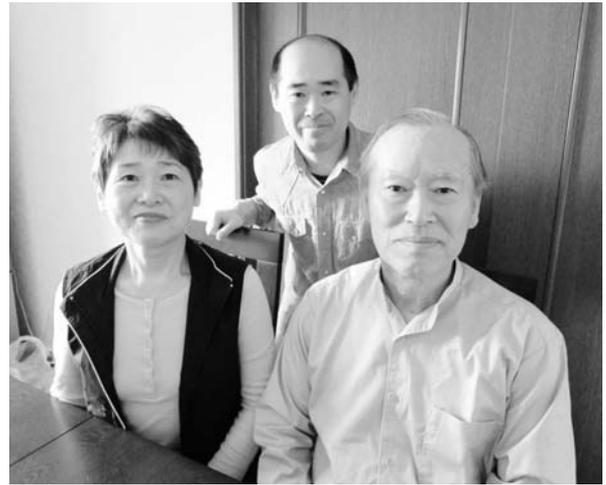
取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：5月13日 「平成24年6月 広報なみえ掲載」

生活再建を模索する日々

松本幹夫さんは、妻のミドリさん、そして息子の渉さんとともに埼玉県久喜市の借り上げアパートで生活しています。震災から1年数カ月の間、国・県・町から示されるはずの今後の方針を待ち続けています。

私たちは震災後、川俣町の避難所からさいたまスーパーアリーナに双葉町民などと一緒に移り、昨年5月からは2次避難所となる埼玉県熊谷市のビジネスホテルで生活していました。暑い夏を挟み10月までホテルで過ごしましたが、長期にわたる狭いホテルの一室での生活は厳しいものでした。6カ所目の移動となる現在の久喜市に移ってからは、生活環境もだいぶ落ち着き、近くにある図書館や公園を利用したりするなど、のどかな環境の中で静かに暮らしています。



▲左から、ミドリさん、渉さん、幹夫さん

浪江町当時は、修行から戻った息子と一緒に権現堂で時計店を営み、地域の皆さまに支えられて生活していました。同じ仕事を今の場所で再開することは難しいと考えています。地域の皆さんとの繋がりも希薄になってしまったため、先日も参加した「なみえのしゃべり場」のような浪江町民の交流の機会は本当にありがたいです。ただ、そうした交流会に集まる方が、私たちも含めいつも同じような方々であることは少し気になります。

浪江は自然豊かな町でしたが、離れてみて分かることですが、山の幸や海産物が豊富に手に入っていたように思います。商売をやっていた立場からみても、浪江町は仙台圏でも福島圏でもいわき圏でもなく、経済が町の中で完結していた魅力的な町でした。そんな町に、地震と津波、そしてあのような原発事故が起こるなどとはまったく思っていま sense ませんでした。それまでの何不由ない暮らしがすべて奪われたことが悔やまれてなりません。息子で三代目となる店でしたが、馴染みのお客さまに支えられてきたこれまでの生活を懐かしく思い出すのと同時に、浪江町で以前のような商売が再開できるのか不安でなりません。毎月の『浪江のこころ通信』では、各地で前向きに生活されている町民の皆さんの声を多く目にしますが、とてもそのような気持ちにはなれずにおります。町の復興ビジョンでは、各地にバラバラに暮らす町民を福島県内数カ所に集めた「町外コミュニティ」という案が出ているようですが、乗り越えるべき課題も多いように感じます。今後の町の方針がどのようなのか見極めたいです。



牛渡 愛香さん(幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：5月9日 「平成24年6月 広報なみえ掲載」

今を頑張りながら、楽しく過ごしたい

請戸にあった夫、三四郎さんの実家で地震と津波に遭い、ご家族と2人の子どもたちと避難した愛香さんは、昨年6月から現在の福島市の借上げ住宅で、震災後に出産した長女 望愛ちゃんと愛香さんのお母さん(洋美さん)、夫と長男の龍之介君、次男の虎之介君の6人で暮らしています。



▲左から、三四郎さん、虎之介くん、龍之介くん、愛香さん、望愛ちゃん

■愛香さん

震災発生時、夫は職場研修で福島市に滞在中でした。私は当時保育士をしており、仕事を終えて子どもたちを迎えに請戸に立ち寄っていました。高台に逃れて夫の両親も子どもたちも無事でしたが、実家は津波で無くなってしまいました。

その日は夫の義姉の家を頼りましたが、原発事故が起きたの

で、津島にある私の祖母の家に避難しました。その後、叔母がいる福島市や伊達市、今の家に程近いアパートなどに移り住みました。浪江の仮設住宅が笹谷あたりにできるという話を聞き、その近所にしよう、今の住まいを決めました。

学生時代の友人が数人、福島市に住んでおり、とても助けられています。震災当初、「ガソリンさえ手に入れば、いつでも手伝いに行くからね。」と言われてくれたことが忘れられません。

私も夫も浪江生まれの浪江育ちで、福島市の夏の蒸し暑さと雪の多さには本当に戸惑いました。やはり、浪江に帰って親や子どもたちと暮らしたいとは思いますが、将来のことよりも、家族そろって暮らせる「今」を大事にしたい、楽しく過ごしたい、いつも思っています。

■三四郎さん

私は双葉地方の消防署(双葉地方広域市町村圏組合消防本部)に所属しており、現在は川内村にある出張所に勤務しています。休日前後は、福島市から約2時

間かけて職場に通っています。

震災当時、福島市にある県消防学校で研修中でしたが、当日様子を見に帰れたので、家族とは義姉の家で会うことができました。

帰町に関しては、国や町の方針に従おうと思っています。私たちはまだ若いですから、急いで判断をしなくてもいいと思っています。電気や水が止まったままでは幾世橋の家の修理はできませんが、状況がよくなれば、町に戻り、直して住もうと思っています。

しかし、悶々と考えてもすぐに答えが出るわけではありません。それよりも、今、いかに楽しく過ごせるかを考えています。

家族も応援しに来てくれましたが、昨年10月に行われた第5回福島県市町村対抗軟式野球大会に出場しました。残念ながら福島市に1対2で敗れて準優勝に終わりましたが、離れ離れになっている仲間たちと再会できたこと、津波で亡くなったメンバーを偲ぶことができたことに大きな意味がありました。来年は優勝を狙いますよ。



福島県

佐藤 弘子さん(権現堂)

取材者：へるめす編集工房（元気玉プロジェクト） 榎木

取材日：5月14日 「平成24年6月 広報なみえ掲載」

楽しく遊ぶ子供たちの姿が、 前向きな気持ちの応援に

震災後にはご主人の実家から浪江町津島地区のつしま活性化センター、いわき市、塙町へと移動しながら避難。現在は会津若松市北滝沢のアパートで、お子さんたちの笑顔に励まされながら、ご家族で暮らしていらっしゃいます。



▲お子さんたちと一緒に。

震災当日は、上ノ原地区にある夫の実家に家族5人で避難、待機しました。原発事故があり、翌日避難命令が出たので津島地区へ移動し、避難所になっていたつしま活性化センターへ身を寄せました。しかし、原発事故の不安があり、同じく避難していた夫の両親と私たち家族、近所の方たちと20名近くで車数台に分乗して、いわき市の知人を頼って移動し、そこで3日間ほ

どお世話になりました。

その後、向かった塙町の公民館で、私の両親とも再会し合流することができました。これからのことを思うと不安でいっぱいでしたが、このころはまだ、1週間ほどたてば浪江の家に帰れるだろうと軽く考えていたのです。ですが、兄が仕事でお世話になっていた方がアパートを用意してくださり、3月19日から会津若松市で生活することになったときには、「もしかしたら、すぐには帰れないかも。」という気持ち心がよぎっていました。子どもたちに、学校が変わることや、帰れないことをどう説得すればよいか夫と悩みました。皆それぞれに避難しましたので、友人とも気軽に会うことが難しくなりましたが、近所の方々から親切にしてください、落ち込んだり、不自由さを感じたりすることもなく過ごせることを、とてもありがたく思っています。避難の際にも多くの方にお世話になり、今も感謝の気持ちでいっぱいです。

会津若松市にもいろいろなお祭りがありますが、やはり浪江

の十日市のにぎわいが思い出されます。露店の列が遠くまで並んで、毎年家族みんなの楽しみでした。小さな町でしたが、気候も温暖で、海も山も近く自然豊かな暮らしやすい町だったことを思うと残念でなりません。こうして離れてみると、楽しいこと、すてきなところがいっぱいあったことを改めて思います。

あれから1年が過ぎ、子どもたちも新しくできたお友だちと楽しく遊びまわっています。震災に遭い、避難生活を体験したことでも心にもいろいろなことを考え、負担もあつただろうと思います。気持ちを切り替えて前向きに楽しく毎日過ごしている姿に、私も夫も励まされています。

野球好きな長男は、浪江でも少年野球チームで頑張っていました。今回、会津若松の少年野球チームに入団しました。これからの季節は、たくさん試合も行われるので、家族で応援に行くのを楽しみにしています。



鈴木 宏孝さん・キミ子さん(権現堂)

取材者：へるめす編集工房（元気玉プロジェクト） 鈴木

取材日：5月14日 「平成24年6月 広報なみえ掲載」

「会津地方なみえ会」発足で絆づくりを

町内で食堂を切り盛りし半世紀という鈴木さんご夫婦は、埼玉県に一時滞在後会津若松市へ。小さなお孫さん2人を連れての避難はミルク不足の問題に一番頭を痛めたそうです。

新町で店を開き50年になる「やよい食堂」の主人です。震災当日は昼の繁忙時間が過ぎ、一息ついたところで地震に遭いました。店そのものはどうにか無事でしたが、店内はラーメンスプの入った寸胴鍋がひっくり返り、食器もすべて落ちてしまい大変なありさまでした。

12日朝に避難指示が出たので、1歳半と2歳10カ月の孫を連れ、息子の運転で津島の親戚を頼り3日間お世話になったあと、川俣町を経て埼玉県の長女宅にて20日間滞在し、3カ月を会津若松市東山温泉で大熊町の方と過ごしたのち、現在の借り上げ住宅に入る事ができました。

二次避難先のホテルでは夜、6カ月の孫がむずかり、妻は毎晩、背におぶったまま寝ていました。孫が大きくなったらこの話をしてあげたいと思っっています。この1年があったことやこれから、孫子の代まで語り継いでいって欲しいというのが、私たちの願いです。

次女とは仕事の事情で1カ月間会うことができませんでしたが、それ以外はずっと家族離れ

離れにはならず、別世帯ではあります。ともに同じ借上げ住宅に住むことができたのは幸いなことです。

会津地方には現在1000人ほどの浪江町民が滞在というところで、横のつながりを持たなくてはと、この4月19日に「会津地方なみえ会」を発足したばかりです。少しずつお声がけをしています。絆づくりに役立てていただければと考えています。

借り上げ住宅に入って間もなく1年。会津の雪深さには驚きました。ただ、それだけに春の訪れはうれしかったです。昨年ほどとも花見どころではありませんでしたが、今年はさっそく「会津地方なみえ会」メンバーとともに鶴ヶ城公園にブルーシートを広げて料理を持ち寄り、花見をしました。請戸川リバーラインでのにぎやかな花見イベントと重なり、まぶたに懐かしく思い出されます。

二本松で行われる町のイベントにも、バスをチャーターしてみんなで行ければいいね、とかさまざまなアイデアを出し合っています。会津地方にお住まいの方は、どうぞご参加ください。



▲宏孝さん(左)とキミ子さん(右)



▲かわいいお孫さんたち



吉田 絵美さん(酒田)

取材者：(特活) 山形の公益活動を応援する会・アミル 寺澤・柴田

取材日：5月12日 「平成24年6月 広報なみえ掲載」

大切な家族と一緒に



▲家族そろって。
左から、お母さんの三重子さん、絵美さん、理人くん(9カ月)、夫の大祐さん、るなちゃん(小2)「皆さん、山形県赤湯市に来たときはお店に遊びにきてください。」

吉田さんご家族は、現在山形県南陽市に家族5人で暮らしています。夫の大祐さんは勤務地である新潟県から週末に帰ります。

震災時、妊娠中だった絵美さんは昨年8月に理人くんを無事出産。新たな家族が増えました。

母の三重子さんは7月に、山形県赤湯市内に山形に嫁いだ娘さんと一緒にスナック「エルペ」をオープンする予定。

避難している福島の人たちが交流し、励みができる場所を作ったり、福島や浪江の名産品などをPRしたりと、浪江町復興ため少しでも役に立てればとお話ししていました。

今なら冷静に考えられるのですが、震災時は妊婦だったので、「ここにいたら危ない、まずお腹にいる子どもと自分の子どもと逃げなきゃ。」ともうパニックになっていました。ですが、12日朝の避難指示の後、姉の嫁ぎ先のお姑さんたちから「すぐ山形に来なさい。」と言ってもらい、その日に南陽市に避難し、その後1カ月半お世話になりとても感謝しています。南陽市役所で避難場所の相談にのっていただき、地区の方もいい人ばかりで落ち着いて暮らしています。娘のるなは、南陽市の小学校に入学し2年生になり、友だちもたくさんできました。先生も良い方で安心して通っています。

浪江にいたときの友だちは、それぞれ避難先も遠くなかなか会えず寂しいですが、頻繁に連絡を取っていることで避難先で頑張っている状況などを教えてもらっています。みんな頑張っているから自分も頑張ることができそうです。浪江町役場から子どものための情報をもらえるとありがたいです。

昨年、一時帰宅してきました

が、変わってしまった自分の家や町の姿を泣きながら見ました。町に戻れないことは感じていますが今後自分たちはどうしていけばよいか、町の除染や復興のことなど、たくさんのことを考え不安もあります。

山形も住みやすい所ですが、やはり地元は良かったです。日に日に強く思います。浪江は、海も山も近くて住みやすく、30年間暮らしたたくさんさんの思い出があります。今は姉の近くに来たということうれしく親も一緒なので、自分たちの大切な家族がそばにいる南陽市にいるつもりです。子どもたちが大きくなったらいつか浪江町に連れていきたいと思っています。



安倍 由恵さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：5月19日 「平成24年6月 広報なみえ掲載」

娘が請戸の田植え踊りを練習中。 7月のお披露目が楽しみ！

震災後は、猪苗代や埼玉など何度も引っ越しを重ね、昨年7月から仙台市泉区のマンションに家族4人（夫、娘2人）で住んでいます。震災1カ月後に生まれた娘さんもすくすくと育ち1歳に。

昨年の7月中旬から仙台市泉区に住み始めました。それまでは夫と離れて暮らしていたので、家族で暮らせる喜びを感じて過ごしています。週末になると、仕事のために広野町に住む父や会津若松市に住む母、福島市に住んでいる祖母たちが仙台に集まり、ほっとする時間を過ごしています。孫である私の娘たちの成長を楽しみにしてくれていて、そんな父たちの姿を見るのが好きです。

■浪江町請戸を伝えていきたい

長女は「請戸の安波祭の田植え踊り」の練習の真っ最中。7月に東京の明治神宮で披露する機会があるので、それに向けて毎日練習しています。これも、踊りを覚えるためのDVD制作や配布、発表会の段取りなど、佐々木繁子さんや渡部忍さんらがご尽力してくださるからと感謝しています。今は離れてしまったものの、こうやってお世話になっていると、以前住んでいた請戸では、近所の方々がみんな父母・祖父祖母のように娘を育ててくれたことを思い出します。

震災1カ月後に埼玉に避難していたときに生まれた次女は、

浪江町や請戸を知りません。どうしたら浪江や請戸を知ってもらえるか、伝えることができるか考えているところです。震災前には、保育士として仕事をしていたので、当時の職場の同僚に電話をして子どもの成長について聞いてもらったりアドバイスをもらったりもしています。心強い存在です。

■浪江高校ソフト部で集まりました！

避難してからは友人やお世話になった方となかなか会うことができませんが、浪江高校ソフト部時代の友人や監督と連絡を取り合ったりしています。全国大会に出場したときのことや遠征に行っていた思い出を語り合ったり、友だちはどこにいてどんな暮らしをしているのか教えあったり…。「今年の秋ごろにはみんな集まりたいね。」と実現を夢見ているところです。

そんな中で、5月のゴールデンウィークに

は友人らと郡山市のカルチャーパークのイベントに、趣味である雑貨づくりで製作したものを持参し出店しました。わいわい楽しく友人らと過ごせました。東京や福島、会津などばらばらになつたしまった友人とも今後も会う機会を作っていきたいです。今後は、しばらくは仙台住まいかなと思っています。これ以上暮らしが悪くならないで、子どもに不自由なく元気に過ごせる環境で育ててあげたいですね。今一番大事にしていることでもあります。



▲娘さんの成長が日々の楽しみ。左から、陽菜ちゃん、由恵さん、歩花ちゃん。友人や親族から届く差し入れやプレゼントを抱えながらパチリ！



今野 友廣さん(津島)

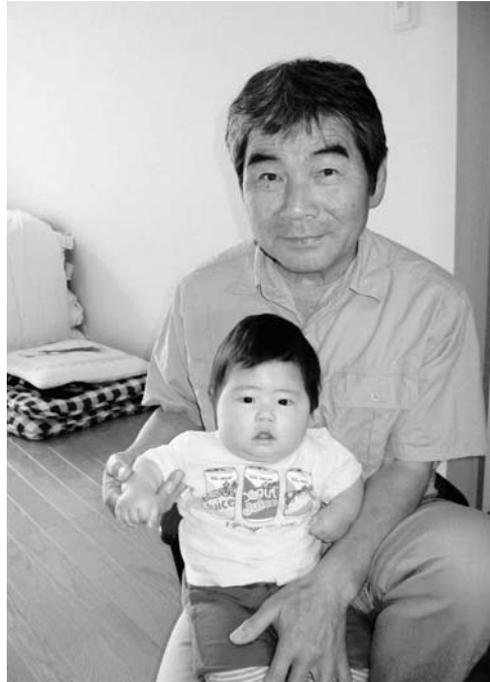
取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：5月17日 「平成24年6月 広報なみえ掲載」

前向きに暮らすことを心がけています

避難先を何度か変え、昨年4月から、今の都営住宅に住んでいる今野友廣さん、あや子さんご夫婦。娘さんとお孫さんたちも同じ都営住宅に住んでいます。

「津島にいたら、山菜摘みをしていたころだなあ。」と2人で話しています。津島は標高400メートルほどの山間にあり、酪農や農業を営んでいる人たちがほとんどでした。私は、兄たちと一緒に石材業を営んでいました。原発事故後、「浪江町の西側へ避難して。」という役場の指示で、大勢の人たちが津島に避難してきました。2日間ほど、避難してきた人たちに炊き出しをするなどしていました。津島が計画的避難区域に指定されるまでは、放射線量が高い状



▲昨年誕生したお孫さんと一緒に。

態になつているとは誰も思いもせませんでした。もつと早くに正確な情報がもらえられたらと、今でも強く思います。郡山市に嫁いでいた娘の比呂美は、2人目の子どもを妊娠中でした。おなかの子と3歳になる上の子のことを考えると少しでも安全な場所に避難したいと、3月17日に娘たちと一緒に福島を出ました。数力所の避難先を経て、4月1日に、現在住んでいる都営住宅に入居、昨年10月には、娘が無事に男の子を出産、ほつとしました。娘と2人の孫たちは同じ都営住宅の別棟に住んでいるので、孫たちの面倒を見ながら生活しています。

3棟ある都営住宅には、福島や宮城、岩手から118世帯の人たちが避難してきていて、避難者交流会がときどき開催されます。交流会や区役所主催のイベントなどには、できるだけ参加するようにしています。自転車で浅草や日本橋まで出かけたリ、ペランダに置いたプランターで、野菜を育てて楽しんでいきます。近くには商店街もあり便利ですが、工夫をしないと単調な

生活になつてしまっています。豊かな自然に囲まれた以前の暮らしとは比べようありません。帰ることができるのなら津島に帰りた、ここでの暮らしは「仮の住まい」と感じています。今の楽しみの一つは、川俣町で毎年10月に開催される「コスキン音楽祭」に向けての演奏練習です。6年前にできたフォルクローレのサークルに夫婦そろって参加、演奏を楽しんできました。数力月に一度開催される練習には、福島県内外に避難している10数名のメンバーが集まります。車で片道4時間ほどかかり大変ですが、欠かさず参加しています。

福島を遠く離れての生活ですが、夫婦2人、元気に暮らしていければと思っています。



きよはし薬局駅前店 佐藤 ^{のぶ} ^か 伸哉さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 長沼・嶋原
取材日：5月21日 「平成24年6月 広報なみえ掲載」

三春から“きよはし”の名前に思いを込めて

浪江町に「きよはし調剤薬局」をオープンしてから5年半。地域の方々とのつながりができてきた矢先の震災で、スタッフも患者さんもばらばらになりましたが、3月5日に三春町で薬局を再開。「浪江町を感じられ、気軽に来てもらえれば。」と薬局の名前を「きよはし薬局駅前店」とし、三春町から「なみえ」を発信しています。

震災時は、きよはし調剤薬局で仕事をしていたのですが、翌日から西病院に病院のスタッフと一緒に残って、入院患者さんのために薬を作り、手伝いをしていました。3月14日に自衛隊のヘリコプターが来て、夜中まで患者さんを搬送し、15日に明るくなってから三春町に避難しました。三春町に来てからは、さくら調剤薬局とみはる調剤薬局で仕事を手伝いました。三春町にも多くの避難者がいて、4月、5月は朝から夜中までフル回転の日々でした。津島診療所や岳温泉、仮設住宅にもお薬を届けていました。

その後、縁あって「薬局を新しく作ろう。」というお話をいただき、三春町で薬局を再開することになりました。名前を決めるときに社長が「きよはし」の名前を残しましょう。」と言って、名前を「きよはし薬局駅前店」に決め、3月5日にオープン。オープン前には、「ここでやっても浪江とは違うし、これでいいのか。」という気持ちになったこともありました。事業を再開した方に多かれ少なかれある気持ちだと思いますが、「みんなに元気を！」という思いはあっても、揺れ動く心の中、歯を食いしばってやっているのではないかと思います。「きよはし調剤薬局」という同じ名前をそのまま使わなかったのは、浪江町に戻ったら、またいつでもその名前前で再開できるように登録を残しているからです。本来の「きよはし調剤薬局」は、長期の休みに入りますという気持ちでやっています。

うれしいことに、三春町にあっても「きよはし」という名前が懐かしいと遠くからやってくる方もいます。小さい薬局でも色々なドラマがありました。名前だけでなく、たくさんの方の思いのかけらが寄せ集まったものが「きよはし」という名前に込められている気がします。

震災後、ばらばらになった患者さんと手紙のやりとりを始めました。今では700通ぐらいになり、手紙を書くことはできないからと電話をくれる方もいて、紙とペンと電話で薬局を続けていたんです。手紙のやり取りは、今後も続けていきたいですね。

もともと青森出身の私でも浪江町への愛着がありますから、

浪江町で生まれ育った方々はもっと強い思いがあると思います。これからもここに「きよはし」があることを伝え続け、浪江町の方が立ち寄って、「懐かしいね」とお茶を飲んで集える場所になればいいと思っています。



▲「きよはし調剤薬局」から持ち出した看板が掲げられています。

▲スタッフの皆さんと一緒に。真ん中が佐藤さん。社長の濱田博夫さん(左)は「三春町にも『なみえ』があるよ」と発信していきたい。」とお話ししてくださいました。



白瀬美智男さん(田尻)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：6月3日 「平成24年7月 広報なみえ掲載」

浪江の心や経験を 今の生活に活かしたい・伝えたい

白瀬美智男さんは、妻の優子さん、そして息子の清尉さんとともに京都市の借り上げアパートで生活しています。浪江に居たころ、趣味としていたウォーキングや川柳を活かし、現在の土地で前向きに生きようと心がけています。



私たちは震災後、福島市内や娘宅のあるいわき市を移動し、去年の4月末に府営住宅の空き情報だけを頼りに現在の京都市に移ってきました。文化も風土も異なる初めての土地に來たわけですが、1年以上暮らしているなかで色々な活動にも取り組めるようになりました。1年前の春の桜の花は記憶にないのですが、今年の桜はとても美しく見えました。それだけ、気持ちの整理がついてきたのだなと実感しています。例えば、京都は史跡の豊富なまちということも

あり、現在は史跡案内のNPO団体の会員として活動しています。また、なるべく地域の生活に溶け込もうと自治会活動には積極的に参加しています。今日も草刈りの共同作業をしました。ただ、こちらでは土に触ることがないですね。そんなとき、浪江の生活は本当に豊かなものだったことが思い起こされます。何よりも地域の皆さんのつながりが強いところでした。私の暮らした大堀地区や田尻行政区は、子ども会育成会と連携した行事など、昔からの世代と若い世代が一緒になった地域づくりを行っていました。個人的には、野菜づくりや溪流釣り、パークゴルフやウォーキングなどスポーツに興じたり、楽しい毎日でした。でも、ふり返って悔やんばかりいでも何も前には進みません。なるべく外に出て歩いたり、活動をしたり、情報を発信したり自分なりに努力しています。そしてこうした京都での生活の原点は、浪江での生活の経験がすべて元になっています。私たちは支えられ、助けられることばかりでなく、浪江の心意気を伝

えることもできると思っています。私も浪江の皆さんが元気にやっているという話を聞くことが何よりも喜びですし、勇気をもらうことができます。

浪江町への帰還については、家族3人で意見が分かれることもあります。福島から遠い京都に暮らしているため、浪江の皆さんの集まりには気軽に行けないときなどは、申し訳ない気持ちになります。

それでも、いまの生活を少しでも活力あるものにするために、前向きに頑張りたいと考えています。「避難」と言いながら、実は私たちの人生にとって大切な時間を費やしているわけですから、少しでもこの時を大切にしたいという思いです。

私たちには浪江町当時に培った豊富な経験と蓄積があるはずですが、そして何よりも浪江町民としての心があります。それぞれ皆バラバラではあるけれど、これまでの蓄積を活かして、そして健康第一に頑張つて行きたいものだと思います。



今野 庄治さん(川添)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：6月12日 「平成24年7月 広報なみえ掲載」

まずは家族を大切にすること そしてこれからの浪江町を担う若手を応援したい

今野庄治さんは、妻のますみさん、母のハマさん、娘の里絵さん、そして孫の諒くんと長野市の借り上げアパートで生活しています。家族と一緒に暮らすことを第一に、浪江のころに培った経験を活かして、自立した暮らしを実現することを大切にしています。

震災後は、郡山市や長男・長女のいる東京などへ移動しましたが、孫の安全と健康のことを最優先に考え、現在の長野市にある県営住宅での生活を始めました。こちらでは、周囲の自治会やサークル団体の方に温かく接していただいています。近所に60坪ほどの畑を借りて、浪江のころのように土に触れながら野菜を作る生活もできています。新潟県まで出かけ大好きな海釣りも続けています。前向きに自立した暮らしを心がけています。



▲庄治さん(左)とお孫さんの諒くん

ただ、浪江では行政区長や商工会、そしてロータリークラブなどでも活動していましたので、心残りがあります。地元で今もなお頑張っている人たちを思うとき、申し訳ない気持ちや後ろ髪を引かれる思いになります。それでも子どもの安全を第一に、あえてこちらで家族と一緒に生活することを選択しています。町民の中には、仕事の関係で家族がバラバラに暮らす方もいるようですが、私はまず何よりも家族と一緒に暮らすことが大切だと思っています。家族と一緒に暮らし、自立した生活が実現できること。それができて初めて復興に向かえると考えています。町の復興ビジョンでは「町外コミュニティ」や「仮のまち」といった構想があるようですが、人々が集まって支え合う前に、まずはそれぞれの家庭がきちんと自分たちの暮らしを実現できることが必要と思っています。

私は、原発のような自然に反する行為や人間が開発するものに以前から疑問を持っていました。浪江・津島で開拓で苦労した両親を見て育ったからでしょうか。自然と共に生き、自分の力で切り開く生き方を大切にしてきました。きっと今の暮らし方は、そうしたこれまでの浪江町での経験が支えているのだと思います。過去のことを振り返るよりも、まだまだ見えない先のことを描くよりも、まずは今を精いっぱい生きることが大切だと考えています。

同時に、浪江の復興に向けては商工会青年部など、若い人たちにぜひ頑張ってもらいたいです。私たちはきちんと世代交代をして、若い人たちが応援する役割にまわるべきでしょう。震災によって、私たち浪江町民が失いかけた仲間や地域のきずな、そして浪江町としてのつながり。これらを取り戻すためにも、我々、高齢世代が若い世代の考え方を尊重し、若い世代も高齢世代の声を耳を傾ける。そうした世代を超えた連携がこれからの復興に必要なと思っています。



東京都

金澤 崇さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：6月16日 「平成24年7月 広報なみえ掲載」

今の生活から一步踏み出すために —記憶の中にあるふるさと浪江が心の支えに—

金澤崇さんは、妻の貴世美さんと東京都江東区の借り上げアパートで生活しています。原発・放射線の危険性を考え県外に暮らしています。震災から1年が経ち、被災者としてのこれまでの生活から、一步前に進めなければならぬと考えています。



▲崇さん(左)と貴世美さん

震災によって請戸の自宅は流されましたが、家族が無事であったことが救いでした。親戚を頼り、小高区、相馬市そして東京を転々とし、現在の都営住宅に住むことになりました。知らない土地でしたが、江東区やご近所の方に大変良くしていただきありがとうございます。東京湾に近いため、船を見かけたり、潮の香りを感じたりすると請戸を思い出してホッとします。正直、若いころは浪江の田舎暮らし

が少し嫌でしたが、こうして離れてみると緑に囲まれた暮らしが本当に懐かしいです。浪江ではあたり前に食べていた魚が、どんなに新鮮だったのか。野菜やお米が本当に豊富だった暮らしを改めて噛みしめています。私たちは、原発や放射線の危険性を第一に考えて、今も県外に暮らしています。まだしばらくはこの暮らしが続くと考えています。ただ、震災当時勤務していた会社が再開していたり、仲間が福島で頑張っていたりする話を聞くと申し訳ないという気持ちにもなります。一方で、やむを得ない事情から福島に残って生活している方もいます。それぞれの家族には、それぞれの考えや事情があつて今日を迎えていると思います。それをお互いが尊重して行くことが、私たちに大切なことなのではないでしょうか。むしろ、震災から1年以上が経過すると、自分たちの暮らしを前に進めなければという思いや焦りがあります。しかし、現在の住まいの借上げ期間が延長になったり、町の復興計画の議論が始まったり

すると、ついつい次の一步を踏み出せずにいる自分を感じます。早く自分の生活拠点をどこにするのかを決め、自分たちの暮らしを前に進めて行かなければと思っています。少しでもこれからの暮らしを描くため、できるだけ関東地域で開催される町民の交流の場などには参加して、皆さんの声を聞くようにしています。

東京に来て、時折会ったり、連絡を取っている浪江の仲間との関係は、今の自分たちを支えています。本当にふるさととは心のより所ですね。浪江があるから今の自分たちがいる。頭の中に鮮明に浮かぶふるさととの風景が心の支えです。自分たちの記憶の中にあるふるさとにおいて、音、満天の星空などを、いつか次の世代に伝えたい。県外に暮らす方向性を描きながら、そんな思いも強くしています。何か矛盾していますね。でもきっと、そう思い続けられることが、離れていても町民であり続けることのように思っています。



東京都

添田 隆幸さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：6月12日 「平成24年7月 広報なみえ掲載」

胸を張って生きて生きたい

福島避難所、山形のホテルを経て、2年前まで奥さまの両親が住んでいた街で、奥さまと奥さまのご両親そして愛猫ポルカと暮らしています。

当初、妻と妻の両親、長男の哲平と一緒に、福島の避難所、山形のホテルなどを転々とし、6カ所目に越してきたのは、昨年8月25日です。82歳になる義父は震災当時、南相馬市の病院に入院していました。震災後4日目に、病院から「医師や看護師が不足し薬品も無く治療ができないので、早急に患者を引き取って欲しい。」と連絡がありました。義父の状態は芳しくなく、山形県の各病院に入院を拒否され本当に困り果てました。入院先が見つかるまでというこ

とでやっと病院に置いてもらいました。義父が2年前まで住んでいた世田谷区経堂の関東中央病院にお願いして、ようやく転院することができました。救急病院なので、原則3カ月間の入院です。容態は安定して来ましたが、病状の關係で受入れ病院や施設が見つかりません。世田谷区が提供してくれた避難者用住宅での在宅介護も難しく、5カ月後に退院して、民間のマンションでの在宅介護を始めました。

私は浪江町で会社勤めをしていましたが、フランスの音楽院で学び音楽家としての道を歩み始めていた長男と妻の3人で音楽教室を運営していました。自宅兼教室には5台のピアノを置き、4人の講師とともに子どもたちを指導していました。あの震災で、すべてが変わりましたが、おかげさまで全日本ピアノ指導者協会が窓口になり、会員の先生からピアノを譲り受け、妻はこちらでピアノを指導しています。また、出張指導やコンサート審査で不在も多く、私が住宅で義父の介護を担っています。長男は再びウイーンに行き、昨年9月から音楽院に在学しています。来年の春には福島県内のコンサート我希望しています。被災地支援のためのチャリテイコンサートは数多く開催されますが、被災地で活動していた音楽家のコンサートを応援していただきたいと思っています。



▲左から隆幸さん、義母の文子さん、奥さまの満江さん、義父の秀夫さん

津波で親戚6人が亡くなりました。多くの人がそうであるように、失ったものがあまりに大きすぎます。それでも、生かされていることに感謝し、前向きに明るく生きて行かなければなりません。高齢の妻の両親が「生きていて良かった。」と生涯を遂げることができるよう、妻がピアノ教師として指導が続けられるよう、そして、長男が音楽家として日本での実績を重ねることができるようにと願っています。諦めることもたくさんあります。それでも希望を持ち、胸を張って生きて行きたいと思うのです。

浪江町の美しい風景、出会えた人々、30年過ぎた日々のすべてが宝です。皆さまに心より感謝と希望、そして慈しみの愛を込めて本当にありがとうございます。



亀田 安子さん(権現堂)

取材者：元気玉プロジェクト 棚木

取材日：6月8日 「平成24年7月 広報なみえ掲載」

浪江のみんなと手と心を繋いで毎日を元気に

現在は会津若松市舘馬町の借上げ住宅で、ペットと一緒にご主人と2人暮らしです。「会津地方なみえ会」の活動を通して、会津地方に避難されている浪江町の皆さんと、コミュニケーションの輪を繋げていきたいと考えていらっしゃいます。

浪江町では、仙台屋の屋号で江戸末期から続く家業の販売店を夫婦で経営していました。住まいにしていた古民家を利用し、息子が居酒屋をオープンする予定でしたので、震災のあった当日は、蔵の中を息子と二人で整理していたところでした。幸い蔵の外に出ており、店内にいた主人もけがはありませんでしたが、警察の方たちが「津波が来るから高台へ避難してください」とふれまわっていたので、飼っていた犬・猫を連れ家族3人で、



▲ご主人の貢さん、ペットのさくらちゃんと一緒に暮らす安子さん。

上ノ原の知人宅へ避難しました。翌日、原発事故があり避難命令が出たので、道々に誘導されるままに、津島地区にある浪江高校の分校へと身を寄せました。水道やトイレ、電話も使えない状況でしたが、避難した人たちが皆落ち着いて行動していったので、まだこのころは、私たちもじきに浪江の家に帰れるだろうと思っていました。情報が入ってくるにつれ、原発事故の不安が大きくなり、14日には妹家族や友人家族と一緒に、会津若松市の総合体育館へ避難しました。約1カ月半お世話になりましたが、暖かい場所を提供してくれた市、おいしい食事を作ってくれた地元ボランティアの人たちへの感謝の気持ちは決して忘れることはないでしょう。

その後、猪苗代町の観光ホテルや、ペンションに2カ月半近くお世話になり、7月16日によりやく現在の家に落ち着くことができました。仕事の関係で、息子とは別々の生活になりましたが、ペット同伴でも住居可能な家を探してくれたおかげで、可愛がっていた犬や猫たちと離れることもなく、また、ご近所の方や、学生時代の友人からも本当に良くしていただいたてありがたく思っています。こうして離れてみると、浪江町で過ごしてきた何でも無い日々の幸せをつくづく感じます。海や山に恵まれたとても良い町でした。会津地方も自然豊かな良いところですが、やっぱり私たちの心は浪江にあるのです。私は今、「会津地方なみえ会」に参加しています。会津地方に避難している浪江の皆さんとコミュニケーションの輪をひろげながら、集まって過ごす季節の行事や、会話はとても楽しいものです。避難することでも心に積もった負担が、少しでも軽くなるようにお手伝いできればと、会長さんをはじめ皆で頑張っていますので、ぜひお気軽にご連絡ください。

「会津地方なみえ会」
TEL 090-6789-2621



福島県

山田かよ子さん(加倉)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：6月9日 「平成24年7月 広報なみえ掲載」

帰りたい想いと、現実との間で

県の救護施設「ひまわり荘」に隣り合う自宅に、義母と夫との3人暮らし。3月11日、かよ子さんは自宅得手芸をしており、手掛けていた作品は、今でもその日のまま手元に持っていらっしやいます。

南相馬市に嫁いだ娘さんご家族はいわき市に、大熊町に住んでいた息子さんたちは会津へと、震災前は近くに住んでいた家族が散り散りとなってしまい、お孫さんたちにもなかなか会えないそうです。

■母と娘、2人の記念のキャン ドルを灯して

11日当日、津波が起きたことは防災無線でおぼろげに知りましたが、海岸線から遠くにある自宅には、停電していたものの食料などの備えはあったので、近所の方々と避難せずに過ごしていました。3月14日は私たちの結婚記念日で、その記念のキャンドルと、地震で倒れてきたタンスにしまっていた娘の結婚記念のキャンドルをともに灯しながらの数日間でした。

当時、私たちは原発で起こっている事故はほとんど知らず、2回目の爆発が起きた15日、夫の友人や隣組の方々と早目の夕食を終えたところに自衛隊の方々が来られました。すでに嫁ぎ先の家族と一緒に秋田へ避難していた娘が、私たちの状況を自衛隊に連絡していたそうで、直ぐに帰れるだろうと思いつつ、みんなで東和の体育館に避難しました。無我夢中で家を出たため、私も夫も携帯電話を置き忘れ、子どもたちや親戚、友人たちとの連絡にとても苦労をしたり、自衛隊の車で避難したために自家用車もなく、途方に暮れたり

しました。翌日には木幡住民センターに移り、その後、裏磐梯のペンションで4月から9月まで過ごしました。

この二本松市大平農村広場の仮設住宅は、浪江町に最も近いという理由で選びましたが、昨年の冬はごぼうのような太く、長いつららにびっくりしたり、山間を吹く強風と住宅内の結露にはずいぶん悩まされました。

■帰ることが出来るかもしれない ：わずかな期待が心の支え

大地震で家のぐしは壊れ、玄関も2階も雨漏りがひどく、庭は荒れ放題です。一時帰宅のたびに、朽ちていく家を見ては悲しい思いをしています。浪江に帰ることが出来るならば、私たちのようにつてのいない者には大工さんや屋根屋さんを捜すことは困難だと思いますので、自宅ですぐに生活ができるよう、せめて屋根の修理や庭の草刈りなどの手配を国や町にお願いしたいです。

私は長年、手芸に親しんでいます。震災前日の3月10日、町の広報紙担当の方が5月に掲載する予定で、座敷いっぱい並

べた作品を撮影してくださいました。その写真は、今では私の一番の宝物です。また、2月に取材を受けたNHK「すてきにハンドメイド」の放映は避難先で観ました。叶うならば、自宅で以前のように作品作りを楽しんだり、時にはお教えしたりしたいです。

夫と2人、帰町へのあわい期待とふるさとへの愛着を抱きつつ、一日も早い結論を今か今かと待つ毎日を送っています。



▲夫 仁さんとご一緒に、作品を手にして。



志賀 隆充さん(大堀)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部

取材日：6月12日 「平成24年7月 広報なみえ掲載」

今までは守っているつもりでしたが、いつもお互いが支え合っていることに気づかされました

昨年3月11日、東日本大震災が発生したときには、富岡消防署での勤務中だったそうです。

大堀でともに暮らしていた隆充さんのご両親と子どもたちの4人は、翌朝すぐに本宮市の親戚を頼って避難しました。一方、南相馬市で看護師をしていた奥さんは翌日も勤務だったため、実家の両親とともに避難所で一夜を明かし、子どもたちや家族とは13日に本宮の避難先で合流しました。

隆充さんが再び家族に会えたのは19日、8日ぶりでした。現在は、ご両親とは別に親子4人で暮らし、1時間以上をかけて現在の勤務先である榎葉分署に通っていらっしゃいます。



▲ご自宅近くのレストランにて。満面の笑顔は、これからです。

■自分の家族を探す想いを仕事に重ねました

大地震と津波発生当時、勤務していた富岡消防署は停電となり、119番通報も受信できない状態でしたから、署内に指揮本部を立ち上げ、救助活動をしていました。11日からの約1週間、たぶん1時間くらいしか眠っていませんでした。

翌日12日の明け方からは原発事故や注水に伴うトラブルが相次ぎ、避難誘導の広報活動も行いながら、一人暮らしや寝たきりの方々の搬送なども救急車以外の車も使って対応しました。

ともかく、地域の消防団の方々も原発から避難され、消防と東京電力の関係者しかいなかったわけですから、我々がここを守るといふ想いで、本場に一致団結していたなあと後からつくづく思いました。

災害発生から1週間後、交代で休みを取ることにになり、富岡町を出て携帯電話の通じる都路村でふと携帯を見ました。すると、家族はもちろん、大学時代の友人や消防学校の同期生、日ごろお付き合いのある方々など、大切に想っている人たちが不在着信や留守電、メールが数え切れないほど入っていました。

「空メールでもいいから返事を」というものもあって、運転できないほどに涙があふれました。

落ち着いてからですが、子どもたちのリフレッシュのために東京や富山、新潟などへ出かけましたが、訪れる先で触れ合う人たちが本当に優しく、人は人に支えられているのだとつくづく感じました。

■父の早い判断が、家族を守ってくれたと思います

大堀相馬焼の窯元をしていた父が、母と子どもたちを連れて12日の1号機爆発の直後に、本宮の親戚を頼って移動してくれました。この判断がなければ、食事も満足になく、厳しい寒さの中、避難所で過ごさなければならなかったでしょう。

また、ボランティア活動を希望した父が避難先である本宮市役所に問い合わせに行ったことが縁で、今の借上げ住宅に入居できました。私たちが一時、同じ住宅に住みましたが、水回りが不便なため転居しました。子どもたちの学校環境を変えずにすむのならば、一軒家を借りて再び6人家族で暮らしたいのですが、なかなか適当な住まいが見つかりません。

浪江には帰りたい。でも帰れないかもしれないという想いの狭間で心が揺らぎます。特に子どもたちから「いつ帰れる？」と聞かれるとなおさらです。私は、長い時間がかかっても、大堀で前と同じような暮らしに戻りたいと願っています。



沖縄県

小野田真仁さん・祥子さん(権現堂)

取材者：NPO法人まちなか研究所わくわく 宮道・下地

取材日：6月6日 「平成24年7月 広報なみえ掲載」

また両親、兄弟、従兄みんなで集まりたい

浪江町で生まれ育った小野田さんご夫妻。権現堂字南深町では、美容室「SWORD」を経営。昨年6月6日に沖縄へ渡り、現在は与那原町で家族4人で生活をしています。

■子どもの環境に良い沖縄へ

沖縄で生活をスタートさせたのは、子どもがまだ小さいので原発から一番遠い沖縄なら安心と思っただけです。震災後は、一度新潟県へ避難し、その後福島県に戻り生活していましたが、どうしても「歯みがきする水は大丈夫?」「お風呂の水は本当に安全?」と悩んでしまい不安な毎日でした。土地勘も身内もない沖縄で生活するのは勇気が必要でしたが、夫婦で話をして沖縄に行くことを決めました。

沖縄では、職場の方も保育園の先生方も私たちを「被災者」ではなく、同じ「ウチナンチュ(沖縄人)」のように対等に接してくれるので、すごく心地がいいです。子どもにもたくさん友だちができて、近くの公園で遊ぶこともできて、子どもにとってすごくしやすい環境です。

■浪江に戻れるなら普通のことかしたい

沖縄に来て食べてたくなるのは、なみえ焼そば。麺が太く味が濃くて、子どもも大好きです。焼きそばを食べに「松乃家」や「縄のれん」にはよく行きました。また行きたいですね。

浪江にいたころは、シヨッピン

グセンターの「サンプラザ」にもよく行きました。ママ友と行ってお茶を飲みながらおしゃべりをしていました。今でも浪江の友だちと「サンプラザ行きたいね。」と話しています。浪江に戻れるなら、そんな普通の日常のことがしたいです。

■永住の地を決める難しさ

浪江では、2010年12月に美容室をオープンさせ経営していました。今も、常連のお客さんが髪のお手入れができていて、自分にあつた新しい美容室を探せているか気になります。でも一方で、私たちのお店のことも忘れてほしくないという思いもあり複雑です。震災後、お店も家も大きな崩れはなく、震災前の状態のままです。戻ってお店を再開させたいですが、警戒区域で戻れません。でも、もし警戒区域が解除されたとしても、本当に戻って大丈夫なのかも思っています。浪江で生まれ育ち、浪江が大好きですが、子どもや家族の安全が第一です。震災前までは、浪江が永住の地だと当然のように思っていました。お店も開業してこれで生計を立ててやっていたと決めていたのに…。1年経ち、前に進まないといけないわかっていきますが、踏ん切りがつか

ず、永住の地を決めることは簡単ではありません。

■両親、兄弟、みんなに会いたい

浪江にいたころは、両親、兄弟、祖父母、従兄など親戚が近くに住んでいました。誕生日を迎える人がいれば、祖父母の家に集まりお祝いをするなど、祝い事やクリスマス、正月、何かあるたびに親戚が自然と集まって一緒に時間を過ごしました。以前は会いたいくらいにすぐに会えたのに、今は福島、茨城、埼玉などみんなバラバラでなかなか会えなくさみしいです。両親、兄弟、従兄みんなにはいつでも会いたい。また昔のようにみんなで集まりたいです。



▲小野田さんご一家。祥子さん(左上)、真仁さん(右上)、優ちゃん(左下)、佳桜ちゃん(右下)



福島の民謡の語り部 吉川 裕子さん(権現堂) みちのくの会代表

取材者：きょうとNPOセンター 田口

取材日：6月10日 「平成24年7月 広報なみえ掲載」

ふるさとを語り継ぎ、 ふるさとの絆をつないでいきたい



吉川さんは、震災直後に大阪に避難して以来、ふるさとの浪江町・福島を想い、近畿圏や関西圏各地で、福島の民話と自身の被災体験を伝える「語り部」としての活動を精力的に続けています。また、近隣に避難している被災者に対してもさまざまな情報を送り続け、自らコミュニケーションの機会をつくるなど、ふるさとの絆をつないでこられました。



◀ 講演先の島根県の方から送られてきた手作品です。

生まれ育った土地：浪江町には、たくさんの思い出が詰まっています。私自身と家族の歴史があり、ドラマがあります。浪江町はのどかで食べ物はいしく、人情の厚い場所。生きていくには最高のところですよ。震災後、大阪に来てからは、「語り部」として福島の民話を伝える活動だけでなく、被災時のことを方言で話す講演活動も続けています。講演回数は100回を超えました。また、被災者同士が助け合うための支援活動の代表もつとめてきました。

震災の日から1年以上経過した今、被災者や被災地に対する社会全体の意識が薄れてきていることも感じています。心ない言動に傷つくこともありました。昨年、谷村新司さんのコンサートに招待されたとき、コンサート終了後、別室に集まった私たち被災者に向けて、谷村さんが「一緒にがんばりましょう」という言葉をかけてくれました。「がんばってください」という言葉ではなく、「一緒に…」と言ってもらったことが本当にうれしかった。そしてみんなで童謡『ふるさと』を歌い、泣きました。

今の一番の希望は、「一晩でいいから、浪江町に戻って自分の布団の中で大の字になって寝たい」ということ。ご先祖さまのお墓参りをしたり、運営をしていた託児所ベビーハウスピノキオに通っていた子どもたちにも会いたいです。

家族が年に数回集まる場所：ふるさとが恋しい。でも、希望を失ってはいけません。後悔しない人生を生き抜きたい。これからも私に伝えられることを精一杯伝えていきたいと思っています。



明治 輝子さん(幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・土谷

取材日：7月11日 「平成24年8月 広報なみえ掲載」

畑を耕しながら、心も耕しています

大震災当日、瓦が流れ落ちるように崩れる公民館から自宅に戻ったものの、津波から逃れるために、直ぐに時雨の降る寒い中を車に毛布3枚だけを積み込み、ご主人と愛犬と一緒に町外れに避難。翌日には原発事故が起こり、原町を経由して川俣へ向かい、スーパーの駐車場で更に一夜を明かしました。13日には福島市へ。市内のアパートでの避難生活を経て、昨年夏、伊達市保原の戸建て住宅に移り、今は庭や畑仕事を楽しみながら暮らしていらっやいます。

■差し入れの温かいおにぎりに、人のありがたさが心底浸みま

した
福島市に避難しアパートを借りましたが、着のみ着のままの寒い夜が何日も続きました。そうした不安な日々の中、近所の女性が温かいおにぎり、お味噌汁、煮物に漬物などの三度三度の食事を、私たちの生活が整うまでの3週間余り届けてくださいました。その上、お風呂までいただきました。誰も知り合いない見知らぬ土地での親切に、ただうれしく、感謝しながら家族で涙しました。

大災害が発生するほんの数日前、浪江町のサンシャイン浪江で行われた「親鸞」についての講演会で聞いた「明日ありと思いう心の仇桜、明日はあらしが吹かぬものか」という一節が忘れられません。この世の中で、このような豊かな文化に浸りながら、まさかこんな出来事が起きるはずもないと信じ切つて過ぎてきました。しかし、この大地震と津波、追い打ちをかけた原発事故の恐ろしさに驚き、折れかかった当時の心に、この

教えが深く深く刻まれました。

■浪江を想いながら、保原での暮らしを充実させています

夢なら覚めてと祈りながら、その日その日暮らしの1年余りは瞬く間に過ぎました。先の見えない生活に対し、不安がいつぱいの日々ではありますが、この保原は母の故郷です。近所の方々と触れ合いながら、少しずつ私流の生活を取り戻しています。

旅の好きな私は、ときどき夫とともに車で近所の温泉に行ったり、遠出をしたりしています。また、趣味の仲間と集まり、楽器を奏でる心のゆとりも持つてるようになってきました。

家では、何より好きな庭いじりや愛用の耕運機で野菜作りをしながら、気持ちの良い汗を流しています。今では、種から育てたきゅうり、トマト、トウモロコシなど十数種の野菜が育ち、収穫を楽しみにしています。庭にはミニ枯山水、噴水を設え、今は球根で植えた鉄砲百合の香りが漂って元氣づけてくれます。また、早咲きの町の花、コスモ

スも咲き出しました。

浪江の家や庭のことを思い巡らすと寂しい気持ちになります。が、遠く離れていても、あの請戸の潮の香りや緑の大地など、思い出が山のように積もった故郷を思い出しながら、支え合つて過ごしています。

そして、あちこちで浪江の皆さまの素敵な笑顔に会えますように。



▲ご主人と愛犬のはなちゃん、丹精込めた畑。大好きなものに囲まれて。



福島県

朽本 益雄さん(室原)

取材者：元気玉プロジェクト 棚木

取材日：7月11日 「平成24年8月 広報なみえ掲載」

人の縁を大切にして、残りの人生を笑顔で



▲猪苗代町の住まい前で奥さまのシスエさんとともに。

現在は猪苗代町の一軒家に奥さまと2人暮らしの朽本さん。おきてしまった災害にくよくよせず、残りの人生に楽しみをみつけながら、笑顔で過ごしていきたいと考えていらっしゃいます。

浪江町では、曾祖父の代から酪農を営んできました。娘の結婚を期に若夫婦に農場を譲って引退し、ときどきは牛の世話を手伝いながら、趣味の詩吟やカラオケを楽しみ日々を過ごしていました。震災当日も、カラオケ好きな近所の人たちが集まり自宅で歌っていました。大きな揺れに、座ったまま互いに支えあうのが精一杯でした。

翌日、家の前の国道は隙間もないほど車の行列ができ、それが3日間続きました。私は歳のせい或少々耳が遠いためラジオも持っておらず、防災無線も聞こえなかったのです。地震の後に浜へ津波が押し寄せた事も知らずにいたのです。せいぜい4、5日もすれば落ち着くだろうと思いい、なにより50頭程いる牛の世話があつたので、避難せずに自宅生活をしました。自家発電もあり、水は裏山の湧き水を使っていたので不自由はありませんでしたが、毎日300リットルもの牛乳を搾っては捨てていました。

10日ほど過ぎたころ、自衛隊の車が私たち家族4人を迎えに来て、すぐに避難するようにと言うので、わずかな貴重品だけを持ち家を離れました。二本松市の避難所で放射能の検査を受け、心配して集まっていた親戚や友人・知人の話で、ようやく状況を把握することになったのです。

二本松市針道の避難所で2日間生活しましたが、寒さが厳しく、身体が思うように動かせなくなつたので、嫁いだ娘を頼り茨城県へ避難しました。一変し

た生活のストレスや疲れで、一時は自力で立つこともできなくなりました。

昨年7月からは、猪苗代町で避難生活をしている娘夫婦の縁で一軒家を借してもらい、夫婦2人で暮らしています。近所の方も気のいい人たちばかりで、良い巡り合わせに感謝しています。

これまでの人生を振り返れば、いろいろな経験をして楽しく働き、実に幸せなものでした。正直、代々受け継いだ家を離れるのは寂しく、処分せざるをえなかった牛たちのことを思えば心が痛みます。ですが、落ち込む私を慰めてくれた兄弟や子ども、孫たちのおかげで、今では残りの人生を怒り嘆くよりも、笑って過ごしたいと思えるようになりました。何歳になっても家族の絆はとて心強いものだと感じます。9月には親族が集まる「兄弟会」を予定しています。

私は詩吟やカラオケで、妻は手芸で日々の暇を埋めながら、その日を心待ちにしています。



黒坂 信一さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 銅嶋

取材日：7月7日 「平成24年8月 広報なみえ掲載」

浪江町の復興を願って、今を前向きに

黒坂信一さんは、妻の佐津樹さんと3人の子どもたちと埼玉県の借り上げ住宅で生活しています。震災前の4世代同居の暮らしから、親子5人の暮らしにと生活は大きく変わりました。

浪江では、両親と祖母、私たち夫婦と子どもたち3人の8人で暮らしていました。津島の避難所に1泊した後、親戚を頼って3月15日に埼玉に来ました。親戚宅に10日間ほど居候した後、両親と祖母は福島に戻り、今は借り上げ住宅で暮らしています。私たち夫婦と子どもたちは、私の仕事の関係や子どもたちの学校のことを考え、埼玉での暮らしを選びました。今、住んでいる家は埼玉県の借り上げ住宅で、



▲左から流星くん、美桜ちゃん、心夢ちゃん、佐津樹さん、信一さん

昨年の8月に越してきました。長男の流星は中学3年生、長女の美桜は小学6年生、次女の心夢は小学2年生です。昨年4月から、近所の学校にそれぞれ編入学しました。埼玉での暮らしが一番の心配は、子どもたちが学校に慣れてくれるかどうか、友だちができるかどうかでした。特に、長男の流星は、避難してきたときは中学2年生、高校受験の準備をしなければならぬ時期で、とても不安でした。ここでの暮らしももうすぐ1年。私たちの不安をよそに、子どもたちは学校になじみ、友だちもできたようで、ほっとしています。妻の佐津樹は、子どもたちも頑張っているのだから、自分も何か始めなければとPTAの役員を引き受け、忙しくしているようです。先日、妻は、長男の流星に「この暮らしは楽しいの?」と聞かれ、「うん、映画館にも行けるし、買い物も便利だし、楽しいよ。浪江ではできないことが、たくさんできるじゃない。」と答えたそうです。子どもたちを励まし、支えていくためにも、状況を受け入れ、

今の暮らしを楽しむことを大事にしなればと思います。今年の3月、二本松市で「ふるさと学級」が開催されました。県外に避難している子どもたちも含めて、おおぜいの小中学生が集まりました。子どもたちは久しぶりに同級生と会い、とても楽しそうでした。離れてみて、浪江には、豊かな自然と人の交流があつたなと改めて思います。山で採れたきのこやびわ、いちじくをご近所の方からいただいたり、山の紅葉を楽しんだりといったことが思い出されます。震災後、心が折れそうになったこともありました。私たちと同じように、県外に避難した浪江町の人たちとお会いし、暮らしの苦労をお聞きすることもあります。慣れない土地での暮らしで、大変なことはたくさんあります。でも、ふるさと浪江に帰れる日が来ることを願って、みんなの前を向いて一緒にがんばっていければと思います。



新潟県

櫻庭 憲裕さん(川添)

取材者：くびき野NPOサポートセンター 野本

取材日：7月9日 「平成24年8月 広報なみえ掲載」

子どもたちの安全を確保できる場所に、復興の拠点を



震災当日は、福島第一原発で勤務中だったという櫻庭さん。避難指示以降、家族らとともに郡山市の避難所を経て、一時は両親の実家である秋田市に身を寄せました。その後、職を求めて新潟県柏崎市に転居、妻の貴子さん、高校生の杏奈さん、中学生の乃彩さんの4人家族で生活しています。

地震の後、会社から家族の安全を確認するよう指示があり、同じ職場にいた妻と必死の思いで自宅を目指しました。道は所々寸断され、津波によって迂回しなければなりませんでしたが、何とか自宅には辿り着きましたが、いわき市に外出していた高校生の娘の安否がわからず、気が気ではありませんでした。そんな状況で12日朝に避難指示があり、着の身着のまま、家族、親戚、友人らと一緒に浪江を飛び出しました。幸いにも、いわき市の避難所にいた娘は、私たちのもとに向っていた知人の車に同乗することができ、翌日には再会することができました。このときばかりはほっとしました。

その後、原発から距離をとった方がいいと判断し、渋滞の中、郡山ビッグアイの避難所に向かいました。そこには200人程の避難者がいましたが、放射能が室内に入り込む危険から、暖房も使えなかったので寒く、とても辛かった。その上、当時まだ、私たちと郡山の人たちとは、原発事故に対する危機意識に差があつて、どうにも長居しづらい雰囲気でした。

みんなで相談した結果、16日朝から家族ごとに別の場所に避難することになり、私たちは両親の実家を頼って秋田市に向かいました。途中、新潟県の温泉宿で久しぶりの風呂に入れたことは良かったのですが、ガソリンの販売制限でずいぶんと補給に苦労しました。日本海の横なぐりの雪の中、もう家に帰ることはできないかもしれない、という不安に駆られたことを思い出します。

秋田市では約2カ月間、避難生活を送りました。なかなか仕事にも就けず、娘たちにも「これから先どうなるのか？」という不安が募っていたと思います。そんな中、このままではいけない、何とか仕事を見つけなくて

はと思い、会社の勧めもあった新潟県柏崎市に職を求めました。市内の空き家に入居し、今年の3月まで柏崎刈羽原発の耐震補強工事の現場で働いていました。

しかし正直なところ、土地勘もまったくない場所で将来のことを考えていくのは難しいと感じています。娘たちの進学や就職のこと、自宅のこれからの対応なども考えると、やはり福島県内に一刻も早く戻りたい。ただその一方で、放射能への不安は拭いきれません。大切な娘たちの安全だけは確保しなければならぬと思っています。

浪江でサーフィンやライフセーバーをしていたことを懐かしく思います。浪江の海にはいつも良い波があつた。原発事故さえなければ、すぐにでも復興に取りかかれるのに。故郷の海を奪われてしまった悔しさを感じます。

仮の町構想には希望を持っていますが、できる限り放射線量の低い場所に候補地を選んでほしいです。そしてその上で、経過を見ながら帰町する、しないの選択肢を私たちに与えてもらいたい。それが今の願いです。



松本 静枝さん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：7月14日 「平成24年8月 広報なみえ掲載」

いわき市に住居物件を探しています

昨年3月末に仙台市に避難された松本さん。現在は、仙台市太白区で夫の繁夫さんと2人でアパートに暮らしています。近くに住む娘さん家族と行き来しながら、日々の生活を歩んでいます。



▲右が静枝さん、左が繁夫さん

■ようやく落ち着き始めた日々
浪江町川添中上ノ原地区に住んでいて、地区内では近所づきあいを日々させていたでいていきました。老人会の活動やゲートボール、お茶飲み会、自治会活動など、地域のみんなとの楽しみがたくさんありましたよ。夫も畑仕事やシルバー人材センターの仕事で日々充実していました。でも今は、仙台暮らし。知らない人ばかりですし、道路や場所もよくわからず迷ってばかりで

す。先日は住まいの近くの駐車場でいわきナンバーの車を見つけてきました。「どんな方が車乗っているのかな？」なんて考えた。こんなことがある度に、浪江での暮らしを懐かしく思い出します。

震災後とはいうと、直後の3月中旬には富岡町に住んでいた私の母が亡くなりました。避難しながらの葬儀や供養、相続などの手続きはとも大変で約8カ月ほどかかりました。この間は体力が無くなり、じんましんが出たりして気が滅入る日々でした。その後は、夫の病気が検査で分かり5月に入院。2週間弱で退院し、現在では元の調子を取り戻しつつあります。そんな感じでしょうか。落ち着きはじめたところです。

■桑折町の仮設住宅の友人を訪ねて

避難先では、友人や知人と話す機会がなかなか無いので、先日、浪江町の方が多く避難している桑折町の仮設住宅に行ってきました。10人くらいの方が集まってくださり、思い出話や

れからのことについて語り合いました。避難したときには、間もなくか3年くらいしたら浪江に戻れると思っていました。今は先の見通しが立ちませんが、仮設に住む知人たちもこの先のことを心配しています。そう考えると住民が考えて自ら行動を起こすことも大事だね、と話してきました。

■今後について夫婦で相談

夫婦で相談したのですが、今後はいわき市に住みたいと考えています。その準備のために、先日現地に行ってきました。そして、地域の不動産会社に希望の物件の空きが見つかったら連絡をもらえるようお願いしてきました。いわき市の物件は空きがなかなか出ない、と言われています。ですが、なるべく暖かいところ、そして知人や親せきが住んでいる場所で暮らしたいと考えています。今までは、娘夫婦、息子夫婦の近くに互いに行き来し助け合っていました。今後は夫婦2人で暮らしていくことにしました。



西原 志織さん・西原 清さん(川添)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 小原

取材日：7月14日 「平成24年8月 広報なみえ掲載」

やっぱり福島はいいところ、福島県民はいい人

西原さんご家族は、ご夫婦と3人の息子さん、おじいちゃんの6人で生活をともにしています。以前はつくば市に住んでいましたが、旦那さんのお仕事の関係で4月に北茨城市に移りました。おばあちゃんは残念ながら5月に亡くなりましたが、たくさんの方たちに見送っていただきました。3人の息子さんは戦隊ヒーローやアニメが大好きです。

■志織さん

浪江町は海も山もあり、気候も良くすてきな街です。震災がなければ今ごろ、高速道路も開通していたでしょう。新築して3カ月の二世帯住宅を楽しみむ暇もなく、避難生活となってしまったことが非常に残念です。

避難当初は、すぐに帰宅できると思っていたので着の身着のまま、体育館を転々とし、私の実家がある茨城県の守谷市に避難しました。車中では、子どもがストレスで吐いてしまっていたのでとても心配でした。

その後は、常総市のあすなろの里という所に1カ月くらいいました。そのスタッフの方々には、とても良くしてもらい、今でも連絡を取り合っています。

その避難所が閉鎖した後、つくば市のホテルに移りました。そして近くの県営住宅へ入居し、今年の3月までそこで生活していました。つくば市では、福島県の交流会に参加したり、いろいろな人も出会うことができとてもいい環境でした。今は夫の仕事の関係で北茨城市に住ん

でいます。福島県に近くなったことでほっとした気持ちがありません。これからのことは、夫の事業再開の場所を考えて決めていく予定です。

■清さん

過去ばかり振り返っていても仕方ないから、前向きにいかないと。これからどうするかが大切。家にこもりきりでは、気持ちがおかしくなってしまう。妻が5月に亡くなり、新盆が終わるまでは気持ちが落ち着かないけど、落ち着いたらボランティアでもしたいと思っているし、交流会などにも、なるべく出て行こうと思っています。

このあいだ用事があって郡山市に行ったとき、その場に降り立った瞬間になんだか空気がおいしいように感じました。やっぱり福島県はいいところだし、福島県民はいい人たちばかりです。

元に戻るなら、家の周りを散歩したり、普通の生活がしたいです。仲間内とも会って話したいですね。



▲左から、おじいちゃんの清さん、志織さん、^{おうすけ}旺祐くん、^{けいすけ}圭祐くん、^{ゆうすけ}侑祐くん

3人の息子さんはテレビの戦隊ヒーローに釘付けで、最後までカメラと目線が合わず・・・残念



埼玉県

雪 光希くん(小5)(川添)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：7月15日 「平成24年8月 広報なみえ掲載」

今はたくさん友だちを作って元気に頑張っていく —いつか浪江に帰って友だちと会いたい—

雪 光希くんは、妹の^{みのり}実里ちゃん(小4)とお母さんと3人で埼玉県所沢市の借り上げアパートで生活しています。現在の小学校には、震災直後の4月から通学し2年目を迎えています。今回の『浪江のこころ通信』の取材は、光希くん本人の希望で実現することになりました。



▲光希くん(左)と妹の実里ちゃん

地震のあと、津島に逃げようと思ったけれど、津島への道が大渋滞だったので、僕たちは飯館村に避難しました。そのあと、親戚を頼って所沢市にきました。転校した^{こて}小手指小学校は浪江小学校と同じくらいの生徒数です。友だちもたくさんできました。近くの公園などで、サッカーや野球などをして遊ぶことが多いです。いまの学校はとても元気な学校で、友だちとは外で遊ぶことが多いです。

埼玉の夏は暑いです。近くに

ある西武ドームに、大好きなプロ野球を見に何度か行きました。楽天ファンなので、楽天戦を見に行きました。そこで浪江小の同級生に偶然会いました。やっぱり浪江小の友だちに会いたいなあと思います。今どんなことをして遊んでいるのか。どんな生活をしているのか聞いてみたいです。そしていつか福島に帰りたいです。

浪江では夏によく友だちと虫取りに行きました。クワガタ虫やヤブト虫をよく取ったけど、こちらでは見かけません。十日市も行きました。出店で食べたさん会ったりしました。にぎやかで人がたくさん集まっています。請戸の砂浜で遊んだりもしました。思い出すと浪江が懐かしいです。妹の実里も、埼玉ではできない雪合戦や雪だるま作りを、また浪江の友だちとしたいなと思っています。

秋田で暮らしていた浪江小で友だちだった稲垣颯一郎くん『通信』をみて、僕も取材をしてほしいと思いました。理由は、今自分が思っていることを伝え

たかったから。浪江の友だちに直接会って話すことはできないけれど、『通信』に出れば自分が元気であることを伝えられると思ったからです。いま通っている小学校で、できるだけ友だちを作って仲よく元気にするのが、自分にできることだと思っています。浪江の友だちにも、同じように元気で頑張っていきたい。そうしていれば、いつか必ずみんなに会えると信じています。そしてできるだけ募金などで協力して、福島で困っている人を助けてあげたいとも思います。

お母さんは、これからのことや福島に残っている知り合いの人たちのことを思うと、ときどき考え込んでいます。僕たちのことを心配してくれているお母さんに、いつか恩返しをしたい。その日が来るまで、元気に明るく頑張っていく予定です。



松田 宏一さん(谷津田)

取材者：(特活) とちぎボランティアネットワーク 徳山

取材日：7月22日 「平成24年9月 広報なみえ掲載」

浪江町の谷津田から栃木県真岡市に避難生活をしている松田宏一さん。震災が発生してから千葉県や茨城県での一時的な避難生活を経て、昨年9月から栃木県真岡市の住居で現在に至っています。

仕事の都合上単身赴任で週末にしか家にいる時間はありませんが、奥さんの泰子さん7歳の長男を頭に元気な男の子が3人いて、とてもにぎやかな家庭です。



▲元気なお子さんたちと一緒に。一番左が宏一さん。

震災が発生した翌日の朝、避難指示がでました。地元の消防団に入っていたので地域住民の避難を促す活動をしました。避難することには理解してくれない住民もいて説得をしたりしました。私も自分を含めて10人の家族がいて、しかも祖父は寝たきり状態ということもあり、自分の家族の心配と消防団の役目との板挟みの中での避難活動となりました。

とりあえず妻の実家のある昼曾根へ避難しました。しかし、その場所も避難地域となり本宮市の本宮高校体育館へ避難しました。その場所も一泊しかしませんでした。老人ホームから避難している人たちに避難移動中の祖父のケア方法を教わり助けられました。

親戚を頼り千葉県に避難もしましたが夫婦共働きということもあり、お互いに仕事を継続するのに有効な場所を選び栃木県真岡市に落ち着き現在に至って

います。

ここは浪江から避難してきている人も近所について、知らない町に家族が孤立することもありませんし、子どももまだ小さいので地域に溶け込むことができているようです。震災前に同居していた祖父母と両親も近所に住んでいましたが、祖父は浪江に帰えることが叶わず今年の4月に亡くなりました。

避難生活も長期になってくると、子どものこと、家族のことを考えるとどのように生活していくのかと非常に悩みます。いつ浪江に帰れるようになるのかわかりませんが、震災前の環境や住民が元通りになるのであれば、またあの浪江での生活を取り戻したいと思っています。



群馬県

江井 美穂さん(井手)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：7月28日 「平成24年9月 広報なみえ掲載」

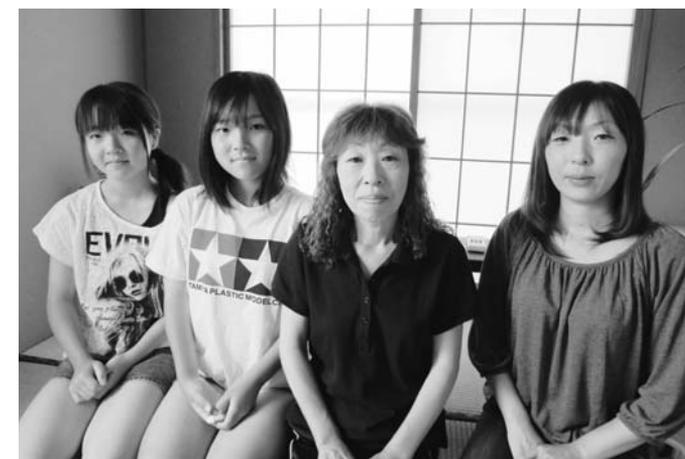
いまの生活を少しでも前に進めたい

—「帰りたいけど帰れない」長く続く戸惑いの時間—

江井美穂さんは、長女の蘭夢さん（中学3年）、次女の愛蘭さん（中学1年）、そして母親の鈴木久美子さんと4人で群馬県高崎市にある借り上げアパートで生活しています。単身赴任で福島県内に勤める夫の満さんとは、離れたままの暮らしが続いています。

地震の直後は、防災無線が聞こえなかったこともあり、周囲の方々よりも避難が少し遅れました。気づいたころには津島への道が大渋滞だったので小高区に避難しました。その後、私たち家族6人は相馬市にいる弟家族7人と合流して、妹夫婦の実家のある群馬県東吾妻町に避難し、3月下旬に現在の借り上げアパートに移ってきました。群馬に来てからは、地域の方や大学関係の方にも大変良くしていただき、ありがたい気持ちです。今気がかりなことの一つは、福島に仕事がある夫と離れたままの暮らしが続いていることです。群馬と福島を往復する時間と経費はかなり負担が大きいです。

もう一つ気がかりなことは、娘たちの高校進学のことです。福島県内に進学すべきか、県外にすべきなのか悩みます。娘たちは、現在の学校でも楽しく過ごしていますが、やっぱり浪江に帰りたいと言っています。母も私も同じ気持ちですが、放射線のことを考えると「帰りたいけど帰れない」という戸惑いに悩まされます。そんな中、この3月に一緒に生活していた祖母が突然亡くなりました。とても健康だった祖母でしたが、あまりの生活環境の変化に苦しかったのだと思います。浪江にいたころのように、広い家の中でんびりしたり、農作業をしたり、ご近所の方とお茶を飲んだりしていた生活が一変しました。私自身も今は仕事をしていないこともあり、友人も近くにはいませんので、一人でいる時間が多くなっているなどと思います。とにかく現在の生活をどうにか前に進めたい。そう強く思います。



▲(左から) 蘭夢さん、愛蘭さん、久美子さん、美穂さん

浪江の暮らしはなつかしいです。十日市は家族みんなが思い出します。今年の夏、高崎市内の店になみえ焼そばが来るといので出掛けて行きました。ふるさとの味が本当になつかしく、おいしくいただきました。浪江を出てからは、スーパーで野菜を買ったり、家の鍵を閉めたり、都会ではあたり前のことですが、慣れない暮らしに最初は違和感がありました。浪江では新鮮な魚や野菜を皆で分け合ったり、ご近所で助け合って暮らしていたことに気づかされます。そんな暮らしがもうできなくなるのかと思うと寂しいです。でも、ふり返ってばかりもいられません。やはり自分たちのこれからは自分で決めなければならぬのだと思います。それぞれが前を向いて、一日も早く元気な姿で皆さんにお会いしたいです。



山形県

畠山佳代子さん(川添)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：8月5日 「平成24年9月 広報なみえ掲載」

浪江に帰れるまで、山形で頑張ります



▲笑顔がすてきな佳代子さん。
現在お住まいのアパートの前で

川添でご家族で農業を営んでいた畠山さんご一家は現在、夫の行男さん、佳代子さん、祖母永子さん、長男敦くん、次男暁くんの5人で山形県寒河江市のアパートで暮らしています。長女朋子さんは、今年の春から専門学校に進学し、仙台で一人暮らしを始めたそうです。

私の家ではいちごを作っていて、避難指示が出た12日の朝も市場への出荷の準備をしていました。避難後、避難所を転々としたが、いっばいで入ることができず、友人の家にも泊めていただいた後、寒河江市にいる私の妹が山形に来たらと言ってくれて、2、3日世話になるつもりでこちらにきました。ですが、爆発のニュースやひどくなる報道を見てこれは当分帰れないかとも思い、不動産屋に行き妹の住むアパートの隣の空き部屋を借り、それから山形で生活

しています。6人にはちょっと狭いですが、やっぱり家族一緒に暮らせることが一番と思っています。

こちらに来てからは、生活の自立のために、昨年4月から働き始めました。夫は現在寒河江市の隣の河北町の農家で、私は家の近くで働いています。おばあちゃんもたまに手伝いに行ったり、草刈りしたり。やっぱり家にて座りっぱなしの方が心配だからありがたいです。長男は、こちらの高校で山岳部に入り頑張っていて、楽しそうな様子なので安心しています。震災のとき、浪江小5年生だった次男も、最初は戸惑いもあったようですが、こちらの中学に入学し友だちができ、部活は柔道を始めました。元気に頑張っています。

山形の方は、「山形に住め住め。」と言って気を遣わず親しくしてくれ、近所の方や職場の方もいい方が多いです。浪江町に帰ろうと思っても自分では決められ

ない現状で、早く町の方針が決まればと思います。これから子どもたちもこちらで就職したり結婚したりするかもしれないことを考えると、今はこちらに生活の基盤を置こうと思います。

先日NHKの浪江の復興についての特集番組に出たときに、浪江の伝統をどう残すかというテーマで話をし、郷土料理の話になりました。凍みもちや干し柿、ゆず料理、鮭料理、かぼちゃまんじゅうなどこちらではなかなか食べられない料理も多く、なつかしく思い出しました。また、若い人を集めてそうした浪江の食文化や伝統を引き継ぐような取り組みができればいいねと話になりました。浪江のおばあちゃんたちの知恵を無くすのはもったいないです。ぜひそんな楽しい取り組みがあれば応援したいなと思っています。



鴨川 俊郎さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部

取材日：8月9日 「平成24年9月 広報なみえ掲載」

心安らかに、明日を考えたい

昨年3月末から福島市内の借上げ住宅で奥さまのご両親、息子さんと一緒に暮らしていますが、現在は実父の介護をするため、いわき市の実家で過ごすことが多いそうです。また、奥さまはいわきの病院に勤務されており、家族全員が福島の家で過ごすのは月に1回程度。離れ離れは辛いことですが、それぞれに生きがいをもち、前向きに過ごしているようでした。

■あの日の記憶

昨年3月11日の大震災が起きたとき、私は仙台の会議に出席中でした。揺れが収まり、午後5時ごろに泉の会場を車で出て宮城県境を超えたのが午前0時ごろ。何しろものすごい渋滞で、自宅にたどり着いたのが翌日の午前2時か3時でした。

地震で崩れた屋根にビニールシートを被せていると、防災無線で避難指示が出ました。とりあえず安全のためかと軽い気持ちで受け止め、両親と息子を連れて身一つで家を出ました。

とても寒い日で、両親が途中から毛布を取りに自宅に戻ってしまい、別行動になりましたが、私と息子は福島市へ。義父は自宅で原発の爆発音をはっきり聞いた後、津島の避難所、二本松を経由して福島市へ避難し、約5日ぶりで合流できました。

現在の雇用促進住宅には3月末に入居し、今に至っています。が、早い時期に落ち着くことができ、本当に幸いだったと思っています。

■家族それぞれに

義父はカメラが趣味で、浪江にいたころから自分で車を運転して、県内のあちこちに出かけ

ることを楽しみにしています。先日はリステル猪苗代のひまわりを撮影してきました。

義母は、この団地内にもともと知り合いだった方がおり、近所の公園をお作りになった矢吹さんから体操や盆踊り、草むしりなどに誘われるなど、浪江にいたころに近い毎日を送っているようです。

私は、この冬、いわき市に住む実母が脳梗塞で亡くなり、病気がちだった実父の世話が必要になりましたので、いわき市の実家で家事をしながら見守っています。食事を作って「おいしい」と言われればうれしいですし、義母や妻のこれまでを思いやることもあります。

この大災害がなかったら、きっと仕事中心で、母の最期を看取ることや92歳になる父の面倒を看することはできなかったでしょう。起きたことは不幸なことだったかもしれませんが、逆に一緒に暮らせる時間をいただいたのかもしれないと思っています。

■一番欲しいものは、明日への安心感

これからの私たちの生活設計として、できれば浪江に近いいわき市に家を建てたいと思い、

土地などを探し始めています。

町にお願いしたいことは、これからの生活を決めるのは町民一人ひとりです。安心して次の生活を考え、踏み出せるよう、補償を担保して欲しいと思います。

元の生活に戻れるという安心感さえあれば、明日が見えてきます。若い世代のためにも10年、20年先の浪江町の将来をもっともって考えていただきたいと思っています。



▲鴨川家のご両親(明次さん、左がモトさん)と、俊郎さん(右)



福島県

山崎 安男さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部

取材日：8月7日 「平成24年9月 広報なみえ掲載」

懸命に働くことが、明日の復興につながる

現在、福島市の借上げ住宅にご夫婦で暮らしています。昨年7月に川俣町で会社を再建し、浜通りでの仕事を中心に、忙しい毎日を送っていらっしゃいます。

原発事故は人災かもしれないが、お互いに理解しながら、復興に向けて困難な課題を解決して欲しいとおっしゃっていました。



▲「森林ボランティアを再開したら、また取材に来てくださいね。」と話してくださいました

■従業員とともに、明日を信じて

あの震災発生時は、葛尾村からの帰りでした。ちよつと山に寄り道をしているときに、大したことはないと思っただけですが、山を下ったときに室原の橋が崩れているのを見て、これは大変なことになったと急いで加倉前の会社に戻りました。従業員も次々と戻りましたので、自宅の様子を見に行かせました。午後8時ごろ全員の無事を確認した後、会社にいた妻とともに自宅に戻りましたが、家の中

には入れないほどひどい状態でした。電気も停まっていたので、真つ暗な中、一夜を明かしました。翌12日、午前6時に避難を呼びかける防災無線が聞こえ、夫婦で葛尾村の叔父を頼ろうと家を出ましたが、渋滞のため3、4時間かかってたどり着きました。

その後、福島市のいとこや娘のいる栃木県鹿沼に2週間ほど避難をし、現在の福島市の借上げ住宅に住むことになりました。私は緑化土木の会社を営んでおり、福島市に避難してから約3カ月目の昨年7月19日に、川俣町で事業を再開しました。32名いた従業員のうち、年齢や避難によって退職した者もいましたが、現在、22名が二本松市や福島市、伊達郡桑折町から通つてくれています。

私は、自ら働くことによつて元の生活を取り戻さなければならぬと思つています。従業員にも「今はつらくても頑張つ

て働こう。その分はきっと明日の生活の糧になるはずだから。」と言いつつ続けています。

■区長として、森林ボランティアに携わる者として

私は浪江町権現堂佐屋前の区長で、126世帯の人たちが今、あちこちで避難生活を送っています。そのほとんどの消息や生活の様子はつかめていますが、やはり私たちが役場では限りがあります。福島支援活動団体さんには、仮設住宅や借上げ住宅を訪ねていただき、町民に声をかけてやって欲しいと思つています。話を聞くだけでもいいんです。きっと励みになると思いますから。

また、もともと林業から興じた仕事でしたので、浪江町にいたころは、火の用心や不法投棄を防止する看板を立てたりして、山を守る森林ボランティアをしていました。仲間は20名程いますが、この福島や川俣でも、道路のゴミ拾いなどの美化活動をそろそろ始めたいと思つ、声をかけているところです。

私は、この福島で頑張つていきます。



長岡 光広さん(権現堂)

取材者：元気玉プロジェクト 江川

取材日：8月13日 「平成24年9月 広報なみえ掲載」

小石饅頭を再び届けたい

前向きに事業の再開を行うために
日々準備をしています

権現堂の「四季菓匠 長岡家」
3代目長岡光広さんご家族。皆
さんには「小石饅頭」の製造販
売元として有名です。現在は、
会津坂下町にご家族5人で住ん
でいます。
震災以降長岡さんは、家族で
郡山のおじさんをたよりに身を
寄せました。それから横浜に住
みながら東京の会社へ就職。娘
さんの幼稚園入園が難しいこと



▲長岡光広さんと娘さんの美優ちゃん(6歳)、和佳ちゃん(4歳)、
結萌乃ちゃん(2歳)、奥さんの圭子さん

で、また福島県内に戻ることを
決めました。長岡さんが頼った
のは同じお菓子を製造する「太
郎庵」の目黒社長です。
「東京でも講演をする目黒社
長ならば、自分が仕事にも就け
るかもしれない。」連絡後すぐに、
「会津坂下にくればいい。」と返
事をもらい現在の職場に。現在
は、太郎庵の和菓子製造部門で
働いています。
「まだ、就職も決まらない人
や転職を迫られた人に比べて、
自分たちは恵まれています。」
と語る光広さん。現在は、3人
の娘さんにも友だちができて、
奥さんと会津の冬も過ごしまし
た。「米も野菜もおいしい。」と
語るのは奥さんの圭子さん。子
どもを通じてお母さん方の友だ
ちも増えたと言います。
光広さんの趣味は草野球。浪
江に住んでいたころは、内野全
般のプレーヤーとして活躍して
いました。思い出は、何といっ
ても夏の高校野球の県大会で準
優勝したこと。双葉高校時代の
3年間はとても充実した青春の
日々と懐かしがります。

現在は、小石饅頭を再びつく

るための準備をすすめる毎日。
「店を出すなら応援するよ。」と
いう目黒社長の言葉にも後押し
されています。避難して1年半。
浪江のことを忘れたことはあり
ません。遠くふるさとを離れて、
もつと情報があれば・・・と思
うことも。
「長岡家は浪江の人に支えら
れてここまでやってきました。
お菓子づくりが再び始められる
ようにがんばっていることが、
少しでも伝われば。」と光広さ
んは話を締めくくってくれまし
た。
3人の娘さんは、笑顔がすて
き。この笑顔が今の長岡さんの
一番の支えかもしれません。



福島県

佐々木 勝さん(藤橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 佐藤

取材日：9月4日 「平成24年10月 広報なみえ掲載」

浪江で交流していた仲間が近くに居て、心強いです

今は、奥さんと娘さんと福島市内の借り上げ住宅に住んでいます。



▲「にっこりはできんなあ」と佐々木さん。

■あのときは情報を求めて必死だったな

3月11日地震のときは、勤務先で遅い昼食をとろうとしていたときでした。直後は、近所の崩壊した家の屋根瓦の片付けを手伝い、電気も水もなく、その晩は情報が欲しくて、カーナビのテレビだけは見られたので、寝具を持ち込み車の中で過ごしました。翌日、隣の人から防災無線で避難を呼びかけていると聞き、一時的な避難だと思って、寝具を載せたままの車で、家族と犬一匹長靴を履いただけの着の身着のまま、津島を目指しました。

12日の晩に「屋内退避」という聞き慣れない言葉を聞かされ、今何が起きているのだろうか？ともう不安な思いでいっぱいになりました。

ガソリンを求めて残量を気にしながら走り、やっと入れられても1台2千円分とか10Lとか制限付き、それでも手を差し伸べてくれる情報を頼って西へ転々と、新潟県佐渡市には1カ月滞在しました。同じ海でも、太平洋と日本海、いやあ寒かったなあ。佐渡の外海は、シベリアからの風がそのまま吹き付けるから、と後で知りました。

■こうしていると気が滅入ることもあるんだ

「心が滅入る」って言うのかな、こうしているといいたまれない気持ちになります。これからを思うと、若者は戻ってくるのか？将来の影響は？きちんとした、的確な情報がほしいと思います。がれき受け入れに関するニュースを見てみると、「現実的ではない」夢より希望がほしい」と切実に思います。中間貯蔵施設建設もしかり、「手も足も出ない

状況で大海に投げ出されるようなもの」。国や行政には、私たちが自分の方向性を定められるようなフォローを、しっかりやってほしいです。まずは補償をきちんとしてほしいです。

■浪江での仲間とやっと慣れた福島でグラス片手に語り合う、それが何よりの楽しみ

このままじゃ、人間もダメになつてしまう。滅入りながらも、このままではいられない、と思います。浪江で交流のあった友人・知人で、福島市内に住んでいる者と連絡を取り合い、グラス片手に語り合う、その時間が励みになっています。福島市にもやっと慣れてきました。国や町の動きをニュースで見ながら、ため息をつきつつも、家族と友人・知人と支え合って一歩でも半歩でも前へ、前へと思っています。



小川 靖夫さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 佐藤

取材日：9月3日 「平成24年10月 広報なみえ掲載」

妻が私に内緒で、ここ数年の私の作品(打刃物)を毎年大事に取っていてくれたので、こうして持ち出すことができました

浪江町で唯一の打刃物鍛冶職人だった小川靖夫さん(銘は重久、小川鍛造工場)。原発事故後転々とした後、昨年4月から、棟違いに長男家族、次男家族が住む、福島市内の借り上げ住宅に落ち着きました。



▲妻 与志子さんと孫の沙里さんの愛犬プー



▲作品の一部。箱には妻与志子さん心くばりのメモも入っていました。奥に見えるのは珍しい牛の爪切り(左用・右用)

■今なつかしく思っているのは、十日市や自然の恵み豊かな浪江のこと
浪江町は、ほんとうにいいところですよ。雪も降らないし、自然いっぱい、春は山菜採り、秋はきのこ採り、それに泉田川、高瀬川のサケ漁…。思い出すと

辛いんです。賠償なんて何もいら
ないから、あの浪江町に戻して
ほしい。子どもたちに「ふるさ
と」を残してやれないのが、悔
しいです。

私の仕事は、打刃物鍛冶です。
一日一丁か二丁しかできない、
時間のかかる仕事です。今ごろ
はいつも、十日市のために8月
までに粗作品を作りあげ、十日
市までにそれらをじっくり丁寧
に仕上げていく、そんなふうで
した。永年のごひいきさんが、
作品を一堂にお見せできる十日
市を待つて、浪江町内外から足
を運んでくれました。

■今でもお客さまが覚えていて
くれて

マグロ解体用の大きい特殊出
刃包丁(刃渡り33cm)を、市場な
どからの注文で作っていました。
福島市内に落ちていてから、い
わきの魚市場の方から「小川さ
んの、あの包丁でないと。」と頼
まれ、一時帰宅のときに作って
置いたものを持ち帰り、このペ
ランダで丹念に仕上げで納品し
ました。そのとき、妻が私に内
緒でこれまでの作品を、丁寧に

一丁ずつ新聞紙に包み、年ごと
に分けて大切に保存していき
れたことを知りました。うれし
かったですね。これだけは持ち
出せました。宝物です。今でも
「やっぱり小川さんの包丁がほ
しい」と言ってくださる方がい
て、ありがたいですが、妻が大切
に取っていてくれたこれらは、も
う作れないと思うとやはり手放
せません。

■家族と健康で

この部屋から、息子たちの住
んでる部屋が見えるんです。息
子たちの嫁同士が仲がいいのが、
私の自慢です。孫が朝学校に登
校するとき、声をかけます。孫
の沙里から学校のできごとを
聞いたり、孫の斗夢とむの高校の卓
球部での活躍ぶりを見聞きでき
るのが、楽しみです。この子ら
の先々は…、もう一度作品を作
てみたい…、そんなことを考え
るとたまらなくなりますが、でも
立ち止まってはいただけません。
前を向いて、家族円満に、健康
に、心の楽しみを増やすことで、
希望へつなげていきたいと願っ
ています。



鈴木 恵美さん(棚塩)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：9月11日 「平成24年10月 広報なみえ掲載」

懐かしい人との再会を心待ちにしつつ、 ただいま子育てに奮闘中

「子育てで毎日バタバタしていて、ほとんど落ち込む暇もありません」という鈴木恵美さん。現在、仙台市の借り上げアパートでご主人と3人のお子さん、お義父さん、お義母さんとともに暮らしています。震災時には近くの高台に避難し、ご家族全員が無事でした。しかし広大な自宅は津波で流出。近い将来、浪江に似た景観の岩沼市に「仮の本家」を建てる計画を進めています。

■浪江でのびのび子育て

私は相馬市の生まれで、浪江町の嫁ぎ先で暮らしたのは4年間です。その間に長男(5歳)、次男(4歳)、長女(2歳)と3人の子どもに恵まれました。浪江にいたころは夫の曾祖母、祖父も健在で、10人の大家族。家の敷地も広く、畑もあるし、海岸へも子どもと一緒に歩いて行けるという。本当にのびのび子育てができる環境でした。

長男は請戸の児童館に通っていました。ここは私にとっても、親しいお母さん友だちができた思い出深い場所です。

大地震が起こったあの日も、いつもどおり児童館にお迎えに行き、家に着いて2、3分というときに大揺れがきました。次男と長女はお昼寝中、義父もたまたま休日家で家において、家族がそろっていたのは幸運だったのかもしれない。しばらく家の中で待機していましたが、外に出た義父が慌てて戻って来て「津波が来る。逃げよう!」と。あれほどの大津波が来るとは思われないまま高台に避難し、家族全員が助かりました。

■友人や親戚との再会を

1年前から仙台の借り上げアパートに住み、今は8人でにぎやかに暮らしています。長男と次男は名取市の幼稚園に通っていて、友だちも増えました。長男は人見知りでしたが、仙台に来てからは、園に行きたくないと思わなくなりました。一度もあきらめませんでした。たくましくなりましたね。兄弟で「津波ごっこ」をするのが気になります。今はそつと見守っています。

私のほうは、2歳の長女はまだ手がかるし、園の行事があるときはお手伝いに行ったりと、毎日バタバタ。落ち込んでいる暇もなく、それなりに元気に過ごしていますよ。ただ残念なのは、請戸の児童館で一緒だったお子さんたちの成長が見られなかったことです。お母さんたちとお会いできないのも寂しいですね。一度だけ福島で集まりましたが、ああいう機会を定期的に持てたらと思います。

今後の家のことについても家族で話し合っています。借り上げアパート

では周りの方の迷惑にならないよう、叱らなくてもいいようなことで子どもを叱ってしまうことが多いです。うちは本家なので、親戚が帰省できる場所も必要だろうと。それで今、岩沼市に家を建てる準備を進めているところなんです。

なぜ岩沼市かというと、福島県に近く景色も浪江に似ているから。義父は「浪江に帰るまでの仮の本家、別宅だ。」と言っています。私としてはとりあえず落ち着ける場所ができ、懐かしい人たちに会えたら嬉しいです。



▲鈴木恵美さん。9月6日に2歳のお誕生日を迎えた長女の杏奈ちゃん、お義父さん、お義母さんとともに。



千葉県

山田 愛梨さん(中1)(田尻)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：8月31日 「平成24年10月 広報なみえ掲載」

全日本ジュニア綱引選手権大会で 銅メダルを取りました

千葉県習志野市公務員宿舎で、お父さん、お母さん、弟の悠愛くんと暮らす山田愛梨さん。今年の春、中学に進学しました。

私の家は田尻にあります。弟と2人、大堀小学校に通学していました。3月11日、地震が起きたときは、掃除の後、着替えて帰る間際でした。ランドセルも何も持たず、上履きのまま校庭に逃げました。お父さんが車で迎えに来てくれて、おじいちゃんの家で、家族みんなが一緒になったときには、ほっとしました。その日の夜は、水道も電気



▲左から愛梨さん、おばあちゃんの琴子さん、弟の悠愛くん

も使えない中、ろうそくを灯し、石油ストーブでお餅を焼いて食べました。次の日、近くの避難所に避難しましたが、原子力発電所の爆発音が聞こえ、もっと遠くに逃げないと危険だということで、家族7人で、原町の保健センターに移動しました。その後、埼玉や千葉の親戚のお家において、昨年の6月に今の公務員宿舎に引っ越してきました。おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおばあちゃんたちと隣り合わせの部屋で暮らしています。震災の前は、おじいちゃんが経営する水道屋さんで家族みんなが働いていました。千葉に避難して来ているので、水道屋さんには休業状態です。

私は、小学校2年生のときから、ヤングプラザスポーツ少年団に入って、綱引きをやっていました。震災後も月に数回、東京や猪苗代で練習をし、今年の全国大会では銅メダルを取ることでできました。綱引きの練習のたびに、お友だちと会うことができ、とても楽しかったのですが、全国大会を最後に、スポーツ少年団は休団になりました。埼玉県や千葉県、福島市、いわき市、二本松市と、みんなばらばらの場所に住んでいるので、新しい団員の募集が難しいこと、今の団員も集まるのが、大変だからです。

中学校に入学してから、ソフトテニス部に入りました。夏休み中もほとんど毎日、部活動があり、忙しいけれど楽しいです。千葉でも、友だちがたくさんできました。お店や駅が近くにあるので便利です。でもやっぱり、浪江の大堀小学校の友だちと、みんなと一緒に卒業して、同じ中学校に行きたかったです。将来、田尻にある家に帰ることができたらいいなと思います。



新開 正文さん(井手)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：9月8日 「平成24年10月 広報なみえ掲載」

会えなくとも、浪江の仲間とつながっていたい

震災前は、3世代同居で暮らしていた新開さんご夫婦。今は、練馬区の都営住宅で、親子5人で暮らしています。



▲左から海月ちゃん、奥さんの亜由美さん、冬也くん、正文さん、大空人くん

私たちが家族は井手に住んでいました。地震が起こったときは、私は勤務先のシルバー人材センターに、妻は次男の大空人(たくと)を出産したばかりで、産休で自宅にいました。自宅周辺は津波の被害はありませんでしたが、余震がひどく、家の中にあるのは危険だと思い、その日の夜は、車の中で過ごしました。翌日早朝の避難命令を聞き、川俣の小学校に避難しました。その後、群

馬県館林市、埼玉県川越市を経て、私の父母と祖母の3人は福島県の借上げ住宅に、私たちは何とか、4月1日に、この都営住宅に入居することができ、長女・海月(みづき)の入学式をさせてあげられたので、ほっとしました。震災前は、3世代同居、8人で暮らしていました。家の周辺には、田畑が広がり小川が流れ、庭には池があり、子どもたちは恵まれた自然の中で、のびのびと暮らしていました。私も請戸の海で仲間たちとサーフィンを楽しんでいました。月1回のビーチクリーンやボランティアへの参加をしながら、仲間たちと自然や地域と関わってきたことを思い出します。

海月は、しばらくの間「お家に帰りたい」と泣くことが、多々ありました。長男の冬也(ふゆや)は、自転車に乗るのを覚えたばかりで、残してきた自転車の心配をしていました。子どもにとっても、大きな環境の変化に対応するのは大変なことだと思います。震災のとき、生後5カ月で、ミルクやおむつの心配をした大空人は2歳になりました。知り合いもいない慣れない土地での生活を、妻はよくやってくれていました。

私は、転居後、なんとか新しい職を得ることができました。また、早く地域に馴染みたいと思い、小学校のPTAのソフトボール部で活動し、少しずつですが、交友の輪を広げることができています。しかし、隣所の付き合いがほとんどない暮らしで、以前のように、子どもたちだけで自由に遊ばせることは難しい状況です。浪江のように、自然豊かな場所でのびのびと遊ばせることができたらと思います。

震災前までいつも近くにいた仲間との交流が、かけがえのない素晴らしい時間だったとあらためて思い出します。またいつの日か浪江の請戸の海をみんなで見たいと夢見ています。幼い子どもたちのことを考えると帰るのは難しいのかもしれませんが、仲間とは、なかなか会うことはできなくても、連絡を取り合い、心はつながっていることができると思います。



大阪府

紺野 昌則さん・葉子さん(権現堂)

取材者：きょうとNPOセンター 田口

取材日：9月8日 「平成24年10月 広報なみえ掲載」

現在進行形の原発事故。その危険性から目をそらさず、行動し続けたい

紺野さんご夫婦は、昨年3月に大阪への避難を決意。当時、高1、中2、中1だった3人の子どもたちとともに大阪での生活を始められました。長年営まれてきた酒屋業、そして何より浪江町の仲間たちに想いを馳せながら、浪江町の置かれている状況に向き合ってこられました。

■放射線という見えない脅威に立ち向かうことになった大切な故郷：浪江町。

いま、大阪にいる私たちが、浪江町のためにできることは何か。そのことについてずっと考え続けています。

浪江町が置かれている状況について「真実」を知りたいという思いから、こちらで開催されている勉強会に参加したり、講演会を聞いたり：さまざまな形で情報を得て来ました。

なぜなら、福島原発事故は過去の出来事ではなく「現在進行形」であり、「未来を生きる子どもたちの健康を最優先に考えたい」という強い願いからです。

これからのことを考えるときに、町民として放射線の危険性について目をそむけることなく、子どもたちや孫たちの世代に納得してもらえ「未来」に向けた決断をする責任があると思うのです。

■あの日から、どれだけ悔しい涙を流してきたか…。

県外に避難してきた自分たちと県内の仲間たちとの「温度差」も感じています。

でも、あきらめるわけにはいきません。放射線の危険性について冷静な心で学びを深め、町

民目線での発信をこれからも続けていきたい。

そして個人的には、いつの日か「酒屋を再開ができた！」と言える日が来ることを夢見ながら、できることを一つひとつ積み重ねていこうと思っています。



▲後ろ：左から長男の喜弘さん、次男の純也さん、長女の萌子さん
前：左から昌則さん、葉子さん



福島県

美容室わたなべ 渡部 邦子さん(西台)

取材者：浪江町役場 長沼・嶋原

取材日：9月4日 「平成24年10月 広報なみえ掲載」

笑ったり励ましあったりできる お店にしていきたい

浪江では、アットホームな美容室を経営していた渡部さん。震災後、あきらめかけたこともありましたが、たくさんの方との出会いや手助けがあり8月に“美容室わたなべ”を南相馬市原町区にオープンしました。

「人とつながれる場所を作っていきたい」と明るい声と笑顔で話す渡部さんの美容室は、顔なじみの方が集まる憩いの場になっています。

震災後、津島に家族5人で避難しました。4匹の犬が一緒だったので避難所の中には入らず外で過ごしました。皆さんも同じですが、ひと家族で1個のおにぎりを分け合うこともありました。このころは、もうだめだ、生きていけないと、思ったこともありましたが、櫛葉に住んでいた姉が避難先から通行止めは何度も合いながら迎えに来てくれて、4日目に白河に行きました。その後、伯母のいる横浜へ避難して3週間お世話になり、喜多方、福島を経て南相馬に落ち着き、8月11日に“美容室わたなべ”を開店しました。南相馬での再開を決めたのは、一時帰宅のときに少しでも顔を出してもらえればと思ったからです。1カ月かけて店舗を探し、近くの浪江の方にもたくさん助けってもらいました。美容室では娘がエステを担当し、ハワイアンロミロミというリンパマッサージやゲルマニウム温浴もやって心身ともにリラクセスできる癒しの場にもなっただけだと願っています。

震災後、親戚が物心ともに支援をしてくれたり、行く先々で新しくできた友人が助けてくれたり、杉乃家さんを始め浪江の方々の応援もいただき本当にありがたく思っています。住まいは、犬がいるためなかなか受け入れてもらえずに辛い思いをしました。産屋さんもいてそこでも助けられましたが、息子は仕事で仙台にいます。主人と娘、おじいちゃんとは家族4人が一緒にいられることはとても気がかりですが、毎日欠かさず電話をしています。福島にいるときに知り合った“花見山を守る会”の方たちには本当に助けられました。お茶を飲んで話をして元気をもらい、今の原町での生活につながっています。いろいろな所で知り合った方たちが、どこに行ってもみんな声を掛けてくれます。たくさんの方々との出会いがありこまでくることができました。



▲浪江からのなじみのお客さんが集まってくれました。「みんなで話せるから、再開してくれてうれしいよ。」と笑顔で話してくださいました。
後列左から、本林子工子さん(双葉町)、松本スエ子さん(西台)、渡部さん。前列左から、門馬みやこさん、常子さん(酒田)

開店して、今までのお客さんと顔を合せて話ができることが一番良かったことです。商売繁盛も大事ですが、これからは、来てくれた方が元気になったり、励ましたり、励まされたりしながら、浪江の方ももちろんのこと、原町の方やいろいろな人とつながって情報発信していけるお店にしていきたいです。早くいわきまでの高速道路ができて、もっとたくさんの方に来ていただけるとうれいですね。



安部 一さん(北幾世橋)

取材者：NPO法人とちぎボランティアネットワーク 徳山

取材日：9月22日 「平成24年11月 広報なみえ掲載」

風薫る彼の地に思いを寄せて

安部さんは、昨年の4月から栃木県下野市で生活しています。年齢の割に若々しく元気な印象の方です。奥さん、長男、弟さんと同居し、そして近くには子どもたちの家族もお住まいです。

昨年の3月11日の地震前の凄まじい地鳴りの音や、地震の揺れ方はそれまでに経験のない激しいものでした。

現在の家は平成になって新築したので倒壊の心配はありませんでしたが、以前の家だったら倒壊していたのではないかと思います。

防災放送やテレビでこの大震災の状況と、原発の事故を知り原発避難者となりました。親類を頼り数力所に渡り避難しましたが、長男の会社の関係により栃木県下野市で生活することになりました。

下野市のボランティアや市役所の方々が「私たちにできることはないか。」ということで、気軽に集まって話ができる場所を作ろうということになり、昨年6月から月2回のお茶会を開催していただき、さまざまな情報提供や情報交換をして支援をいただいています。下野市には123名が避難していて、南相馬市と浪江町の方が多いです。

私が震災前に住んでいた幾世橋は田園地帯で海にも川にも近く、新緑の芽生える季節はまさに「風薫る」という言葉が当て

はまるどころでした。

避難地の甥たちが避難生活の長期化に伴い、昨年9月に従兄会を飯坂温泉で催してくれました。従兄会でさらに絆を強くし、各々の復興再生に立ち向かうことを誓い合いました。

いま非常に残念なことは、放射能汚染により、明治以来100年を超す「泉田川の鮭増殖事業」が途絶える危機にあります。個人的には終の棲家を追われ、家族で長年営んできた田畑も今では手入れすることもかなわず荒れ果て、先祖の眠るお墓も崩壊したまま放置状態だということです。一日も早い原発事故の収束と除染を早急に行ってほしいです。

避難生活も長期になってきています。避難生活が長期になればなるほど避難区域が解除になったとき、帰ることを悩む人が多くなることを心配します。私は残念ながら若くはありません。家族や自分のことを思うと悩むことはたくさんありますが、健康な体のうちに浪江に戻り、震災前のあの風景や生活を取り戻せたらと思っています。





茨城県

高野 里美さん(西台)

取材者：茨城NPOセンター commons 小原・白土

取材日：10月13日 「平成24年11月 広報なみえ掲載」

なんとか頑張ってます

今年の8月に日立に越したばかりの高野さん。旦那さん、娘さん2人と一緒にアパートで笑顔あふれる暮らしをしています。



▲お姉ちゃんあいるの愛瑠ちゃん、妹ゆうあの優愛ちゃん。浪江といえば？と聞いたら、「なみえ焼そば」だって。

■気持ちに余裕ができました
浪江町では夫と同じ工場に勤めていて、震災のときも働いている最中でした。震災が起きた直後は津島へ避難し、そして福島市に避難しました。そのあと北陸工場のある石川県に移り住んだのですが、まったく知らない土地での言葉や生活文化の違いに戸惑いもあったし、親戚が関東に住んでいたため、今年の8月に日立に来ました。

夫が今までと同じ業態ですぐに仕事が決まったので、安心しました。私自身も、福島にも近くなつたし、日立での生活環境が良いので気持ちに余裕ができました。
日立の方が都会だけど、浪江と日立って似てるところがあります。言葉のなまりは日立のほうが強いくらい(笑)
石川は車の交通状況も浪江と違って運転が難しかったんですが、今は運転できるので嬉しいです。用事があっても気が楽になりました。
■浪江町は、思い返すと住みやすかったです
浪江町で元の暮らしができるんならしたいです。住んでいたころは、不だし田舎だと思っていたけれど、思い返すと住みやすかったなと思います。必要なものはそろっていたし、慣れ親しんだ土地だから。安心して散歩もできました。
両親も浪江町に住んでいたので行っていました。それができなくなってしまうので子どもが寂しがっています。

ただ、やはり日立は福島に近いので、放射能の影響が心配ですね。子どもが将来結婚したり、子どもを産んだりするときに、相手の親御さんに何か言われやしないかって。福島にいたことをあまり堂々とできないのは辛いです。
■大きくなってもみんなに会えるって伝えていきたい
私はずっと浪江町で暮らしてきたので幼なじみがいます。でも、子どもたちにはいないんです。幼なじみができる前に離れることになってしまったから。
でも、上の子は当時小学2年生だったのでお友だちと今も文通をしています。会津で夏休みにやった浪江小のイベントでも、懐かしい友だちを見つけてすぐに表情が明るくなりました。時間が経っても子どもはすぐ仲良くなるんだなって。
下の子はまだ小さいので、震災のこと自体を忘れてしまうかもしれない。けど、子どもたちには浪江町のことを忘れてほしくないし、大きくなってみんなに会えるのだということを伝えていきたいと思っています。



早川 弘さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部

取材日：10月11日 「平成24年11月 広報なみえ掲載」

ももには戻れないけれど、前を向いて歩こう

本宮市荒井の恵向仮設住宅はペットが飼えるゾーンがあり、常に一緒だった老犬のために選んだそうです。その愛犬は今年4月2日に亡くなりましたが、「まさに、私たちがかすがいのようでしたが、今は夫婦二人の時間を大切に過ごしています。」とお話ししてくださいました。



▲お二人並んで微笑んでくださいました

■震災直後の数日間

3月11日は仕事で権現堂の現場に出ており、発生直後、車を取りに会社に戻った後、直ぐに自宅に帰りました。妻は夕方から出かける予定があり、身支度をしている最中でした。夜は電気だけは通じていたのでごはんを炊いて、我が家を頼って来た妻の兄たちや妹夫婦とともに過ごしました。

妹の車にはガソリンがなかったの、一緒に4人で室原から津島を目指しました。ほどなく帰宅できるだろうと毛布を1枚ずつしか持たなかったし、年老いた犬は自宅に置いたままでし

た。すでに津島中学校、浪江高分校も、つしま活性化センターも人であふれ、ようやく空いていた南津島上集会所で10人前後で室内の掃除をしたり、炊き出しをしました。地元の区長さんが米や野菜を差し入れてくださり、本当に助かりました。

■「新幹線の車内で悲しい思いをしました」と知恵子さん

15日は水戸に行く予定でしたが、ガソリンが少なく、那須塩原辺りに避難しようと走っていたときに、郡山で買い求めた携帯電話でようやく東京に住む娘や千葉の息子と連絡がとれました。息子の提案で、白河でスクリーニングを受け、那須塩原駅に車を置いて新幹線で行くことになりました。4日間も着の身着のまま乗ったものだから、乗客の方々が私たちと距離を置きたがっていることを感じ、悲しくなりました。

千葉の息子や娘の嫁ぎ先の実家に世話になり、4月5日に25日ぶりに自宅へ犬の様子を見に行くことができました。役場の情報を頼りに、犬を連れて夫の車と2台で向かった針道小学校で二次避難所のことを知り、14

日から約5カ月、ペットと過ごせる磐梯町の七ツ森ペンション村「こりす」にお世話になりました。その後、この恵向仮設に9月初めに移りましたが、病气だった愛犬は7カ月後に息を引き取りました。

■「愛犬が、二人一緒の時間を作ってくれました」と弘さん

妻が習っていた大熊町のカラオケの先生が会津若松に教室を開いたので、妻を送り迎えするうちに、先生の歌を聞いて私も習うことになりました。10月5日には発表会があり、その様子は地元新聞にも大きく取り上げられました。

上ノ原は隣近所がとても仲が良かったのに離れ離れです。妻はとても寂しいようですし、家のあることをするのが好きなので、適な住まいを望んでいます。浪江の町や私たちの将来のことが決まらなければ動くに動きません。「今は仕方ないよね」と笑いながら、前へ進むしかありません。



川島 美幸さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 阿部・古山

取材日：10月12日 「平成24年11月 広報なみえ掲載」

悪いことばかり考えても仕方がない、不安の中からも良いことを探そう

現在、福島市内の借上げ住宅に中学1年生の娘さんとお父さんと3人で暮らしています。

まもなくオープンする「おうちカフェ凧」（飯坂町、スーパーいちい並び）の準備のため、忙しくしていらっしゃいます。

■とにかく、動いていました

地震当時は新町のまちづくり会社東遊紀の事務局をしていました。まず私のお店の様子を見に行き、それから急いで娘の通う小学校に向かいました。保護者の方たちと子どもたちを校舎の3階に誘導する手伝いをしました。その後、自宅に父を迎えに行き、今度は中学校に避難しました。電気もなかったので、地元の方が持つて来てくれた自家発電機はとても助かりました。そこでは、商工会女性部の方々と避難者リストを作成しました。明け方に白い防護服を着た警察の人が来て、とにかく避難してくださいとの指示を受け、津島を目指しました。避難した体育館でも、15日の朝まで誘導などの手伝いをしながら、もうここで死んでしまうのかなという思いが頭をよぎりました。

それから、福島青年会議所会館（福島市）に避難しました。そこでも緊急物資を新地やいわきに搬送する手伝いをさせてもらいました。

二次避難で猪苗代に移り、昨年の7月までお世話になりました。たが、それでも休まず動いていました。動いていないと病気になるってしまいうでした。炊き出しの手伝いや、青森まで焼そばを焼きにも出かけました。また、全体の資格を持っていたので近所の小川病院さんでリハビリの手伝いもしました。病院には浪江から避難している方々も多く来られ、互いにお話をしながら励まされました。

■たくさんの人に出会い、助けられました

避難してきた友だちと始めるカフェのオープンに向けて、1からスタートです。今は、辛さ半分、嬉しさ半分の気持ちです。今までお世話になった人たちとつながっていたいという思いで、

大堀相馬焼協同組合やいろいろお世話になった方々をお願いをして準備をしています。さらに味自慢のコーヒーは、猪苗代の方から紹介していただいた群馬の専門店から仕入れています。

娘が一番の応援者であることがとても心強いのですが、県外に避難したほうが良かったのかもしれないと思うこともありま

す。放射能の身体への影響がやはり気になり、自分で確認するために、娘が口にする物は二本松まで測定に出かけています。さらに、家の周りも線量が高めなので、登下校も車で送り迎えしています。娘は合唱部で頑張っています。今につながるいい出会いもたくさんありましたし、私も前向きでいようと思います。これからも、多くの人とつながりながら“輪”を作っていくたいと思っています。



定休日 日曜日
時間 10時～17時

素敵な器でおいしいコーヒーでおもてなしをします。小さなお子さま連れのお母さまもお越しください。お子さまが喜ぶ絵本なども用意しています。

▲まもなくオープンの「おうちカフェ凧」で。



千葉県

柴 陽子さん(請戸)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内

取材日：10月6日 「平成24年11月 広報なみえ掲載」

先は見えないけれど、それでも今は 頑張っていくしかない

現在、ご主人の政一さん、長女遥香さん(中2)、
次女康羽さん(小6)と、隣にはご両親、そして弟
さん家族が同じ棟で暮らしている。

子どものお迎えにそろそろ学
校に行かなければいけないと思っ
ていた矢先、地震が起きました。
私はすぐに子どもたちの元へ。
漁師の主人は海の様子を観て、
船ですぐに津波をかわして沖に
出られたため、助かりました。
タイミングが悪かったら、どう
なっていたか解りません。
娘たちは、上着を着る間もな
く上履きのままで学校から大平
山に行き、さらに山を越えて避
難場所へ。足が不自由な康羽は
学校のみなどと一緒に行くのは
無理なので、私とともに行動し



▲陽子さんと次女の康羽さんと仲良く一緒に。

ました。夕方ようやく遥香と役
場で合流し、隣の体育館で一晩
過ごしました。
車中で一泊するなど大変な思
いをしましたが、両親や弟家族
も含め総勢12名で千葉県四街道
市の叔父の家を頼りに避難して
きました。その後、市役所が用
意してくださった現在の社宅に
移りました。ここは1棟が空き
家になっていたこともあり、両
親、弟家族、私たち家族それぞ
れがこの同じ棟に住むことがで
きました。他にも福島から避難
して来た人たちが住んでいます。
1階には支援室があり、月に1
回お茶飲みをしながら、おしゃ
べりをしています。
今、遥香は友だちもでき、部
活の吹奏楽部でサックスを吹い
ています。しかし、請戸小でやつ
ていたソフトボールがやりたかつ
たのでしようね、高校ではソフ
トボールをやりたいと言ってい
ます。康羽は、友だちはできた
ものの、まったく新しい環境の
ため、一時的に視力と足の状態
が悪化し心配しましたが、今は
体調も戻り友だちの家に遊びに
行ったりしています。

私は市役所の紹介でイトーヨー
カ堂の鮮魚コーナーで働いてい
ます。請戸では、獲れたての魚
を食べていたので、高い値段の
ついた魚が並ぶ様子にびっくり
する毎日です。主人も紹介して
いただいた会社で働いていまし
たが、漁師だった主人にとって、
陸の上でいったい何ができるの
かと葛藤があったのでしよう、
今は新しい仕事を探しています。
今、伝えたいのは、大変な捜
索の最中にも関わらず、自衛隊
の方がランドセルと学校で使っ
ていたものを持ち出してくれた
ことへの感謝の思いです。津波
ですべてなくなってしまう中
での唯一のものですから。
請戸では一緒に暮らしていて、
今は二本松に二人でいる主人の
両親が気がかりですが、現状で
は、子どもを連れて帰ることは
できません。しかし浪江のこと
はいつも心にあります。主人と
話しているのは、いずれ漁を再
開してお世話になった人、友人、
知人に請戸のおいしい魚を届け
たいということです。そして先
の見えない中でも、頑張ってい
くしかないと思っています。



新潟県

小松 雄次さん(川添)

取材者：NPO法人くびき野サポートセンター 野本・竹内

取材日：10月21日 「平成24年11月 広報なみえ掲載」

浪江の思い出は人とのつながり

小松雄次さんのご家族は、現在新潟県柏崎市の借り上げ住宅で避難生活を送っています。ご本人は平日福島に戻り以前の仕事を続け、週末になるとご家族に会いに戻る日々を送っています。

震災発生時、私たち夫婦は福島第一原発に勤務していました。家族の安否を確認しようにも電話は通じない状況。とにかく長男と次女の通う小学校へ向かいました。子どもたちと合流し、7時ごろ自宅へ到着。家の中はめちゃくちゃでしたが、両親と長女は無事でほっとしました。翌朝から避難指示にしたがい津島の農協に避難しましたが、避難区域の拡大のため他の場所を探すことに。2台の自動車各地を転々としている間にガソリンが切れてしまい、1台を乗り捨てなくてはなりませんでした。情報源はラジオのみ。不安感が募りました。避難生活の疲れから父や長男が体調をくずしてしまい困っていたところ、泉崎村の親戚がうちに来るようにと声をかけてくれました。ここでやっと落ち着いてこれからの仕事のこと、子どもたちの学校のことなどを考える余裕ができました。

新潟県に仕事のあてや子どもたちの編入先が見つかり、4月12日に柏崎市の借り上げ住宅に

引越すことが決まりました。新たな土地での生活は不安がなかったわけではありません。私たちが受け入れてくれる心配りで、ふさぎこみがちな子どもたちがこちらの学校になじめるか心配でした。しかし柏崎市の人々は中越沖地震の経験から私たちが被災者の気持ちをよく理解してくれて、とても親切に接してくれました。子どもたちも時間は

かかりましたが今の生活になじみ、避難先の住宅で新しい友達と楽しそうに遊んでいます。長女は吹奏楽、長男は剣道、次女はピアノに打ち込み、日々を過ごしています。

現在の私は一人福島に戻り仕事をしています。家族のことが心配で、週末になると柏崎市に会いに行く日々。初めは家族を元気づけるためでしたが、今では自分も家族から元気を

分けてもらっています。そんな生活を続けていると、何よりも大切なのは人とのつながりであると感じます。浪江町には当然戻りたい。けれども私たちは家族だけが戻るのでなく、ばらばらになってしまった町民がみんなで戻ることの意味があると思います。なぜならば、浪江町の思い出はそこでもともに生きた人々との思い出だからです。



▲後列：左から長女の結衣さん、次女の菜結さん、おばあちゃんの波子さん、奥さんの房子さん
前列：左からおじいちゃんの洲三さん、長男の颯太くん、雄次さん



東京都

藤田 泰夫さん(権現堂) 半谷千代子さん(権現堂)・村形 孝子さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：10月11日 「平成24年11月 広報なみえ掲載」

東京の東雲^{しののめ}で、支えあって暮らしています。

東京都江東区東雲にある東雲公務員住宅には、福島県から1,250名もの人たちが避難し暮らしています。うち、浪江町民は約300名。江東区の後押しもあり、避難してきた住民の交流などを目的にした自治会組織「東雲の会」が昨年9月に設立され、「しののめサロン」など、さまざまな活動に取り組んでいます。

■浪江にいたころの暮らし

〈藤田さん〉

私は浪江町で32年間、寿司屋をやっていました。地元、請戸漁港から仕入れた魚は獲れたてで、絶品でした。二人の息子も修行から帰って来て、家族経営の店として、地元町内からたくさんの人たちが来てくれていました。

〈村形さん〉

夜ノ森公園や請戸川リバーラインの桜はきれいでした。花火も打ち上げられて、季節の楽しみになっていました。

■避難して来て

〈藤田さん〉

避難して来た当初から今まで、江東区や近隣の住民の人たち、企業からさまざまな支援を受けることができ、本当にありがたかったです。衣類や野菜といった食品や日用品から、歌舞伎のチケットなど、寄付してもらったものを分配するのも「東雲の会」の役割。避難生活も長くなっ

ていく中で、ゴミ出しのルールなど、確認し合わなければいけないことも出てきたし、孤独死する人や病死する人も出てきました。誰が住んでいるのかわからない状態から、みんなでお年寄りを助け、小さな子どもたちを守りながら避難生活ができたらと「東雲の会」の活動が始まりました。

■今の暮らし

〈半谷さん〉

私は、嫁と4人の孫と一緒に暮らしています。

息子はいわき市で働いています。ここは、

近くにスーパーや病院があり、とても便利な所なので暮らしやすいです。

〈藤田さん〉

「東雲の会」の活動は震災で、ここに避難してきているすべての人たちを対象



▲前列右から 村形孝子さん、半谷千代子さん
後列右から 藤田泰夫さん、大坊雅一さん

にしています。「無理強いはせず、来るものは拒まず」です。毎週火曜日と木曜日に開催している「しののめサロン」では、手芸教室や体操教室をやったり、「ハンドマッサージ」のボランティアの人に来てもらったりしています。住んでいる人たち同士で、自由におしゃべりできるような茶菓も用意しています。保健所から、お医者さんや看護師さんに来てもらって健康相談もやって



いるし、補償の問題や生活不安に
 応えられるよう、弁護士さん
 や東京都の仕事センターの職員
 さんにも来てもらっています。
 江東区や社会福祉協議会、日本
 赤十字や周辺の地域住民の皆さ
 ん、おおぜいの人から支援して
 もらっています。

一方で、支援してもらってば
 かりの暮らしから、自分たちで
 できることを始めなければと思っ
 ています。手始めに、クリーン
 作戦と名づけ、昨年の暮れから
 毎月1回、地元町会のゴミ拾い

を続けています。さらに、今年
 の3月11日に開催した「慰霊祭」
 で、すいとんを作って参加者に
 ふるまったのをきっかけに、有
 志を募って、ゲートブリッジ下
 の若洲公園に店を構え、かき氷
 や生ビール、からあげなどを作っ
 て販売しています。土日は結構
 なにぎわいになるんですよ。

■今後のこと

〈半谷さん〉

浪江に帰ることは半ば諦めて
 いますが、自分の代で家がなくな
 ると思うと辛いですね。

〈村形さん〉

息子の嫁が、こちらに来てか
 ら出産。今は、夫と息子夫婦と
 孫3人の7人暮らしです。東京
 は生活するには、便利な場所で
 すが、やはり、山が見え、田ん
 ぼに囲まれ、季節の変化が感じ
 られた以前の暮らしが懐かしい
 です。浪江に帰ることはできな
 くても、福島県内に住むことが
 できればと思います。ただ、放
 射線量のことを考えると、幼い

子どもたちも一緒にというのは
 難しいと思っています。私と夫
 の二人でも、福島に転居でき
 ればと考えています。

■浪江のみんなへ

〈村形さん〉

思い出ばかりで生きていくの
 は、どうかと思います。でも、
 踏ん切りがつかえません。先の見
 えないうちで、ああしよう、こう
 しようとは言えません。一人ひ
 とり状況が違います。どこに住
 むかは、それぞれの判断です。
 でも、希望を捨てないで頑張っ
 ていけたらと思います。



渡辺 理恵さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：11月12日 「平成24年12月 広報なみえ掲載」

たくさんの人に支えられ、 4人の子どもたちから元気をもらって

南相馬市、福島市、群馬県片品村と、避難先を転々とした渡辺理恵さん。昨年8月からは、ご主人と4人の娘さんと、ご主人のご両親の8人家族で仙台市の借り上げ住宅で暮らしています。避難先では多くの人に支えられ、うれしい出会いもあったとか。度重なる引越し、転校を余儀なくされたお子さんも、それぞれたくましく成長。ふるさと・浪江での思い出を心の糧に、「毎日、頑張っています!」。

■引越しに次ぐ引越し

震災後は一旦、私の実家の南相馬市原町に避難し、原発事故の後、福島市の知り合い宅に身を寄せました。でも長く居てはご迷惑になるので、3月後半からうちの家族と義父母は群馬県片品村に、そして私の両親は埼玉県へと別々に避難したんです。先の見えない不安な毎日でしたが、片品村では地域ぐるみでボランティアの皆さんが何から何までお世話してくださって。子どもの学校の手配やご飯の世話、ランドセルや衣類まで揃えてくださったり。本当にありがたかったです。

宿泊先は、初めの1カ月くらいは7、8軒のペンションや民宿を転々しましたが、後の4カ月は1軒の民宿に落ち着きました。民宿の女将さんがたまたま私と同年代で話も合いましたし、とても面倒見のいい方で。そのご一家とは、私たちが仙台に引越してから泊まりに行ったり来ていただいたり、家族ぐるみで仲良くしているんです。仙台でも、子どもの学校のお母さんや近所の方からなにかと親切にしてくださいています。震災という大きな不幸がなければ

ばこの方たちと会うことはなかった、ご縁で不思議だなと思います。

浪江で親しくしていた友人は避難先がばらばらで、寂しくてたまらないこともあります。携帯で連絡を取り合っています。

■思いを胸に、明日へ

避難生活で一番辛いのは、なれない土地で何もすることがないこと。片品村でも初めはご厄介になるばかりで心苦しかったです。夏場、民宿のお手伝いをするので気持ちが楽になりました。その点、仙台は専門学校時代に毎日通った馴染みのある街ですし、子育てに追われていると月日が経つのがあつという間ですね。長女のまどかは中1、次女の悠夏は小5、3女の萌々華は小2、末娘の凜花は2歳になりました。

上の3人は震災後、片品、仙台と小学校を2回転校しました。「浪江に帰りたい」と涙ぐむこともありました。子どもたちは順応性が高いのが救いです。今、上のお姉ちゃん2人は部活に夢中。悠夏はピアノも習い始めました。萌々華は学校から帰るなりお友だちと遊びに行っちゃう元気な子ですが、最近学習



▲「懐かしい浪江の皆さん、またお会いしたいです。」と渡辺さん。次女・悠夏ちゃん、末娘・凜花ちゃんと一緒に。

塾に行きたいと言っています。こういう状況なので、本人がやりたいことはやらせてあげたいねと主人と話しています。浪江で生まれ育った娘たちは、私たちにとって故郷の記憶そのもの。みんなで楽しんだ十日市のお祭りやお花見など、思い出は何ものにも代えられない宝物です。娘たちとともにこれから頑張る生きていきたい。そして浪江の家にあるアルパムは、一時帰宅できるとき、なんとしても持ち帰りたいと思っています。



千葉県

泉田 尚男さん・恭子さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：11月15日 「平成24年12月 広報なみえ掲載」

孫たちの将来に期待し、 自分たちの暮らしを楽しみたい

泉田さんご夫婦は、震災後、千葉市に避難。来年春には、国分寺市での再スタートを決めました。



■尚男さんのお話

3月11日、地震が起きたとき、私は海までサイクリングをしていました。妻は、近所の人から「海の近くで見かけた」と教えられ、とても心配したと言います。急いで自宅に帰り、家族と一緒に近くの警察署の上階に避難しました。その後、息子夫婦と孫たちの6人で、千葉市にいる親戚を頼って、ほとんど着の身着のままで避難しました。いったん、親戚の家に世話になり、嫁と孫たちは徳島の嫁の実家に、

私たちが夫婦と息子は3月24日に、このマンションに入居しました。

私は、中学から大学まで東京で暮らし、就職してからは転勤の連続で、数十回もの転居を繰り返してきました。福島県職を定年退職して10年。近くの海や山へのサイクリングを楽しむなど、悠々自適な生活でした。ここに来て半年ほどは、気持ちが悪くなり、落ち込んで何もする気になりませんでした。食べるものもおいしくなく、痩せるほどでした。でも、妻のがんばりや孫の成長を見る中で、ふさぎ込んでばかりいてはいけないと思うようになりました。

住んでいるマンションの近くには、公園や「花の美術館」などの施設がありサイクリングを楽しむ日々です。周辺は緑や花が多く、整備された街並みですが、自然の豊かさが感じられません。そこで、ときどき妻と一緒に旅行に出かけ、山歩きも楽しんでいます。

■恭子さんのお話

私は、浪江町で薬局を営んでいました。薬局のお客さまは、ほとんどが顔見知りで、会話を楽しみながら商いをしていました。息子夫婦も跡を継いでくれ、仕事も家庭生活も安定していました。震災後、4回、一時帰宅

をしました。最後に、つらくて家の中に入るのができませんでした。

千葉での暮らしは便利ですが、浪江との違いを感じる場面も多々あります。以前の暮らしでは、家に鍵をかけることなど、ほとんどありませんでした。ここに来てからも、夏には、玄関のドアを開けて風を入れていたのが、親戚や宅急便の配達の人に、物騒だからと助言を受け、最近では、家にいるときでも、鍵をかけるようになりました。水や食べ物も味も違い、スーパーマーケットに並ぶ魚には、手が出ませんでした。先日、震災後、初めてお刺身を買って食べました。無いものねだりをしていても仕方ありません。諦めることもしなくてはと思います。

今、息子夫婦は、国分寺に住み、薬局開局の準備をしています。小学校1年生と3年生の孫たちの成長も楽しみです。私たちも、来年春には国分寺市に引っ越し、薬局経営を手伝う予定です。震災で失くしたものは、たくさんあります。でも、いつまでも後ろを向いてばかりでは生きていけません。孫たちの将来に期待し、自分たちの暮らしを楽しみたいと思うのです。



原田 鶴次さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 齋藤・柴田
取材日：11月9日 「平成24年12月 広報なみえ掲載」

浪江の皆さん、元気で暮らしています

原田さんご夫妻は、山形県高島町の借り上げアパートで生活しています。鶴次さんは腎臓の病気を持っているため、現在も1日おきに透析を受けています。避難翌日から、透析を受けられる病院を探し福島県内を転々とし、避難から4日目、高島町の病院で無事透析を受けることができたそうです。



▲左：鶴次さん 右：節子さん
近くに住む3人のお孫さんとお会うのが何より楽しみ！

地震の後はず、中学校に避難しました。余震が怖くて家にはいられなかった。朝起きたら原発が爆発するからと言われ、すぐに町から避難しました。まずは、透析を受けられる病院を探しに行くことが先決と考え、町の皆さんが避難した津島ではなく、原町の病院に向かいました。ですが、患者さんがいっぱい受け入れてもらえず、福島市や川俣町の病院など何件か回ったのですが、どこでもほとんど利用していた患者さんで手い

ばいのように受け入れてもらえませんでした。ガソリンがなかったので車の暖房もつけないで、妻と病院を探しました。探している途中で山形県高島町に嫁いだ娘と連絡がとれ、病院を探してくれ、うまく空きがあったこちらの病院で受け入れてもらい、避難から4日目に透析を受けることができました。透析を受けられなかった場合心臓に負担がかかり命も危なくなるので、ここでもだめだったらと死を覚悟しました。本当に大変でした。今は、一日おきに歩いて病院に通っており、だいぶ落ち着きました。

こちらに避難している浪江町の方が何世帯かいると聞きました。避難者交流会でお会いした方もいて、浪江の人と話をするだけでも違うと思いました。避難が長期的になるようなら、町の皆さんとつながりがなくならないよう、連絡手段があればと思っています。透析の仲間も100名ほどいたので、皆さん大丈夫だったか心配です。震災時、福島県内では透析が受けられず、関東方面に行った仲間が多いと聞いていますが、緊急時、時間に猶予がない病人が安心できる仕組みや対策があればと感じました。

娘はぶどう、ラフランス、米をつくる農家に嫁いたので仕事も忙しいようですがしょっちゅう来てくれ、感謝しています。孫が小学校の帰りに遊びに寄ることも楽しみの一つ。浪江にいたころは、毎年夏に遊びに来て、海へ遊びに連れて行っていたことを思い出します。今思うと、浪江は海あり、山あり、川ありで、食べ物もおいしく、住んで最高の場所でした。こちらでは高島町の福祉課の職員の方が月に3回ほど訪ねてください、避難者の交流会の案内や町の情報を届けてくれます。町内の方も、畑で作った野菜をくださったり、雪はきを手伝ってくれたり、山形の皆さんは親切で温かく不便なく生活しています。

浪江の皆さん、私たちは元気に暮らしています。なかなか会うこと、連絡をとることができないのですが、体を大切にしてお互いに頑張って暮らしましょう。



館内 進さん・那奈さん(西台)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：11月11日 「平成24年12月 広報なみえ掲載」

消防団の皆さん、行きつけのお店「ブラカイ」で また楽しく飲める日を楽しみにしています



▲左：那奈さん、右：進さん
長男・夢斗くんはサンタの服をきてパチリ！

2010年7月に結婚し、西台地区で暮らしていた館内さんご夫妻。浪江町ではお米屋「館内商店」を営んでいました。今年7月に長男・夢斗くん（4カ月）が生まれ、山形市内の借り上げ住宅に家族3人で暮らしています。

浪江町で米屋を営んでいましたので、3月11日地震が起きたときは、倉庫で米の配達の準備をしていました。ただごとじゃない大きな長い揺れに驚き、店に戻りました。店の中は、階段が外れて、お店の入口もガラスがすべて割れ、壁にびひも入っているとてもひどい状態でした。妻は、海が近いドラッグストアに勤務していて、回ってきてくれた警察の方に「津波が来るので、避難しないと飲み込まれる」と言われ、従業員の方と山の方

へ避難し無事でした。私の所でも「津波だから逃げろ」と言われ、すぐ私の両親と祖母と私の4人で、車で逃げました。1日は、自宅で過ごしましたが、余震がひどく寝たかどうか覚えていないくらいです。その後、何か所か避難所を転々とし、両親から「先に逃げなさい」と言われ、妻の実家がある山形県に2人で避難しました。ガソリンがなかったのですがなんとか仙台まで避難し、その後山形の父が迎えに来てくれ避難することができました。3カ月ほど実家で生活させてもらい、借り上げ住宅が見つかり今は山形市に暮らしています。

仕事でお世話になっていた方やお客さんですが、仲がいい人ほど、お互いつらい状況ということがわかるので、すぐに連絡は取れませんでした。相手も大変な状況、大丈夫ではないことがわかってるので、今も連絡をできない方も多いです。こちらでは車で職場に通っていますが、山形の雪の多さに驚かっています。浪江町は積もらなかったのですが、冬タイヤもはいたことがありませんでした。運転は怖いですね。休みの日は、宮城県に避難している両親に長男を見せに行き、家族の時間を大切にゆっくり過ごしています。自営業だったこと、また地元の消防団に入っていたこともあり、いろんな団体の仲間から浪江町の情報を教えていただいたり、自分の父から手続きなどの情報を教えてもらったりし、これまでのつながりにも感謝しています。

浪江では、海が近かったので何かあると「海」でした。夏は海でバーベキューをしたり、マラソン大会も海まで走ったり、きれいな海を思い出します。今は難しいかもしれませんが、いつか放射能など何も影響がなくなったとしたら、自分の生まれ育った思い出の場所・浪江町を子どもに見せたいと思います。消防団のみんなと震災以来会えなくなり残念に思っています。またみんなで飲める日を楽しみにしています！



伊藤 暢秀さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：11月15日 「平成24年12月 広報なみえ掲載」

浪江の人に会うたびに「健康との戦いですよ」と励ましています

福島市内の借上げ住宅で奥さまと二人暮らしをされています。この住まいを見つけるために、2次避難先の裏磐梯から福島市に通い、およそ20件は見て歩いたそうです。この集合住宅には幼なじみも一緒に入居し、その方々と力を合わせて「福島市春日町借上げ住宅浪江会」を立ち上げ、会長として抱え切れないほどのさまざまな問題や課題と日々奮闘されています。



▲「一人暮らしの方の通院や交流会へ出かける“足”の確保がうまくできないものかと常々思っています。」とおっしゃる伊藤さん

■地震当日のことはあまり思い出したくないですね

その日は車検が済んだ車を引き取るため、南相馬市に來ていました。午後2時40分ころに強い揺れを感じ、午後2時46分のときにはさすがに立っていらなほどでした。結局代車で歸路を急ぎましたが国道6号はずでに渋滞が始まっており、ラジオからは小名浜に津波が到来予想のニュースが聞こえ、浜街道ならと向かいましたが小高で橋が倒壊し渡れなくなってしまう。その後、後続の車に戻るようになりながら国道6号に引き返し、会社まで帰りまし

社員との連絡後、帰宅しまし

たが家には入れず、近所の4家族と妻が日ごろお世話をしてたお年寄りとともに、毛布を抱えて町のホテルに避難しました。サイレンが鳴り響き、パトカーや消防車が行き交っていました。が、原発のことなどまったく知りませんでした。

私どもは食料品卸の会社でしたので、社長の発案でサラダやプリンなどを請戸の方の避難所に差し入れしようと、役場に掛け合って軽トラ3台で取りに來てもらいました。

■浪江が天国なら、避難生活は地獄でした

翌朝、会社の片付けをしていたところ、近所から原発のことを初めて聞かされ、私たち夫婦はお世話をしていたお年寄りを連れて10km圏外の小高の親戚を頼りました。夜には避難命令が20km圏となり、原町の石神第一小学校で3日間を過ごしました。同行のお年寄りは家族に引き取りを頼み、私たちは岩沼の息子との所で2カ月近く世話になりましたが、その間、町や県の情報はまったくなく、二本松市の仮役場まで何度も足を運びました。

少しでも町の人たちがいる所へと思い、岳温泉へ行きました。が妻が体調を崩し、次の裏磐梯・北塩原村「赤べこ」でようやく気力と健康を取り戻しました。周辺には同級生も何人かおり、声を掛け合って過ごしていました。

■家族や地域がバラバラに。この絆は取り戻せるのでしょうか

現在、自治会長を務めていますが、浪江への帰還を巡って多くの家族の意見が対立し、バラバラになっています。東電の補償も不透明です。町の復興計画はできましたが、どの地区でどのようにインフラ等が進むのか、もっと具体的に伝えて欲しいと思っています。先が見えるように、何も見えないのです。

浪江町民にとっては、これらが本番でしょう。自治会同士の連絡会「福島市なみえ会」は、福島市や伊達郡など約300世帯を支援しています。みんなで支え合い、助け合いながら、暮らしの立て直しをともに考えていけますね。必ず絆は取り戻します。



福島県

鴨川美江子さん(川添)

取材者：元気玉プロジェクト 棚木

取材日：11月16日 「平成24年12月 広報なみえ掲載」

新たな仲間とともに趣味を楽しむ



▲今年10月に催された秀明会作品展の出品作とともに。

現在は、会津若松市のアパートでご主人や息子さんと3人で暮らしている鴨川さん。今の暮らしを大切に、新しい友人との交流や趣味を楽しみながら、笑顔で過ごしていきたいと考えていらっやいます。

浪江町では保険のセールススタッフとして働き、忙しいながらも充実した毎日を過ごしていました。震災のあった日も、いつものように浪江中学校近くの道路を車で移動していました。突然襲った大きな揺れに、なんとか車を路肩に停めるのが精一杯で、ハンドルを握りながらそのまま横転してしまうのではと思ったほどです。激しい揺れに家の瓦屋根が一気に滑り落ちていく様子や、波打つように歪んだ道路を子どもたちが一目散に

走っていく姿が、今でもはつきりと思ひ起されます。

地割れで段差ができた道路を車で越えてようやく戻った自宅は、家中に倒れた家具や荷物が散乱し手のつけられない状態でした。余震で家が倒壊する心配もあったため車の中で一晩を過ごしました。

翌日、テレビで原発事故のニュースを知った主人に促され、葛尾村の親戚宅に犬2匹をつれて避難。その後も伊達市、二本松市、裏磐梯と転々と避難移動は続き、昨年8月中旬に会津若松市で家族3人の新たな暮らしがスタートしました。

幸いなことに、浪江町で勤めていた会社の営業所から、会津若松市の営業所に移籍することができ、仕事を継続することができました。親しくしていたいた多くの顧客の皆さんと、またお会いして話ができるのは本当に嬉しいことです。住む場所は遠くなっても、心のきずなはしっかりとつながっているのだなと深く感じています。

避難したことで周囲に知り合いが誰もいない状況になりました。

だが、地元の写真店を訪れたことがきっかけになり、写真愛好家の集う『秀明会』に入会しました。写真撮影の経験はありませんでしたが、会員の皆さんが温かく迎えてくれ、一緒に撮影旅行に出かけたりと、新しい友人との交流の輪をひろげています。10月に開催された展示発表会には初めて出品し、さまざまな方から声をかけていただきました。撮影の楽しさに目覚めた私の大きな目標は「人の心に感動が生まれる一枚を撮ること」です。浪江町での思い出は心のアルバムに大切に残しながら、これからの人生に悔いを残さないよう、楽しく充実した毎日にしていこうと思っています。



佐藤 光衛さん(苧宿)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：12月3日 「平成25年1月 広報なみえ掲載」

千年に一度の体験だからこそ、 心温まる話は後世まで伝えておきたい



▲左から、佐藤トキ子さん、光衛さん、そして長岡眞さん
長岡さんは現在の区長さんです。取材の折り、佐藤さん宅でお会いしました。
苧宿の新旧の区長さんが福島で変わらぬ交流を図っておられる様子に、地域の強い縁を感じました。

佐藤さんは震災前、苧宿で区長をされていました。以前苧宿は農家がほとんどでしたが、新興住宅ができて新しい方々が住みはじめ、半々くらいになったそうです。その新しい住民に地域になじんでもらえるようお祭りやイベントを通じて交流を深め、地区の活動に加わるように地区の人たちと心を砕きながら、山や川に寄り添うように暮らしてきました。苧宿の農家の仕事や景観を守るために、農水省の補助金事業にも携わってられました。

現在は、福島市で妻のトキ子さんとともに、3人の幼いお孫さんの面倒をみながら、娘さん夫婦と一緒に暮らしていらっしゃいます。

あの日は、不気味な光景や音を聞きました。地震発生のときは、13日に地区の総会会場となる公民館や地区内で灯油の配達をしていました。道路脇の水路が左右に大きく揺れて水がこぼれ、電柱がしなり、あちこちの家の瓦が落ちるのを見ました。急いで自宅に戻ると、妻が近所のお友だちと庭石につかまっていた。家は傾いだように揺れ、瓦もガラガラと落ちる中空を見上げると、見る間に真っ暗になって雨が降り出し、雷のような地響きが3回ありました。

津波のことは思いもしなかったので会社に戻ることにしましたが、室原川に架かる橋は地震によって大きな段差ができ、サンプラザの橋を通ってようやくまちなかに入りましたが、とても酷い光景でした。

再び帰宅し、総会の延期を班長さん方に知らせつつ、自主防災の会や消防の発電機を苧野小学校に運んで暖を取りました。日付が変わるころ、請戸の人たちが着の身着のまままで校庭に車で避難して来ましたが、津波の被害を話すのですが、誰も直ぐには信じられませんでした。

翌日、ヨークベニマルからカツブヌードルやカセットコンロの差し入れがあり、私は家から玄米を運び、小高の精米所の行列に並びました。順番が来て精米をしているときに、水蒸気爆発の音を聞きました。米を公民館に届ける前に避難指示が出て、津島へ向かいましたが、すでに津島の避難所は満杯だったため、川俣町南小学校を経て川俣高校に行きました。10人近い人たちがおり、持ってきた毛布だけで一晩を過ごしました。その後、福島市第三中学校に1週間、妻の姉が住む茨城の竜ヶ崎に約40

日世話になりましたが、その後娘の家で暮らしています。

■つらい避難のさなかに、ありがたい心配りがありました

群馬県桐生市に花ぶさ弁当という会社があり、社長さんは苧宿出身です。苧宿は農家が多く、私もその会社に米を納めていました。あのつらい避難のさなか、東和に点在していたほとんどの避難所に弁当を届けてくださいました。カレーライスの炊き出しもされたと聞いています。社長さんにお会いできなかったのですが、なかなかできることではありません。あのころ、ほとんどの人たちがガソリンや食べ物がなく、寒さに震えていました。また東和針道の服部新聞店さんは避難所の人たちにお風呂の提供をしてくださったとのこと。本当にありがたいことです。決して忘れず、多くの浪江の人たちに伝えたいと思っていました。避難が続きますが、気持ちの持ちようだと思います。昔の良さを忘れずに、みんな力を合わせて私たちの苧宿を取り戻したいと願っています。



富川 牧江さん(川添)

取材者：きょうとNPOセンター 田口

取材日：11月30日 「平成25年1月 広報なみえ掲載」

浪江町中央公民館の高齢者学級の皆さんに届きたいメッセージ

富川さんは、昨年3月11日以降連絡をとることが難しくなった高齢者学級の皆さんと再会できる日が来ることを願い、京都での生活を続けて来られています。

1人で避難して来た京都での生活も、その後、大阪に住んでいた娘と同居をし、1年8カ月が過ぎました。主人は松江市に単身赴任中で、大学4年生の息子は来春から奈良県の高校教師として働くことになり、時間の流れを感じています。

浪江町を離れてからはより一層、家族や親戚、友人・知人と連絡をとり合い、交わし合う言葉が心の支えとなっています。日常の他愛もないコミュニケーションや情報交換を通じた「つながり」のありがたさを感じる日々です。震災以降これまでのように気軽に会えない友人同士の近況を伝え合う通信をつくって、絆をより深めています。

震災前は、浪江町の臨時職員として、公民館の高齢者学級に関わるお仕事をしていました。あの日：3月11日も、午前中に各学級の代表者会議があり、1年間の取組みを振り返りながら、次年度に向けた学習内容に関する打ち合わせを終えたところでした。

今、毎日のように思い出すのは、5つの学級(浪江松寿学級、

幾世橋長寿学級、請戸くろしお学級、大堀寿学級、荻野しゃくなげ学級)でお世話になった皆さんのお顔です。この通信の場を借りて、高齢者学級の皆さんにメッセージを伝えさせていただきます。

皆さん、いかがお過ごしですか？学級では未熟な私を助けていただき、いろいろな活動を通してたくさんの方のことを学ばせていただきました。たった1年間だけでしたが、私にとって大切な宝物です。どうか、必ず、お会いできる日までどうぞお元気でいらしてください。

私はここにいて自分にできることを...と思い、本に携わることが好きだったこともあり、最近、地域の図書館で図書ボランティアを始めました。

これから先のことはまだわかりませんが、いつかはきっと浪江町に帰れると信じて、私にできる小さな発信を積み重ね、つながり続けられる関係を大切に育てていきたいと思っています。



▲左から、長女の麻里奈さん、牧江さん



高野 康幸さん(請戸)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：12月5日 「平成25年1月 広報なみえ掲載」

『人との絆』の大切さが身にしみた震災

高野さんご家族は、地震後、町役場、津島、二本松市などの避難所を点々とした後、娘さんたちが小さいころから家族で毎年のように訪れていたさくらんぼ農家の方を頼り、長女・博美さん家族、次女・瑞希さん家族と一緒に山形県中山町に避難しました。昨年9月から町内の借り上げ住宅に家族3人で暮らしています。

地震が起きたのは、早朝の漁が終わり家でゆっくりしていたときでした。こんなに大きい揺れは初めてでいつ終わるのかと思うほど長く、2回目の揺れで隣の家屋が目の前で一気に倒れ、とても大きな地震だと感じました。すぐに支度し船の様子を見に行くと、いつもあるはずの船が港に一艘も見えず、岸壁に行くと、すべての船が港の海底についている状態でした。こんなに水が引いているのは異常だと思わずに家に引き返し、妻と母を乗せ家から逃げました。私たちが逃げた後、娘が心配し請戸に見に行きましたが、玄関で警察の方から津波が来るからすぐに逃げろといわれ、家に入らず逃げたそうです。助かって本当によかった。夕方になり、避難した役場から見た請戸はまるで湖のようになっていて見たときは本当にショックでした。孫たちは津波が押し寄せるところを小学校で見ていたため、心の傷が大きかったのではと心配です。

私の船『第1吉祥丸』は昨年海から1km離れた道路で見つかりました。私は遠洋漁業から請戸漁港に戻り、漁師をやるようになってから60年くらいですが、子・孫の代まで原発と関係なく安心して住めるようにと原発に反対し、危険性も理解してきました。私は7、8kmの海域で魚を獲る漁師だったのでなおさら再開するには相当時間がかかると思っています。これまで自信を持って安心して請戸のおいしい鮭やひらめなどの魚を獲り、多くの方に喜んで食べていただいていたのですが残念です。

山形に避難することを決めたのは、町を出てから4日目の朝でした。お世話になっていた山形県寒河江市のさくらんぼ農家の方から電話をいただいて、山形県に行くことを決心しました。その方は、私たちの安否が心配でさまざまなつながりを調べ連絡してくださいました。避難所を自分の家のように使わせてもらい、役場の方が朝夕様子を見に必ず寄ってくれたり、畑を貸してくださいったり、よくしてくださり勇気づけられました。会ったときに涙を流し喜んでくれた方もおり、今回の震災では、



▲ご家族そろって。
左から高野タキ子さん、サダ子さん、康幸さん

本当に絆の大切さが身にしみてわかりました。孫たちはこちらの小中学校で元気に通っているので、数年後落ち着いたら、親戚や友人、漁師の仲間が多い浜通りに戻り、顔を見に行ったりお茶のみしたりできることを楽しみに、今、山形での一日一日を大切に暮らしています。楽しくて自由だった請戸のような生活が、またみんななどできるような生活が、また体を壊さずに暮らしましょう。



千葉県

森川マツ子さん(加倉)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：12月3日 「平成25年1月 広報なみえ掲載」

浪江町、福島県のつながりを大事にしたい



ご主人とお義母さんの3人で暮らす森川さんの楽しみは、ベランダでの花や野菜の栽培です。

震災直後、原町（南相馬市）の長男の家に避難、数日間いた後、私の実家の飯館村に避難したのですが、私たちには子ども同然の犬がいるために、一度もふとんに手足を伸ばして、ゆっくり寝ることもできませんでした。その上、飯館村も線量が高いことがわかり、再避難をしなければならなくなりました。状況を見かねて、松戸市に住む次男が「来たらいよいよ。」と言ってくれました。私たち夫婦は次男の家に、義母は義妹の家に世話になることにしました。

今の家には、今年の5月に越してきました。私は、腰痛で震

災の前後に2度の手術を受け、リハビリのための通院が必要でした。駅から歩いて5分、商店街の中にあるマンションで、通院にも買い物にも便利ですが、やっぱり浪江での暮らしが恋しいですね。浪江にいたころは、私も夫も会社勤めをしていました。仕事の傍ら、夫は狩猟やキノコ採りを楽しみ、私は、野菜や花づくりを楽しむ日々でした。今も、マンションのベランダで、鉢植えの花を育てています。花芽がつくとうれいすね。浪江に住んでいたころは、友だちにあげ、喜ばれていました。こちらに越してきてから気軽にあげる友だちもいないので、少し寂しい思いもしています。

浪江にいたときには、自分の身の周りのことは一人でできた義母ですが、数カ月間の避難生活の中で、体調を崩し、ほとんど寝たきりの状態になってしまいました。アルツハイマーの診断を受け今年8月に入院し11月に退院、今は私たちと一緒に暮らししています。入院している間に病状は改善、週に3日デイサービスに通っています。編み物が好きで、デイサービスに行くときにも、毛糸と編み棒を持って

行きます。夫は、60歳を過ぎた今も、震災前の仕事の経験を活かして近くの病院で働いていますが、仕事から帰ると、義母の話し相手をしてくれ、ほんとうに助かっています。

震災後に6回、浪江に一時帰宅しました。6回目の帰宅のときには、自宅の周辺は草ぼうぼう、木々が道路をふさいでいました。帰りたい思いは強いですが、荒れ果てた家を見ると、帰れる日が来るのだろうかと思ふようになります。そんなときには、浪江の友だちと励まし合います。いわき市に避難している友だちは、泊りがけで遊びに来たりもしてくれます。本音で話ができるのは、やっぱり浪江の友だちです。

11月下旬には、被災者支援を行っている松戸市の団体主催の「松戸の史跡めぐり」に参加しました。義母がいるので、遠出はできませんが、被災者を対象にした催し物には、できるだけ出かけるようにしています。米やお酒や果物など、福島県産の物を取り寄せることもしています。浪江町、福島県のとつながりをこれからも大事にしていきたいと思っています。



埼玉県

神内侘子さん(川添)・岡田博子さん(幾世橋)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内

取材日：12月6日 「平成25年1月 広報なみえ掲載」

「ここまで頑張ってきたんだから」

神内さんは、現在ひとり住まい。息子さんが南相馬と埼玉を行き来しています。

岡田さんは、娘の有加さん、孫の珠奈さんと3人暮らしです。



▲左から神内さんと岡田さん

■神内さん

震災の日は、父の命日で午前中はお墓参りに行きました。午後、お嫁さんは孫の元太と優花を連れ3人で海の方にドライブに行っていました。後でわかったことですが、ドライブの途中、元太がサンプラザのボールプールに行きたいと言い出し、そこで遊んでいたために津波に遭わずに済みました。私は、家の中にいました。地震に驚き外に飛び出して農業用ため池のガードレールに掴まっていました。

■岡田さん

私と娘の有加と孫の珠奈は友人家族と一緒に苧野、川俣を経て、友人の親戚が住んでいる新潟に避難しました。そして翌日、埼玉にいる次女のアパートに移り、その後、孫の学校の近くである現在の住まいに引っ越してきました。今、気がかりなのは、珠奈のことです。環境の変化や親のストレスも影響があるのでしよう、ときどきふとつぶやく言葉に子どもながら、いろいろと考えているのかと感じることがあります。

浪江が封鎖される2日前に猫

そのうち地面が割れてきたのを見て家の隣の空き地に逃げ、座り込んだまましばらく動けませんでした。親子3人が戻って来た姿を見たときは本当に嬉しかったです。もし海の方にそのままドライブしていたらと思うと震えが止まりませんでした。

「だるまスタンプ」を貯めてみんなで行った旅行が良い思い出です。まだ、台紙に貼ったものが残っていますが、捨てずに記念に取ってあります。

■神内さん・岡田さんから

皆さん、ここまで頑張ったんだから、自分のからだに気をつけましょう。どんなイベントや集まりにも行ってみるといいですよ。私たちも埼玉の「さいがい・つながりカフェ」で出会い、今ではとても仲良しです。毎月2回ですが、みんなに会うのが楽しみです。先のことを考えるとつらいですが、なんでもやってみようと思っています。

住んでいる場所は違いますが、浪江の人たちの繋がりが支えます。皆さん今後ともよろしくお願ひします。



宮城県

横山 眞志さん(立野)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：12月10日 「平成25年1月 広報なみえ掲載」

被災者なりの意思を持って、 子どもたちの未来のためにできることを



▲借り上げ住宅の庭には、偶然、浪江産の石があったそうです。「これも心の支えになっています」と、横山眞志さん。

仙台市の借り上げ住宅で奥さま、お母さまと3人暮らし。息子さん一家も近くに移転し、ご自身も仙台市若林区役所で職を得ました。故郷を奪われた悔しさや怒りを乗り越え、「今は前を向いて歩きだしています」。

■忘れられない浪江の思い出

私はJAを退職するまでの3年間、食農教育を担当していました。管内の小学生のお子さんに稲作や大豆栽培を体験してもらって、自分たちが育てたお米でおにぎりを作って食べたり、大豆で豆腐や味噌を作ったり。命あるものが口に入るまでのプロセスを実感していただくことで、農業や環境、地域とのつながりを意識してもらうことがそもそも趣旨でした。満面の笑顔でおにぎりを頬張っていた子どもたちの今を思うと残念でなりません。

■原発事故後、仙台へ

私たち一家は震災後、着のまま南相馬市の家内の実家

に避難しました。が、そこも原発から20km圏内で避難命令が出されたので、家内と母と私の3人は飯館村を経由し、次女の嫁ぎ先の仙台に。息子夫婦と孫の4人は静岡県にある嫁の実家にいったん身を寄せました。国から何の情報も知らされず、放射能の危険にさらされて右往左往し、まさに棄民だと思いました。

とはいえ、仙台市に移ってからは嬉しいことも多々ありました。まず、浪江町を知っているという借り上げ住宅の大家さんから大変親切にいただいたこと。県の委託を受けた職業訓練校でIT基礎クラスを受講でき、すばらしい仲間と出会えたこと。またそこでMOS資格を取ることで、臨時に雇ってくれた若林区役所からは再雇用のお誘いをいただいております。ありがたいことです。

■未来のためにできることを

家を訪ねてきた菩提寺の和尚さんから、「あなたの先祖は加賀の国、今の石川県から修行の名をかりてお坊さんに連れられ、飢饉で疲弊した福島にたどり着いた。祖先が苦勞して浪江に築いた家を、今度は新たな地に築く運命だったと考えよう」と言

い聞かされました。

浪江に戻りたいですかと聞かれたら、戻りたくないわけがありません。しかし一時帰宅した折に放射線量を測ると、場所によつては現在も空間線量が20マイクローシールベルト以上あり、しかも家を取り巻く山林は国の除染計画の範囲外です。山から引いている水など内部被ばくの危険を考えると、将来的にも帰還は無理と考えざるを得ません。ところが行政の区分では、うち周辺は、将来的に帰還可能な地域とみなされています。

国や県に見捨てられた今、浪江町だけが私たちを守ってくれ最後の砦と信じています。

またわれわれは被害者であると同時に、加害者として原発の存在を許してきた責任も負っています。個人でできることは本当に少ないけれど、原発反対のデモに参加したり署名をしたり、子どもや孫たちの未来のためにできるだけのことはしたい。仮設住まいでは内向きになりがちですが、自分から外に一步踏み出し、被災者なりの意思を示すことも大切ではと思っています。



立川 正恵さん(室原)

取材者：NPO法人 とちぎボランティアネットワーク 徳山

取材日：12月1日 「平成25年1月 広報なみえ掲載」

生かされているということを実感しています

浪江町の室原から現在栃木県那須町で避難生活をしている立川正恵さん。震災発生から比較的早い時期に栃木県那須町に避難したそうです。現在小さな街ではありますが、住宅地の一戸建ての住宅で息子さんと生活しています。明るく謙虚で前向きな感じの女性です。

地震が発生したときは介護の仕事をしていて、榎葉町にある利用者宅訪問のため車の運転をしていました。緊急地震速報で車を停車し地震の揺れが収まった後、訪問した家に戻り避難を促したり、安否を確認したりしました。その後、榎葉町地域包括センターに行き、避難者の受け入れや名簿作りとボランティア活動をして、その日は家族と合流できませんでした。

翌日は原発事故による避難となり、家族や親友の家族と合流しました。さらに避難指示が出て福島市の福島西高校の体育館に避難しました。それでも目に見えない放射能への心配が拭えず、3月19日に栃木県那須町の避難所へ避難しました。

私の親は農業をしていたので、避難先でも農作業ができる環境が必要だと思い、畑付きの一戸建ての家を5月から借りることにしました。

避難先では地元の人たちに暖かく迎えられる、私自身介護のケアマネジャーの資格を持つだったので、早い時期に仕事に就くことができました。地域の自治会に入り地域の行事にも参加して、今の生活が特殊ではなく普通の生活として過ごすようにしています。

残念なのは、80歳の母が急激な生活環境の変化に元気をなくし、浪江に帰りたいたいという願いも叶わず昨年11月に亡くなりました。

私自身恵まれた生活を送っていると思つていますが、夕暮れ時になるとふと浪江町の方角を振り向いてしまうときがあります。「何をしているのだろう、私」



▲少し頼もしくなった息子さんと以前勤めていた職場のカレンダーと。

と思うと、浪江のことが恋しかったり、荒れ果てた家とかいろいろ複雑な思いがよぎってしまうんですね。

この生活がいつまで続くのか今の時点ではわかりませんが、今は震災発生から今までにいたいたくさんの恩を少しでも返していければという思いと、中学3年生になった息子の成長を楽しみに生きていきたいと思つています。



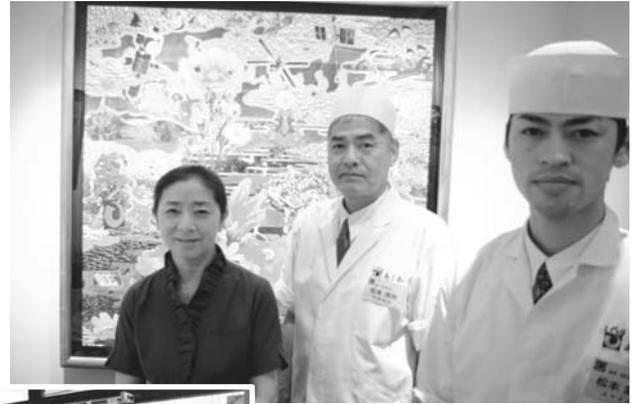
松本 清治さん・茂子さん(小野田)

取材者：茨城NPOセンター・ commons 小原

取材日：12月3日 「平成25年1月 広報なみえ掲載」

「鮮度に自信、味にまごころ」 寿し松開業

浪江町で町民に愛されるお寿司屋さん「寿し松」を経営されていた松本さんご夫妻。11月、息子さんとともに茨城県つくば市で新店舗「二代目 寿し松」を開業されました。



▲松本さんご夫妻と、息子で二代目の武士さん。07年リニューアルオープンの際に画家の鴻崎さんにいただいた「寿し松」の絵を背に。



◀二代目 寿し松

息子が生まれた1984年から浪江で「寿し松」をやっていました。97年には富岡店がオープン。2007年には浪江店のリニューアルオープン。いつも常連さんに来ていただいていた。あの日は、近くのいくつかの中学校が卒業式だったため出前の注文が殺到していました。それが一段落して仮眠を取ろうと

していたところに、揺れはじめて。立つていられないような状況で、足の踏み場もなくなっていましたよ。次の日に防災無線が入り津島に避難しようとしたが、避難所がいっぱいで、入ったら出られないと思いきや、川俣に抜けました。偶然にもスタンドが空いていて大変渋滞していましたが、給油でき助かりました。

それから、福島市の体育館での避難を経て、埼玉で暮らし始めましたが、周囲に知り合いもない生活でした。それでも寿し松の再開への思いは消えずに新天地を探していたところ、人口も増えている新しい街なので受け入れてもらえるかも、というところでつくば市を選びました。

1年以上の埼玉での生活を終えて、つくばに越してきたのは今年5月。半年間の準備を経て11月に「二代目 寿し松」を開業したばかりです。

浪江店と比べると今の店舗は手狭だし、設備の面でまだまだ不便もあります。とりあえずはこつちで頑張っていきたいですね。

ただ、震災の前は家族みんな近いところに暮らしていたのにバラバラになってしまったことが悔しいです。以前は週末には何世代もの家族が集まって過ごしたものです。

帰れるなら帰りたいという思いは当然ありますし、その思いはみんな一緒だと思います。

遠く離れたつくばでの開店となりましたが、繋がりのあつた懐かしい方も来店してくださいませ。それに、新しい出会いがあるから嬉しいですよ。やり方によつてはこつちで店舗を増やすことも可能だと思えますよ。

「桜梅桃李」の精神でお客様の要望に答えていくしかないと思っています。

「桜梅桃李」つていうのは、つまり、「さくら・うめ・もも・すもも」。

花には変わりないんだけど、それぞれ違う。個性があつて、それぞれ良いところがある。マニュアル通りの接客ではなくて、お客様に誠実にやっつけていくことが結果的にお客様に来ていただけることに繋がると信じています。



紺野 義則さん(南津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：1月9日 「平成25年2月 広報なみえ掲載」

今でも心は晴れません

千葉での4カ月にわたる避難生活の後に、福島市の借上げ住宅に移られ、ご夫婦とお子さん2人で暮らしていらっしゃいます。

妹さんをはじめ、親戚の方々も近所にいらっしゃるそうで、見知らぬ地域での暮らしにとっては心強いのではと思いました。



▲つらい話題もありましたが、終始和やかにお話しくできました。(美記子さん、義則さん)

■千葉では毎日「親族会議」
地震当日は自宅の仏壇が引っくり返るほどの強い揺れでしたが、電気も水も止まりませんでした。夜になって、入院中の父の面倒を見ていた姉の様子に気がなり駆けつけてみると、家中は滅茶苦茶。帰宅したばかりの姉を連れ、自宅に戻りました。請戸や町なかの人たちが次々と避難して来られ、新しい集会所に70、80人になったでしょうか。区長である私は、役場や部落を回って差し入れの米や野菜、卵

などを運びました。請戸小学校の先生方が調理を一手に引き受けてくださり、煮炊きをしました。子どもたちを高台に避難させた後に逃げて来られ「本当に何にもないんですよ。」とっておられたことを、時折思い出します。
自力で移動できない部落の方々をマイクロバスに乗せた後、私たち家族は二本松へ向かいましたが避難先がわからず、千葉にいる弟を頼ることにしました。郡山でスクリーニング検査を受けた後、私たち家族4人と姉、親戚を含めた5世帯で移動しました。千葉の住宅供給公社に3部屋貸していただき、電化製品など家財道具一式を手配してくれた弟と搬入作業をしました。ここで4カ月ほど暮らしましたが、ボランティア活動をしている弟から、毎日の暮らしぶりをみんなが集まって報告し記録すると、引きこもりや孤立防止の手助けになるとアドバイスを受けました。しかし、福島県や浪江町など行政の情報が少な過ぎて、福島に戻ることになりました。

■父を見送れなかったことが口惜しい
当時入院中の父は病院ごと避難をしているだろうと任せていましたが、実はまったく行方がわかりませんでした。病院は福島県立医大に向かった後、会津若松市の竹田病院に避難したようです。父はそこで3月28日に亡くなり、4月4日に引き取りに行つたときには遺骨を渡され、本人確認は写真でした。こんなときでしたが、父を看取することも葬式も出せなかったことが悔やまれます。お世話になった人たちにもお礼もせず、本当に申し訳なく思っています。
■頑張らなくてもいいから、負けないで欲しい
なれない地域で暮らすのは容易なことではありません。津島地区には8つの部落があります。が家族や隣近所はバラバラです。昨年6月に集まりを催しましたが、町長さんのお話と皆さんによるおしゃべりだけの会にしました。地区の約8割、約80人近くは集まってくださいましたよ。
月1回の区長会の他に、もう一人の役員である菅野一利さんと定期的に地元の放射線量測定を行つています。今回の警戒区域の見直しによって部落内で区域が二分されたり、部落に通じる道が塞がれたりと解決が必要課題が山積みです。



濱本 啓一さん(川添)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 竹内

取材日：1月15日 「平成25年2月 広報なみえ掲載」

浪江町民の絆をつなげ広げたい



▲浪江町コスモス会の皆さん。
前列左が濱本啓一さん。後列右が奥さんの安子さん。

濱本啓一さんは現在奥さんとともに新潟県柏崎市の県営住宅で避難生活を送っています。この地で暮らす浪江町民の交流を目的とした「浪江町コスモス会」を立ち上げ、日々会員同士の親睦を深めています。

■**右も左も分からない震災発生時**
私は震災発生時、妻と川添の自宅にいました。消防からの避難指示に従い、妻とともに双葉町の避難所へ。その後避難区域の拡大のため、避難場所を何度も変えることになりました。当時は何も情報がなく、朝起きたら避難所に誰もいなくなっていたことや、家に帰ろうとしたら自衛隊に道をふさがれたことなどがありました。何がおこって

いるのか、まるで分らないというのは不安になりますね。だんだんと状況が見えてきたので、新潟県柏崎市で生活する息子のもとに避難することが決まりました。自動車の少ないガソリンを気に掛けながら、福島、郡山と移動を続け息子と合流。3月16日には柏崎に到着しました。

■**避難者のための「浪江町コスモス会」を設立**

柏崎市には私たち夫婦を含めて300余名の浪江町民が避難生活を送っています。中には長期化する避難生活に疲れ、気持ちの内向きになり家に閉じこもってしまう人も。私はこのままではいけないと感じ、浪江町民が集い絆を再確認する場が必要であると考えました。その目的のため、震災から約1年の節目である昨年3月5日に「浪江町コスモス会」を立ち上げました。ご存知の通りコスモスは浪江町の花。故郷への思いをつなげるためにこの花を会の名前に選びました。現在の会員は35名。柏崎市のNPO団体が運営する被災者サポートセンターを活動の場としてお借りして、主に月

2回の定例会を行っています。各々がワイワイとしゃべり、とても盛り上がる様子を見ると、人と人との絆の大切さを改めて感じます。その他、柏崎市谷根ダムの見学や上越市高田公園の花見など、新潟県各所への旅行を実施。本年度は福島県への旅行を実現させたいと考えています。

■**浪江町の思い出、そしてこれから**

請戸川に上がる花火と桜、新町通りでの十日市、四季折々の風景など、浪江町の思い出はさまざまですが、何よりも思い出されるのは友人と過ごした日々。行事や四季を楽しむのは、いつも友人や家族とだからです。思い出のある浪江町には帰りたい。はじめはそう考えていましたが、町の状況を考えると、実際は難しいことだと思えます。原発事故が収束しない限りは、帰町への道は見えません。行政には私たちが安心して暮らせる環境を整えてほしい。そして将来の子どもたちのため、浪江町は動いてほしいと思います。



亀田 和弘さん・玲子さん(樋渡)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内

取材日：1月13日 「平成25年2月 広報なみえ掲載」

我が家のいいところは、決断と行動力です

和弘さん夫婦、義父の藤村宣明さん、娘の春美さん、愛犬「ゆず」は、千葉県佐倉市で、新たな人とのつながりを大切に暮らしていらっしゃいます。



▲左から吉田真由美さん（春美さんの友人）、娘の春美さん、義父の藤村宣明さん、玲子さん、孫の和太郎くん、和弘さん、愛犬のゆずちゃん

【玲子さん】
大熊で料理教室を終え帰ろうとしたそのとき、大地震！
普段なら車で20分ほどの所が、道路の亀裂を避けながら2時間かかってようやく自宅にたどり着きました。その日は、父と愛犬のゆずと一緒に、経営していた川添上ノ原の店「なみえスーパ―」の事務所で一晩過ごしました。主人は地震当日、川崎に出張中でしたが、錯乱の中、公衆電話で安否を確認できました。翌12日早朝、避難命令を聞き、

主人の父と姉家族が集まり、着のみのまま総勢10名と犬1匹、猫1匹で避難しました。おおぜいの人が避難している津島を通過し、ガソリンがなくなるまで走行しました。千葉にいる息子がインターネットで「原発事故」や避難所情報を調べてくれ、メールで連絡を取り合いました。息子に西白河郡矢吹町体育館を教えられ、たどり着いたのは夜10時でした。地元の皆さんの炊き出しをいただき4日間お世話になった後、千葉県君津市の叔父の知人の別荘に移動しました。別荘で主人、息子、娘に会えたときには、とても感動しました。10人の別荘での共同生活。皆それぞれ不安を抱きながらも料理は手作りし、協力して10日間過ごしたときのことは今でも忘れられません。

その後、主人の父と姉家族は新潟に行き、私たちは知人の紹介で、現在の佐倉市の住宅を借りることにしました。東京の渋谷に住んでいた娘も、そこを引き払い一緒に暮らしています。私は、地域の公民館の「ソーイングクラブ」やパン教室を通じて多くの方たちと出会うことができました。料理教室も再開し、味噌作りや梅漬けなどを教えています。また、毎月数回、郡山、南相馬、会津、いわきを訪れ、料理イベントを通じて相双地区の方たちとお会いしています。

【和弘さん】
平成22年12月にスーパーを閉店し、間もなく母を亡くし、その後の震災と大変なことが重なりました。佐倉市に移り住み、一昨年9月から、千葉県の緊急雇用制度で採用され、造園の仕事を始めました。以前の仕事とは大違いですが、外の仕事は新鮮です。仕事、福島の間問とのゴルフ、親姉妹に会いに月数回福島を訪れるといった忙しい毎日ですが、身体に気をつけながら頑張っています。

【玲子さん】
東電や国の対処の遅さには怒りを覚えます。しかし、結果の見えない話ばかりしていても仕方ありません。健康で心豊かな生活を自分たちで作っていかねばと思います。震災で失ったものもたくさんありますが、多くの友人、知人に助けていただきました。息子や娘の海外の友人からも多くの支援物資が送られてきました。

これからもどんどん行動し、人との出会いと絆を大切に築いていきたいと思っています。



千葉県

青田 康子さん(幾世橋)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：1月9日 「平成25年2月 広報なみえ掲載」

不安も感謝の気持ちも、喜びも ごちゃまぜの日々でした

いくつかの避難所を経て、松戸の娘さんの近くで暮らす青田さん。日々の暮らしの中の思いをノートに綴っています。



私は、浪江町役場の近くで夫と二人で暮らしていました。震災2週間前に夫が他界しましたので、前日に二七日を終えたばかりでした。震災の日には、下水道の名義変更手続きで役場に行っていました。あわてて自宅に帰ったとき、私を心配して駆けつけてくれた夫の弟夫婦に、「津波が来るので早く車に乗るように」と言われて、取る物もとらず「いこいの村」へ避難しました。今、思えば、それが一時立ち入りまで帰ることができない、夫の遺骨を残したままの我が家となりました。

翌日、役場からの避難指示を受け、親戚一同が車3台で「やすらぎ荘」へ。そこらが移動の日々でした。「津島」「川俣南小学校」「パルセ飯坂」と。「尋常ではない車の渋滞」「飲まなければならぬ葉がないことへの不安」「なぜ避難するのかわからないままの避難」「寒さで眠れないつらさ」「雪の中での仮設トイレの寒さ」は80歳の身体には堪えませんでした。

そうした様子が新潟の親戚に伝わり、わざわざ避難所まで迎えに来てくれました。新潟で一息つき、お風呂屋さんに行ったら、「被ばく検査を受けてから来て欲しい」と言われました。規則ですから仕方ないことですが、風呂上がりにずっと着ていない思いで一杯になりました。親戚の配慮で、部屋を借り、家具の用意を進めていたとき、柏の私の姪から「私の家に来てください」との連絡があり、3月18日に、松戸に住んでいる娘夫婦が、その当時には運行を再開していた上越新幹線で、迎えに来てくれました。娘夫婦は共働

きのため昼間ずっと一人ではとの配慮で、姪の家に一カ月間世話になりました。その間、震災の疲れでしょうか。体調がすぐれず、医者通いをしました。一月後、松戸に住む娘夫婦の家の近くに、娘の夫がアパートを借りてくれました。年寄りの一人暮らしですが、娘が買い物や身の回りの世話をしてくれるので、体調もよくなり、不自由なく暮らしています。

浪江は、山、川、海があり、自然が豊かなところでした。人情味が厚く、近所、親戚とも穏やかに暮らしていました。震災からまもなく2年。不安も感謝の気持ちも喜びもごちゃまぜの日々でした。日が経つにつれて望郷の念が強くなっていきますが、今の暮らしを大事に前を向いて進んでいけたらと思います。



ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」 佐々木健一さん(北幾世橋)

取材者：浪江町役場 長沼

取材日：12月24日 「平成25年2月 広報なみえ掲載」

「ありがとう高島」みんなで集まれる場所がある

ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」が今年も山形県東置賜郡高島町で行われた高島町総合体育大会ソフトボール大会に出場しました。今年は昨年よりも多くのメンバーが集まり、仲間とプレーできることの幸せをかみしめながら大会に臨んだそうです。

メンバーである佐々木健一さんにお話を伺いました。

※「浪江大吉SSB」は、浪江町のチーム「SSB」と「パイ山社中」との合同チームです。



▲現在は仕事のため単身で福島市にいる佐々木さん。家族の皆さんと一緒に。

長女の花恋ちゃん(かんなちゃん)は、請戸の田植踊りの踊り子さん。伝統を受け継いでいくために日々がんばっています。後列左から 健一さん、美智子さん。前列左から 玲音くん、花恋ちゃん。

私は震災後、家族4人で津島中学校、那須塩原と避難し、4月はじめに東京都の現在の住宅に落ち着きました。長女の小学校入学を控え、落ち着く場所を探すのに必死でした。浪江町でSSBを結成したのが10年ぐらい前。当時のメンバーは同級生がほとんどでしたが、年月を重ね、若い人たちがメンバーに加わるようになり、震災前には町の大会でも上位に入れるようなチームに成長していました。昨年の大会には日程が合わずに参加できなかったのですが、声をかけてもらったときには「こいつら、やるな!」と思いましたがね。絆の深さを感じました。今年の大会には、参加すること

ができ、ひそかに自主練習を積んでいたメンバーには驚かされました。高島町の皆さんは私たちを歓迎してくれて、浪江町をたくさん応援してくれました。試合前に円陣を組み「高島、ありがとう!」とみんなで感謝の思いを伝えました。きつとみんなに伝わったんじゃないかな。若いメンバーが本当によくついてきてくれます。これから高島町のおかげで、こうやってみんなで集まれる場所がある。みんなが元気であることを確認し合える。だから、来年以降もつながっていくんじゃないかな。これからどうなるかわからないけど、地元のためにできることを探して、頑張っていくしかないと思っています。

■高島町ソフトボール協会 高橋 英助会長



浪江チームの皆さん、2年連続で大会に参加していただき、ありがとうございます。

昨年お話を聞いたとき、「高島町で浪江町民の方々が集まれて、避難生活乗り越えられる元気を取り戻してもらえれば」と思い、町外チームの参加を特別に認めました。今回も大いに盛り上げてもら



■やきとり大吉高島店 伊藤 健彦店長



まほろばの里・高島で、今年も「浪江大吉SSBチーム」の皆さんと一緒にソフトボール大会を行うことができました。

「ノリノリGOGO!」の松崎代表、「常に冷静な」小松山主将、そして個性的なメンバーがそろった素晴らしいチームですね。来年もパワーアップした皆さんを、今から心待ちにしております。

い、これからもずっと高島町と浪江町の交流が続いてくれることを願っています。「ガンバレ浪江!」



福島県

綱引きチーム マリンエンジェルス・スーパーフレンズの皆さん

取材者：浪江町役場 長沼

取材日：1月6日 「平成25年2月 広報なみえ掲載」

強いつながり、まずは1勝！

—浪江町の皆さんへ—
私たちががんばっています。
何か自分の趣味をみつけて、
一歩でも外に出てみませんか。
綱引きに興味のある方、お
待ちしています。

浪江町で活動していた綱引きチーム「マリンエンジェルス」と「スーパーフレンズ」。

震災後、メンバーはばらばらになりましたが、平成23年10月に練習を再開しました。今は南相馬市の体育館で練習を続けています。

メンバーの強いつながりを感じながら、まずは全国大会1勝を目指し、力を合わせてがんばっています。



▲マリンエンジェルスとスーパーフレンズの皆さん。
「男女一緒に早く浪江の体育館で練習したい！」

■監督
竹村 弥生さん（北幾世橋）
マリンエンジェルスが結成されてから何度も全国大会に出場していましたが、平成22年度の大会ではじめて3位に入賞しました。震災の日に町長に報告をして、休まずに練習を始めるつもりでした。
震災後、メンバーはばらばらになりましたが、その年の10月に大会に向けて練習を再開。震災で日常がなくなり、綱引きがみんなの心のよりどころになりました。みんなに会いたくて集まっている、強いつながりがあるんです。現在のメンバーは全部で

15名。浪江町に住んでいた人を中心に相馬市や宮城、茨城の人たちもいます。
練習は決して妥協はせず、やるからには成績を残したい。みんなが集まって練習できるのは日曜日だけです。がんばった結果が成績になるから、まだまだ先は見えないけれどがんばっていきます。
■キャプテン
蒔田 和江さん（相馬市）
全国大会では勝ちたくてもなかなか勝てず、「まずは1勝」を目標にずっと続けてきて、ようやく震災の年に全国3位になりました。今までみんな歯をくいしばってがんばってきた結果。「さあ、これから！」というときでした。
震災後は、田村市船引町のアスリートクラブから練習場所を提供してもらい、練習を再開することができました。みんなと一緒に練習することでメンバーのリフレッシュにもなればと思っています。
全国のチームからもたくさん応援してもらいました。この環境に負けず、またゼロからのスタート。全国大会1勝を目指します。
■北 博子さん（棚塩）
全国大会に10年連続で出場すると表彰されるので、それを目指しています。今は7年続いています。いわき市から3時間かけて練習に来ていますが、練習

後は車のハンドルを握るのもつらくなるほどです。高速道路や国道6号が通れるようになるといいですね。
■山本真喜子さん（北幾世橋）
みんなとつながりをもっていたいと思って、練習に参加していません。簡単に切れるメンバーではないですね。
私には綱引きしかありません。全国3位のままで終わらせたくないで、銅メダルを見て「やらなくちゃっ！」と思っています。
■佐藤 芳江さん（北幾世橋）
私は北さんに勧められて始めたのですが、とりあえず10年を目指してがんばっています。先輩方が10年を迎える姿を見たいです。みんながいないと続けていけないですね。
■横山 孝子さん（棚塩）
震災で当たり前のことができなくなり、いつ何があるかわからないと実感しました。チャンスがあるときに、できることはやっていきたいと思っています。全国からの応援やメンバーとのつながりを大切にしています。
■本田真由美さん（北幾世橋）
チーム結成当時からメンバーなので、練習を重ねることが力になることを実感し、それが日々の生活の張り合いでもありました。これまでと環境が変わってしまいましたが、今できることを一杯やって、大切な仲間と一緒にまだまだ綱引きがんばります。



岡田 有一さん・貞子さん(大堀)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：2月8日 「平成25年3月 広報なみえ掲載」

仲間と一緒に飲みながら また浪江の未来や夢を語りたい

岡田さんご夫妻は、現在山形市の借り上げ住宅で生活しています。震災から数カ月間、場所を移動することばかりで先が見えない状態でしたが、今は娘さんご家族、息子さんも近くに住んでおり、山形でやっとほっとして暮らしているそうです。



▲左から貞子さんと有一さん。借り上げ住宅で。お孫さんが遊びに来ると、座布団を滑り台にしたり、押し入れのものを全部出したりと、とてもにぎやかになるそうです。

■**有一さんのお話**
震災時、出張で東京の高層ビルの中におり、ビル同士がぶつかるかと思うほどの揺れを経験しました。家族と連絡がとれず、逃げた場所、放射能の風向きが不安でしたが、車を乗り継いでやっと福島県に戻り、原町で家族と無事会うことができました。その後、国見の友人宅に家族10何人で身を寄せました。その方は、ガソリンを持って迎えにまできてくれ本当にありがたかったです。私たちは一昨年7月から山形に暮らしており、今では

近所の方とも気兼ねなく話をしています。

地域に対して夢や希望を持ち、目標があればいくつになっても”地域のためになんとか頑張ろう”となると思うのですが、いつ帰れるかわからない状態、若い人が継ぐかわからない状態で、絆だけではなんともならなくなってきたように感じています。

こればかりはなんともしようがない問題です。浪江の未来や希望が形になり、全員で一生懸命になれる何か旗印を掲げていくことも大切かと思っています。

高校の同級生6人で思いを綴るノートを40年以上交換し合っており、今も毎月行き来しています。切磋琢磨し合ってきた本当の友だちです。けんかもしませんが、やはり顔を見ないでいられません。またバカになれる仲間とわいわいお酒を飲みながら、夢や未来について本気で語り合いたいですね。

■**貞子さんのお話**
地震による自宅の損傷はありませんでしたが、娘からみんな津島に避難するらしいと聞き家を出しました。夫と息子が出張でおらず、私たちだけでなんとかしなければという思いでした。

祖父母、それに娘とその子どももいたので避難所に長くはいられないと思い、原町の娘の家に避難しましたが、すぐ20km圏内に避難命令があり移動せざるを得ませんでした。もうどうしたらいいかわからなかったですね。今家族はそれぞれ福島、山梨、山形と離れて暮らしていますが、近くに住む孫たちがしょっちゅう遊びに来て家の中がにぎやかになり救われています。

浪江の自宅縁側から見える風景を思い出します。大高倉が見え絵に描いたような風景でした。私たちの住む大堀地区は行事や会合など集まることが多い地区で、みんなが地域のために本気で話し合い暮らしていました。忙しかったけど楽しかったですね。突然やるのがなくなってしまうことが辛いです。そういう状況なので精神的に苦しい方が多いと思います。この間大堀地区の婦人会で集まり、「このままだったらばらばらになっちゃってしまう。一人でいる間も何かやっていこう。」と話になり、それぞれが小物を製作し会合のとき皆さんに渡すつもりです。「大堀の婦人会元気ですよ！」ということ伝えられたらと思います。



京都府

佐々木三千夫さん・由美子さん(西台)

取材者：きょうとNPOセンター 田口

取材日：2月11日 「平成25年3月 広報なみえ掲載」

諦めきれない思いを胸に抱いて・・・

佐々木さんご夫婦は、息子の和幸さんが大学生活を送られている京都に、娘の美紗さんと一緒に避難されています。父の幸夫さんは、少しでも浪江に近い所に居たいということで、いわき市のアパートに住んでいます。この春、美紗さんが高校卒業と大学入学を迎えるのを期に、三千夫さんの仕事に合わせて、郡山市での生活をスタートされます。

間もなく福島県に帰ります。震災の後、2年近く生活をした京都から、「原田時計店」を再開させるため郡山市に移る決断をしました。震災当時は、兄と一緒にやっていたお店の再開の目処もたらず、また娘の学校の心配もあり、家族が近くにいられたらとの思いで泣く泣く福島を後に京都へ移りました。特に、家内は京都での最初の1年は辛かったようです。なぜ、私たち福島の人だけがこのように目に遭うのだろうか、塞ぎ込む日々が続きました。同じ日本であっても、こちらは地震もなく東日本大震災はまるで外国の出来事のように、何もなかったかのように日々が流れていきました。

何より、娘がこの多感な時期に、友だちとの別れもできずに原町高校から一人こちらの高校に転校しながらも、慣れない土地で一生懸命高校生活を送る姿に私たちは支えられました。生まれ育った浪江で、人生を終えていく。それがあたりまえのことだと思っていました。浪江を離れてみて感じたことは、気候は良いし食べ物も美味しい、そんな浪江で普通に暮らしていたこと。人と人とのつながりの中であたりまえのように暮らしていたこと。それが一番ありがたいことだったんだということ。浪江は私たちのいるべきところ。浪江に代わる場所はどこにもありません。かと言って、元の浪江に戻ることは難しいことだと思っています。けれどやっぱり諦めきれません。この先、心の底から笑える日が来るのだろうか、つくづく思います。そんな気持ちを抱えながら、郡山市での生活は、離れていわき市に住んでいる父と私たち夫



▲左から、三千夫さん、由美子さん

婦の3人で、一からのスタートです。懐かしい人との再会や新しい出会いを楽しみに、その人たちとのつながりの中で、私たちの普通の暮らしを築いていきたいと思えます。



苜野陸上クラブ・浪江町陸上クラブ 監督 佐藤 博文さん(苜宿)

取材者：浪江町役場 嶋原・小峰
取材日：2月6日 「平成25年3月 広報なみえ掲載」

一緒にふくしま駅伝を走りませんか

二本松で奥さまと避難生活をされている佐藤さんは、苜野陸上クラブで20年近く指導をなさっていて、ふくしま駅伝では浪江町の監督を務められています。浪江町のチームとして、今後も入賞をめざし継続して参加していきたいと話されます。



▲浪江町駅伝チームの皆さん。
一緒に走りたい方の連絡お待ちしております。

連絡先 浪江町教育委員会生涯学習係 TEL 0243-62-0304
◇浪江町陸上クラブ <http://kaririku.web.fc2.com/ekiden.html>
◇苜野陸上クラブ <http://kaririku.web.fc2.com/>

震災当日、余震による被害を心配して、家族8人でハウスに避難していたところ、自衛隊が原発に向かっていて、原電が危ないと判断して、夜中の内に姉夫婦が住む原町経由で本宮の親戚宅に行きました。翌日、水蒸気爆発のニュースを聞き、親戚も一緒に20人程でいところを頼って東京まで避難しました。それから、2週間ほどお世話になりましたが、仕事

の関係で本宮に戻りましたが、いろいろ考えた末、昨年6月に34年間勤めた職場を退職しました。息子家族と娘たちとは離れて暮らしていますが、妻と両親は同じ二本松にいます。

陸上競技のスポーツ少年団”苜野陸上クラブ“では、基本を大事にする指導を続けてきました。現在もクラブは継続していて、今年も5月から7月まで週1回の練習会と夏合宿を予定し、夏に行われる小学生中心の全国大会を目指していきたいと思っています。

一番に力を入れたのが、ふくしま駅伝で浪江町として走り続ける事です。25年続くふくしま駅伝の1回目から関わってきました。選手がばらばらに避難している今は、選手の情報把握することが大変で参加自体が困難になってきています。浪江でやってきたこと、ふるさとを薄れさせたくない思いがあるから、避難先の学校で活躍している子どもたちにも、浪江町の選手として走ってほしいと願っています。“ふくしま駅伝浪江町を応援する会”を、前監督が中

心となって立ち上げ、以前駅伝を走った子どもの親御さんがバツクアップしてくれました。大変心強く、つながっていることを感じました。2年連続で入賞していましたが、一昨年は参加できただけで喜びでした。昨年は惜しくも入賞を逃しましたが、今年が入賞という目標を持って臨んでいきたいと思っています。

”浪江町陸上クラブ“を春休み立ち上げ目標に動いています。中学生以上を対象に週1回土曜日に活動予定です。トラックを使える練習場所も確保したいと思っています。ホームページも作成しました。ふくしま駅伝と一緒に走りたい子は、ぜひ、連絡ください。

16名のメンバーをそろえて私たちの”浪江町“チームとして走りましょう。



飛田 實さん・エチ子さん(下津島)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 小原

取材日：2月12日 「平成25年3月 広報なみえ掲載」

根は茨城で、心は福島で



▲とても気に入っている今のご自宅をバックに

60歳で退職してから浪江町で果樹園を営んでいた飛田實さん。今は妻エチ子さんと茨城県城里町で静かに暮らしています。

■思い出深い果樹園のこと

経営していた建設関係の会社を60歳のときに後継者に譲って、それから十数年、りんごや梨、桃の果樹栽培をしていました。農業高校の出身なので、ずっとやってみたくて思っていたんです。最初は商売でやる気はなくて、出荷もしていませんでした。たくさん実がなるようになってくると、保育所や高校の子どもたちがりんご狩りや摘果作業で来てくれて、浪江の広報でも取り上げられました。先生の「写真を撮るから」という制止も聞きやしないで、小さな子どもたちがりんご1つを丸かじりでペロ

りと食べてしまう姿をいつも思い出します。高校生のときに1度来た青年が、就職してから里帰りのときにわざわざうちの果樹園に来てくれたりもしました。

浪江では、そうした触れ合いを生きがいに、年中働き通して楽しく過ごしていました。今はそれがピタッと止まったのが悲しいですよ。おとしはストレスで身体も動かなくなっていました。ずっと身体を動かしていた人が動かなくなると、そんなこともあるみたいですね。針灸の先生にお世話になって今は大分良くなりましたけどね。

■避難の中で人の温かみを感じる

会津など3回の移住を経て、昨年の4月までは名古屋にいたんですが、孫の学校のこともあって福島に近い茨城に越してきました。しばらくは水戸にいましたが、周りは若い人ばかり。昼間はいいので交流もなかったり、騒々しかったりで、城里に引っ越しました。これで震災以降住居を変えたのは6回目になりました。今の自宅の周りには家が10軒あって、私たちと同じように高齢者ばかりなので交流がありますよ。孤独が一番辛いですから、人との交流が一番大事です。物やお金ではないと感じます。浪江の友だちと電話で話すのもいつも楽しみにしてる

んです。

名古屋は福島とはずいぶん環境が違ったし、都会だったので田舎育ちには合わなかったけど、地元の人たちに本当に良くしてもらいました。向こうの支援団体が心配して手を差し伸べてくれたのが嬉しかった。交流会も企画してくれて地元の人が手作りでいろんなものを作ってくれた。子どもも、心配して電話してくれたり、親のことを考えていないように考えてるんですね。避難の中で、人の温かみを感じています。失ったものも多いいけど、そればかりじゃないって。

■根は茨城、心は福島

再処理工場や使用済み核燃料の行方が決まらない。そして、福島原発事故だって完全に収束したとは言えない中で、やはり原発は再稼働させないでほしいと思います。原発の事故で私たちも避難生活をしているわけですから。

当然帰れるなら帰りたいという思いがあつて、よく元の家の写真を眺めています。今の家もとても気に入っています。庭が広いので手入れしていくのが楽しみです。65年も浪江にいたから、やっぱり忘れられないし、ふるさとの人に会いたいけどね。根は茨城で、心は福島でやっつけていこうと思っています。



田村とし子さん(小野田)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 徳山

取材日：2月8日 「平成25年3月 広報なみえ掲載」

私の心に咲いた希望という一輪のひまわり

小野田から栃木県日光市の借上げ住宅に避難している田村とし子さん。

とても明るく元気な女性というのが第一印象です。

長男が住んでいる日光市に腰をすえて、ご主人とご主人のお母さんの3人で暮らしています。

地震直後、私はその年の前年度まで小野田地区の民生委員をしていましたので、新任の民生委員の方と一人暮らしのお年寄りの安否確認をしました。そのときに見た光景は、土砂崩れで道が寸断されていたり、地割れでできた段差に大型トラックが今にも横転しそうな状態で止まっていたり、お寺の燈籠や鳥居も倒壊していて、この地震の凄まじさを目のあたりにしました。幸いにも訪問先の人たちの安



▲私を救った『希望』と一緒に

否確認も取れ自宅に戻ってみると、我が家もひどい状態になっていました。ガラスは割れ、家の中はありとあらゆるものが散乱していました。その夜は続発する余震に震えながら、真つ暗な中家族全員で過ごしました。翌日の早朝、避難することになり津島に向かいましたが渋滞のためたどり着くことができず、長男が住んでいる栃木県日光市に避難しました。そのまま4カ月間主人と2人で長男夫婦に世話になり、現在は近くの借上げ住宅を借りて主人と主人の母と3人で暮らしています。震災前、私は浪江町で七宝焼の仕事をしていました。また、自分の工房を持ち作品を制作しながらたくさんの人たちに七宝焼の指導をしていました。しかし、震災後はそんな気持ちにもなれず落ち込んだ日々が続きました。そんな私に東京で一緒に七宝焼を習っていた友だちが、がれきの中に咲く一輪のひまわりの花の写真を見つけ、それを七宝焼で描いて送ってくれました。題名は“希望”とつけ、元気を

出してくれとメッセージも付いていました。その七宝焼の絵を見たとき、胸が熱くなり涙があふれてきました。私はここで何をしているのだろう、みんな前に進んでいるのに、私にもたくさんやれることがあるのにと。そして、浪江の人たちやここでお世話になっている日光市の人たちにも以前のように七宝焼を教えてみたいと思うようになりました。そんな気持ちが強くなっていたとき、二本松の仮設住宅に避難している友人からまた以前のように教えてほしいと声をかけられ、二本松の仮設住宅に行き阿克苏サリー作りの講習をしました。皆さんとても上手に仕上がりが笑顔と喜びを見ることができ、また自分への自信にもつながりました。今では日光市の公民館から七宝焼の講師の依頼を受け、来年度から月2回のペースで始める予定です。恩返しのために行きたいと思っています。そして、たくさんの方の友に恵まれ楽しく前向きに生きて行こうと思います。



福島県

伊達 健三さん・サダ子さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 阿部

取材日：2月12日 「平成25年3月 広報なみえ掲載」

長年住み慣れた自分の家がある浪江町に早く帰りたい



▲伊達健三さんとサダ子さん、愛犬さくらちゃんと

震災前のご長男夫婦と一緒に住んでいましたが、現在はご夫婦と愛犬のさくらちゃんと福島市の借り上げ住宅にお住まいで、まもなく1年になります。

■あの日は何がなんだか

あの日は自然薯を掘りに近くの山に友だちと出掛けていて、地震に遭いました。揺れがおさまると同時に自宅にいる妻が心配で急いで戻りました。妻は近所の人たちと近くの公園に避難していました。自宅の中は物が散乱し、天井は落ちていました。その晩は一緒に住んでいた長男夫婦と4人で庭にテントを張り過ぎました。

次の朝、請戸に住んでいる親戚がやってきて原発のことを初めて聞かされ、着の身着のまま車一台で避難することになりました。朝8時ごろだったと思います。道路はあちらこちら陥没がひどく、また避難する人たちの車でものごい渋滞でした。途中、加倉のコンビニの付近を走っていたとき、時間は定かではありませんが大きな水蒸気爆発の音を聞きました。午後1時くらいに津島高校へ着きましたが人がいっぱい農村広場へ移動し、炊き出しのおにぎりをいただきました。そこでは、白い防護服を着た人たちが手に何かを持って土手を歩いているのが見え、こんな所へはいられないと今度は川俣のリオンドールの駐車場で娘と落ち合い、車の中で一晚を過ごしました。翌日、東和の元小学校へ避難したものの断水で、役場に誘導され二本松の城山総合体育館へ避難し、4日間すごしました。

その後、親戚の友人を頼って山形へ移り3月半ばから2カ月程お世話になりました。娘家族は茨城に避難していましたが、仕事のため福島に戻る娘の代わりに中学を卒業するまで孫の面倒をみるため夫婦で茨城へ引越しをしました。孫が卒業して、いわきの高校へ入学が決つたのを機に福島へ戻ってきました。

■最近「なじよすんだ」としか言葉が出てきません

浪江は暖かかったなあ！雪は降ってもすぐに溶けてしまうので出歩くのにも支障はなかったなあ！定年を迎え、大好きな山歩きや山菜採り、鮎釣りを楽しもうとしていた矢先でしたから本当に悔しい。夜眠れないことも多いですし、寝てもすぐに目が覚めてしまいます。心も落ち着きません。

何度か家に戻りましたが、背より高くなつた草をかき分けないと家までたどり着けません。リフォームしたばかりの我が家が朽ちていくのを見るのは辛いです。家の中を片付けようにもやる気がおきません。妻はもう戻りたくないと言いますが、私はやっぱり浪江に帰りたい。

友だちと話をしても「なじよすんだ」としか言葉がでてきません。自分たちではどうにもできません。早く収束することを願うばかりです。